

# 音 明 寺 第 2 遺 跡

Onmyouji2 Site

東九州自動車道建設(都農一西都間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第81集  
「音明寺第2遺跡」正 誤 表

ページ 図番号	誤	正
p3 第1図下 5行目	14 音明寺第1遺跡 15 東跡原第3遺跡 16 西跡原第2遺跡 17 尾小原遺跡	14 音明寺第1遺跡 15 東跡原第1遺跡 16 東跡原第3遺跡 17 西跡原第2遺跡



音明寺第2遺跡 遠景（東より尾鈴山山系を望む）



第Ⅲ文化層 母岩 1 (チャート18、貝岩5、珪質貝岩5)



第Ⅲ文化層 母岩 2 (黒曜石3、ホルンフェルス9、砂岩3)



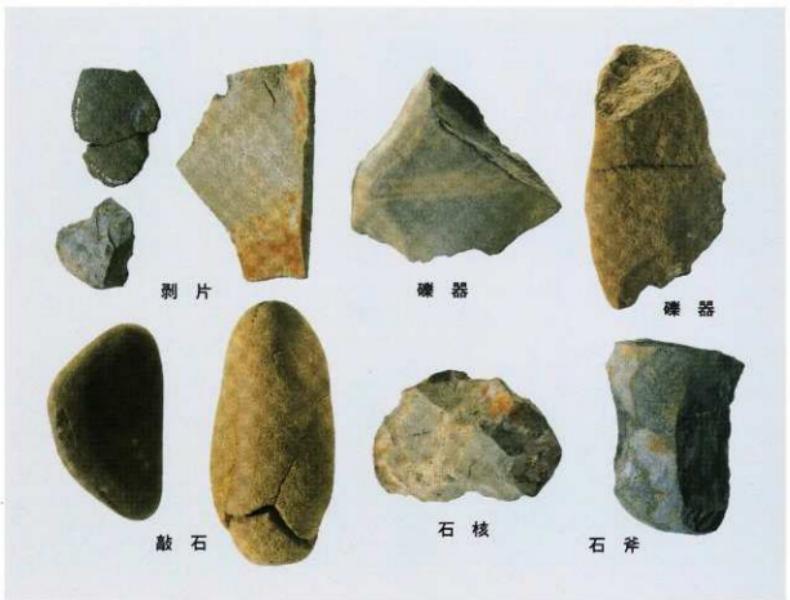
第Ⅱ文化層 母岩 (ホルンフェルス6、貝岩3、珪質貝岩2、凝灰質貝岩2、流紋岩2)



第Ⅲ文化層 出土石器（ナイフ形石器、台形石器、スクレイバー、角錐状石器）



第Ⅲ文化層 出土石器（ナイフ形石器、二次加工剥片、剥片石核、磨石、敲石）



第Ⅰ文化層 出土石器（剥片、敲石、砾器、石核、石斧）



第X層～XIII層 出土石器（ヘラ形石器、亜敲石、石核、砾器）

# 音 明 寺 第 2 遺 跡

Onmyouji2 Site

東九州自動車道建設(都農～西都間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書1であります。

本書に掲載した音明寺第2遺跡は、平成12年度に発掘調査を行い、旧石器時代の遺構・遺物、中世と思われる道路状遺構を確認することができました。特に、旧石器時代の資料では台形石器などを含む石器群など、この時代の歴史を紐解くと思われるものもみられ、今後の旧石器時代研究に寄与するものと考えます。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、郷土を誇りに思う心情を育むとともに、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関や地元の方々、御指導・御助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成15年10月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

## 例　　言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した新富町所在の音明寺第2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測等の記録は、山口 昇、永野高行、東徹志、金丸史絵が行った。
- 4 本書で使用した現地写真については、山口 昇と永野高行が撮影した。また、現地写真の一部は九州航空株式会社に委託した。
- 5 本書で使用した遺物写真については、今塙屋敷行が撮影した。
- 6 自然科学分析（放射性炭素年代測定並びに植物珪酸体分析）は、(株)古環境研究所に委託した。
- 7 土層断面の色調及び一部の石器の色調については、「新版標準土色帖」に掲った。
- 8 石材同定は、松田清孝と赤崎広志が行った。
- 9 石器実測は、一部の実測及びトレースを大成エンジニアリング株式会社に委託し、他は埋蔵文化財センターで整理作業員の補助を得て、山口 昇が行った。
- 10 本書に使用した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50000図をもとに、また、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎事務所から提供の1/1000図をもとに作成した。
- 11 整理作業は、埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、遺物の接合、遺物の実測並びにトレースは、整理作業員の補助を得て、山口 昇、金丸史絵が行った。
- 12 本書に使用した記号は以下の通りである。

S I ……礫群	S G ……道路状遺構	S C ……土坑
----------	-------------	----------
- 13 本書に使用した方位は、主に磁北（M.N.）であり、位置図などの一部は座標北（G.N.）である。また、レベルは海拔絶対高である。
- 14 調査区の割付けは、平成10年度に設置された東九州自動車道新富地区路線測量2級基準点「高-9」と「高-10」の国土座標値を基に設定している。この座標値は、旧平面直角座標系II（日本測地系）に基づく。
- 15 本遺跡の出土遺物並びにその他の諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 16 本書の執筆並びに編集は山口 昇が担当し、製本に向けての最終編集並びに推敲は高橋浩子、谷口武範が担当した。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第4節 報告書の記載について	4

## 第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡名の由来	5
第2節 調査区の設定と調査概要	5
第3節 基本層序	8

## 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 A区の調査	9
1 調査の経過	9
2 A区の遺構と遺物	9
(1) 遺構	9
(2) 遺物	17
3 小結	17
第2節 B区～E区の調査	18
1 調査の経過	18
2 旧石器時代 第Ⅲ文化層の遺構と遺物	18
(1) 第Ⅲ文化層の概要	18
(2) B,C区の遺構	18
(3) B,C区の遺物	22
(4) B,C区の遺物分布状況	44
(5) D区の遺物	52
(6) 小結	52
3 旧石器時代、第Ⅱ文化層の遺構と遺物	53
(1) 第Ⅱ文化層の概要	53
(2) B,C区の遺構と遺構に関わる遺物	53
(3) B,C区における遺構外の遺物	70
(4) D,E区の遺物	77
(5) 小結	82
4 旧石器時代、第Ⅰ文化層の遺構と遺物	82
(1) 第Ⅰ文化層の概要	82
(2) B,C区の遺物	82
(3) 小結	90
5 旧石器時代 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の遺物	90
(1) 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の調査概要	90
(2) 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の遺物	90
(3) 小結	94
第Ⅳ章 自然科学分析	95
第Ⅴ章 結語	101

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図 (1/50,000) .....	3	第 42 図	第Ⅲ文化層接合資料実測図7 .....	42
第 2 図	周辺地形図及び調査区 (1/2,000) .....	6	第 43 図	第Ⅲ文化層接合資料実測図8 .....	43
第 3 図	音明寺第2遺跡調査区 (1/600) .....	7	第 44 図	第Ⅲ文化層遺物分布図3 (1/400) .....	45
第 4 図	基本層序 (1/20) .....	8	第 45 図	第Ⅲ文化層石器実測図9 .....	45
第 5 図	A区道路状遺構全体図 (1/100) .....	10	第 46 図	第Ⅲ文化層石器実測図10 .....	46
第 6 図	A区南西部土層断面図 (1/40) .....	12	第 47 図	第Ⅲ文化層遺物分布図4 (1/400) .....	46
第 7 図	第1号道路状遺構土層断面図1 (1/40) .....	12	第 48 図	第Ⅲ文化層石材別分布図1 .....	47
第 8 図	第1号道路状遺構土層断面図2 (1/40) .....	13	第 49 図	第Ⅲ文化層石材別分布図2 .....	47
第 9 図	第1号道路状遺構土層断面図3 (1/40) .....	13	第 50 図	第Ⅲ文化層石材別分布図3 .....	49
第 10 図	A区南東部土層断面 (縦:1/40, 橫:1/80) .....	13	第 51 図	第Ⅲ文化層石材別分布図4 .....	49
第 11 図	第1号道路状遺構北端部平面図 (1/40), 第1号道路状遺構土層断面図4 (1/20) .....	14	第 52 図	第Ⅲ文化層石材別分布図5 .....	50
第 12 図	第1号道路状遺構 道路使用面の変遷図1 (1/40) .....	14	第 53 図	第Ⅲ文化層石材別分布図6 .....	50
第 13 図	第1号道路状遺構 道路使用面の変遷図2 (1/40) .....	15	第 54 図	第Ⅲ文化層礫分布図 (1/400) .....	51
第 14 図	第3号道路状遺構平面図及び土層断面図 (1/30) .....	16	第 55 図	第Ⅲ文化層礫分析図 .....	51
第 15 図	A区 土坑 (S C) 実測図 .....	16	第 56 図	第Ⅲ文化層 (D区) 遺物分布図 (1/200) .....	52
第 16 図	A区出土遺物実測図 .....	17	第 57 図	V~瞿羅残存域及び遺構分布図 (1/500) .....	54
第 17 図	基本土層模式図 .....	18	第 58 図	B,C区中央部土層断面図 (1/60) .....	54
第 18 図	IV層残存域及び遺構分布図 (1/500) .....	19	第 59 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 3) 実測図 (1/50) .....	55
第 19 図	B区南西部土層断面図 (1/60) .....	19	第 60 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 3) 接合関係図 (1/100) .....	56
第 20 図	C区南西部土層断面図 (1/60) .....	20	第 61 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 3) 分析図 .....	56
第 21 図	C区北西部土層断面図 (1/60) .....	20	第 62 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 3) 出土石器実測図 .....	57
第 22 図	B区南東部土層断面図 (1/60) .....	20	第 63 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 4) 実測図 (1/40) .....	58
第 23 図	IV層礫群 (S I 2) 実測図 (1/20) .....	21	第 64 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 4) 分析図 .....	58
第 24 図	IV層礫群 (S I 2) 分析図 .....	22	第 65 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 4) 出土石器実測図1 .....	59
第 25 図	第Ⅲ文化層遺物分布図1 (1/400) .....	23	第 66 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 4) 出土石器実測図2 .....	60
第 26 図	第Ⅲ文化層石器実測図1 .....	23	第 67 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 5) 実測図 (1/20) 並びに分析図 .....	61
第 27 図	第Ⅲ文化層石器実測図2 .....	26	第 68 図	第Ⅱ文化層礫群 (S I 6) 実測図 (1/20) 並びに分析図 .....	61
第 28 図	第Ⅲ文化層石器実測図3 .....	28	第 69 図	第Ⅱ文化層 S 15,S 16出土石器実測図 .....	61
第 29 図	第Ⅲ文化層遺物分布図2 (1/400) .....	29	第 70 図	第Ⅱ文化層遺物集中域石器分布図 (1/20) .....	63
第 30 図	第Ⅲ文化層石器実測図4 .....	29	第 71 図	第Ⅱ文化層遺物集中域石器分析図 .....	63
第 31 図	第Ⅲ文化層石器実測図5 .....	30	第 72 図	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図1 .....	63
第 32 図	第Ⅲ文化層石器実測図6 .....	31	第 73 図	第Ⅱ文化層遺物集中域石器分布と 接合状況図1 (1/20) .....	64
第 33 図	第Ⅲ文化層石器実測図7 .....	32	第 74 図	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図2 .....	64
第 34 図	第Ⅲ文化層石器実測図8 .....	33	第 75 国	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図3 .....	65
第 35 図	第Ⅲ文化層接合資料分布図 (1/200) .....	35	第 76 国	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図4 .....	66
第 36 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図1 .....	35	第 77 国	第Ⅱ文化層遺物集中域石器分布と 接合状況図2 (1/20) .....	67
第 37 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図2 .....	36	第 78 国	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図5 .....	67
第 38 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図3 .....	37	第 79 国	第Ⅱ文化層遺物集中域石器実測図6 .....	68
第 39 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図4 .....	38			
第 40 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図5 .....	39			
第 41 国	第Ⅲ文化層接合資料実測図6 .....	41			

第 80 図	第 II 文化層遺物集中域石器実測図 7	69	第 100 図	第 I 文化層出土縄分布図 (1/500)	89
第 81 図	第 II 文化層 B,C 区出土石器分布図 (1/500)	72	第 101 図	第 I 文化層出土縄分析図	89
第 82 図	第 II 文化層 B,C 区出土石器分析図	72	第 102 図	X 層～XIII 層の調査グリッド配置と 遺物分布図 (1/500)	91
第 83 図	第 II 文化層出土石器実測図 1	73	第 103 図	X 層～XIII 層の調査グリッド出土縄分析図	91
第 84 図	第 II 文化層出土石器実測図 2	74	第 104 図	X 層～XIII 層の調査グリッド遺物 出土状況 (1/200)	92
第 85 図	第 II 文化層 B,C 区出土石器石材別分布図 (1/600)	75	第 105 図	X 層～XIII 層の調査グリッド土層 断面図 (1/30)	92
第 86 図	第 II 文化層 B,C 区出土縄分布図 (1/500)	76	第 106 図	X 層～XIII 層の調査グリッド出土 石器実測図	93
第 87 図	第 II 文化層 B,C 区出土縄分析図	76	第 107 図	A 区道路状造構における炭化物採取地点 (1/40)	95
第 88 図	第 II 文化層 D,E 区出土石器分布図 (1/250)	78	第 108 図	基本土層 (調査区西壁) における 植物珪酸体分析結果	97
第 89 図	第 II 文化層 D,E 区出土石器分析図	78	第 109 図	第 II 文化層縄群 (SI3) における 植物珪酸体分析結果	97
第 90 図	第 II 文化層 D,E 区出土石器実測図 1	79	第 110 図	第 I 文化層における自然科学分析の 資料採取地点 (1/500)	98
第 91 図	第 II 文化層 D,E 区出土石器実測図 2	79	第 111 図	霧島アワオコシ層直上、霧島イワオコシ層 直上、霧島イワオコシ層直下における植物 珪酸体分析体分析結果	100
第 92 図	第 II 文化層 D,E 区出土縄分布図 (1/250)	81			
第 93 図	第 II 文化層 D,E 区出土縄分析図	81			
第 94 図	第 I 文化層出土石器分布図 (1/500)	83			
第 95 図	第 I 文化層出土石器分析図	83			
第 96 図	第 I 文化層出土石器実測図 1	85			
第 97 図	第 I 文化層出土石器実測図 2	86			
第 98 図	第 I 文化層出土石器実測図 3	87			
第 99 図	第 I 文化層出土石器分布図 (1/500) 及び石器実測図 4	88			

## 表 目 次

第 1 表	第 III 文化層の石器・石材組成	22	第 16 表	第 I 文化層下の石器及び出土層	90
第 2 表	第 III 文化層出土遺物観察表 (1)	28	第 17 表	第 I 文化層下の縄石材及び出土層	90
第 3 表	第 III 文化層出土遺物観察表 (2)	33	第 18 表	X～XIII 層の調査グリッド出土石器観察表	94
第 4 表	第 III 文化層接合資料観察表 1	39	第 19 表	A 区道路状造構における 放射性炭素年代測定結果	95
第 5 表	第 III 文化層接合資料観察表 2	43	第 20 表	基本土層並びに C 区縄群 (SI3) における植物珪酸体分析結果	96
第 6 表	第 III 文化層出土遺物観察表 (3)	46	第 21 表	霧島イワオコシ層直下、霧島アワオコシ層 直上における放射性炭素年代測定結果	98
第 7 表	第 II 文化層縄群 (SI3) 出土遺物観察表	57	第 22 表	霧島アワオコシ層直上、霧島イワオコシ層 直上、霧島イワオコシ層直下における植物 珪酸体分析結果	99
第 8 表	第 II 文化層縄群 (SI4, SI5, SI6) 出土遺物観察表	60			
第 9 表	第 II 文化層遺物集中域出土遺物観察表	70			
第 10 表	第 II 文化層 B,C 区出土の石器・石材組成	71			
第 11 表	第 II 文化層 B,C 区出土石器観察表	74			
第 12 表	第 II 文化層 D,E 区出土の石器・石材組成	77			
第 13 表	第 II 文化層 D,E 区出土石器観察表	80			
第 14 表	第 I 文化層の石器・石材組成	82			
第 15 表	第 I 文化層出土石器観察表	88			
	添付資料遺物及び縄計測表				103

# 図版目次

## 巻頭図版

音明寺第2遺跡遠景（東から）	
第Ⅲ文化層 母岩1（チャート、頁岩、珪質頁岩）	
第Ⅲ文化層 母岩2（黒曜石、ホルンフェルス、砂岩）	
第Ⅱ文化層 母岩（ホルンフェルス、頁岩、珪質頁岩、 凝灰質頁岩、流紋岩）	
第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器、台形石器、 スクレイバー、角錐状石器）	
第Ⅱ文化層出土石器（ナイフ形石器、二次加工剥片、 剥片、石核、磨石、敲石）	
第Ⅰ文化層出土石器（剥片、敲石、砾器、石核、石斧）	
第X層～第XII層出土石器 (ヘラ形石器、敲石、石核、砾器)	
図版1 ..... 161	
第Ⅱ文化層 調査区全景（北東方向から）	
第Ⅰ文化層 調査区全景（南方向から）	
図版2 ..... 162	
第Ⅱ文化層 調査区全景	
A区全景	
第Ⅱ文化層 B,C区全景	
第Ⅱ文化層 D,E区全景	
第Ⅰ文化層 調査区全景	
基本土層	
図版3 ..... 163	
A区拡張前完掘状況	
A区調査区拡張時の道路状遺構平面プラン	
A区南西部完掘状況	
A区 S G 2 完掘状況と土層	
A区 S G 1, S G 4 硬化面検出状況と土層	
A区 S G 3 半截状況と土層	
A区 S G 1 完掘状況	
A区完掘状況（北東から）	
図版4 ..... 164	
第Ⅲ文化層 区遺物出土状況1（西から）	
第Ⅲ文化層 S I 2（西から）	
第Ⅲ文化層 B区遺物出土状況2（北西から）	
第Ⅲ文化層 B区遺物出土状況3（北西から）	
第Ⅲ文化層 C区遺物出土状況1（北東から）	
第Ⅲ文化層 C区遺物出土状況2（北西から）	
第Ⅲ文化層 B区発掘作業風景1	
第Ⅲ文化層 B区発掘作業風景2	

図版5 ..... 165	
第Ⅱ文化層 遺構・遺物検出状況1（西から）	
第Ⅱ文化層 遺構・遺物検出状況2（北西から）	
第Ⅱ文化層 遺物集中域（西から）	
第Ⅱ文化層 S I 3 検出状況（西から）	
第Ⅱ文化層 S I 4 検出状況（南西から）	
第Ⅱ文化層 S I 5,S I 6 検出状況（南西から）	
第Ⅱ文化層 E区遺物出土状況（南西から）	
第Ⅱ文化層 D区遺物出土状況（北東から）	
図版6 ..... 166	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況1（西南西から）	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況2（北西から）	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況3（北西から）	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況4（北北西から）	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況5（北北東から）	
第Ⅰ文化層 遺物出土状況6	
第Ⅰ文化層 発掘作業風景	
第X層～第XIII層の調査グリッド配置（西北西から）	
図版7 ..... 167	
A区出土 須恵器、陶磁器	
A区出土石器	
第Ⅲ文化層台形石器、ナイフ形石器、角錐状石器	
図版8 ..... 168	
第Ⅲ文化層 ナイフ形石器、角錐状石器	
第Ⅲ文化層 台形石器	
図版9 ..... 169	
第Ⅲ文化層 スクレイバー	
第Ⅲ文化層 石核、二次加工剥片、錐、敲石、剥片	
図版10 ..... 170	
第Ⅲ文化層 二次加工剥片、剥片	
第Ⅲ文化層 二次加工剥片、スクレスナー、石核	
図版11 ..... 171	
第Ⅲ文化層 接合資料1 第Ⅲ文化層 接合資料2	
第Ⅲ文化層 接合資料3 第Ⅲ文化層 接合資料4	
第Ⅲ文化層 接合資料5 第Ⅲ文化層 接合資料6	
図版12 ..... 172	
第Ⅲ文化層 接合資料7 第Ⅲ文化層 接合資料8	
第Ⅲ文化層 接合資料9 第Ⅲ文化層 接合資料10	
第Ⅲ文化層 接合資料11 第Ⅲ文化層 接合資料12	
図版13 ..... 173	
第Ⅲ文化層 接合資料13 第Ⅲ文化層 接合資料19	

第Ⅲ文化層 接合資料20	第Ⅲ文化層 接合資料21	図版17 .....	177
第Ⅲ文化層 接合資料22	第Ⅲ文化層 接合資料23	第Ⅱ文化層遺物集中域 接合資料35	
図版14 .....	174	第Ⅱ文化層遺物集中域 接合資料37	
第Ⅲ文化層 接合資料24	第Ⅲ文化層 接合資料25	第Ⅱ文化層 磨石、亜敲石、礫器	
第Ⅲ文化層 接合資料26	第Ⅲ文化層 接合資料27	第Ⅱ文化層 D区 ナイフ形石器	
第Ⅲ文化層 接合資料28	第Ⅲ文化層 接合資料29	第Ⅱ文化層 D,E区 剥片	
図版15 .....	175	第Ⅱ文化層 D区 二次加工剥片、剥片	
第Ⅱ文化層 スクレイパー、二次加工剥片			
第Ⅱ文化層 二次加工剥片、剥片			
第Ⅱ文化層 敲石、磨石		図版18 .....	178
第Ⅱ文化層 亜敲石、敲石、台石		第Ⅱ文化層 D区 接合資料40	
第Ⅱ文化層 S I 4 台石1		第Ⅰ文化層 剥片	
第Ⅱ文化層 S I 4 台石2		第Ⅰ文化層 敲石（亜敲石を含む）	
図版16 .....	176	第Ⅰ文化層 磕器	
第Ⅱ文化層遺物集中域出土 ナイフ形石器、二次加工剥片		第Ⅰ文化層 磕器、石斧	
第Ⅱ文化層遺物集中域 接合資料33		第Ⅰ文化層 敲石、台石	
第Ⅱ文化層遺物集中域 接合資料34		図版19 .....	179
第Ⅱ文化層遺物集中域 接合資料36		第Ⅰ文化層及び第X層～第XIII層 敲石 (亜敲石を含む)	
		第X層～第XIII層 石核、ヘラ形石器、礫器	

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道の都農～西都間は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに平成9年10月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

新富町大字新田字音明寺周辺の工事区は、新富町による遺跡詳細分布図に記載されている音明寺遺跡の縁辺部にあたり、平成6年度の分布調査で推定範囲に入れられた。そして、遺跡名を「音明寺第2遺跡」とし発掘調査を行うこととした。本調査に先立っての確認調査は2回に分けて行った。第一次確認調査は、平成12年6月2日～6月14日のうちの9日間、面積約6,600m<sup>2</sup>を対象とし19のトレンチを設定して行った。この調査で西側谷部約2,900m<sup>2</sup>と町道を隔てた北側斜面部約2,200m<sup>2</sup>を調査区から除外し、構状遺構の一部を検出したことで約240m<sup>2</sup>の調査が決定した。第2次確認調査は平成12年7月24日～8月1日のうちの6日間、面積約2,900m<sup>2</sup>を対象とし9のトレンチを設定して行った。その結果2つのトレンチで小林軽石風成二次堆積層及び始良丹沢火山灰層直下で石器が出土し、始良丹沢火山灰層以下の暗褐色土層で礫群を検出したため、約1,860m<sup>2</sup>の調査が決定した。これらの結果をもとに全調査対象面積を2,100m<sup>2</sup>として、平成12年9月4日～平成13年2月15日まで本調査を実施した。

## 第2節 調査の組織

音明寺第2遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野 剛（平成12・13年度）
	米良 弘康（平成14・15年度）
副所長	菊地 茂仁（平成12・13年度）
	大瀬 和博（平成14・15年度）
	岩永 哲夫（平成12～15年度）
総務係長	亀井 維子（平成12・13年度）
	野邊 文博（平成14年度）
主幹兼総務係長	石川 恵史（平成15年度）
調査第一課長	面高 哲郎（平成12年度調査第一係長兼務・13年度）
	兒玉 章則（平成14・15年度）
調査第一係長	谷口 武範（平成13～15年度）
調査第二係長	長津 宗重（平成12～15年度）

調査第一係主査（調査担当） 山口 昇（平成12～14年度）

同 主査（タ） 永野高行（平成12年度）

調査第二係調査員（タ） 金丸史絵（平成12年度）

同 調査員（タ） 東 徹志（平成12年度）

#### 調査指導

小畑弘己（熊本大学） 泉 拓良（奈良大学） 本田道輝（鹿児島大学）

田崎博之（愛媛大学） 柳沢一男（宮崎大学） 広瀬和雄（奈良女子大学）

加藤真二（文化庁） 佐藤宏之（東京大学） 橋 昌信（別府大学）

宮田栄二（鹿児島県教育委員会） 秋成雅博（清武町教育委員会）

青山尚友・松田清孝（宮崎県立総合博物館）

#### 調査協力

一つ瀬土地改良区

### 第3節 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する新富町は、宮崎平野の北部一角を占める兒湯郡に属し、九州山地を源とする一つ瀬川が南流から東流へと大きく湾曲する流域左岸の沖積平野と、標高70m～90mの台地面にかけて町域を有する。町域の大きな割合を占める洪積台地は、宮崎平野に広がる平坦地の顕著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海拔約120m）、三財原面（海拔約90m）、新田原面（海拔約70m）の3つに分けられる。沖積平野部は、この洪積台地を大きく東西に開析して、ほぼ東流する鬼付女川によって形成された急峻な谷の底部と、一つ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の4～5の砂丘面に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。また、本町は、北に高鍋町、西に一つ瀬川を界し西都市、南に同じく一つ瀬川を界して佐土原町と接しており、東に日向灘を臨む位置にある。

本書で報告する音明寺第2遺跡は、鬼付女川左岸、三財原台地上の丘陵部南東斜面（標高約90m）に位置する。調査地周辺は、西側に丘陵からの開析谷が接し、谷は南東方向に下っている。また、この谷下には湧水点も存在する。今回の調査においては旧石器時代の遺構・遺物と、古代から中世にかけての遺構と推測される道路状遺構が検出されたことから、周辺の遺跡分布状況については、同時期と推察される遺跡について概観したい。

旧石器時代では、これまで町内で発掘調査された遺跡は4箇所と少なく、いずれも新田原台地上に位置する。これらの遺跡では、縄文時代草創期の遺物を含み、集石造構に伴って遺物が出土した例が多い。町内最古の例としては溜水遺跡でナイフ形石器が出土しており、その他の遺跡では細石器が多い。町内出土の細石器の多くは、畦原地区を中心に表探・分類された「畦原型細石核」と呼ばれるもので、南九州を代表する標識資料となっている。また、近年においては、東九州自動車道建設に伴う発掘調査で、三財原台地上における旧石器時代の遺構・遺物が次々に検出され、その報告が待たれる。

古代から中世にかけては、14世紀頃まで営まれた集落を検出した上園遺跡、町南部の河岸段丘面には古墳時代後期から中世の住居が確認された北田遺跡、縄文時代後期から中世までの各種遺構が確認された祇園原地区遺跡がある。しかし、古代から中世の集落については資料が少ない。



- |            |            |            |           |
|------------|------------|------------|-----------|
| 1 濑戸口遺跡    | 2 新田原遺跡    | 3 山之坊遺跡    | 4 丸尾B遺跡   |
| 5 平伊倉A遺跡   | 6 溜水遺跡     | 7 北田遺跡     | 8 上菌遺跡    |
| 9 犬園原地区遺跡  |            |            |           |
| 10 音明寺第2遺跡 | 11 唐木戸第3遺跡 | 12 小並第1遺跡  | 13 牧内第1遺跡 |
| 14 音明寺第1遺跡 | 15 東畦原第3遺跡 | 16 西畦原第2遺跡 | 17 尾小原遺跡  |
- (1～9までは、新富町による調査遺跡。10～17は東九州自動車道建設に伴う調査遺跡)

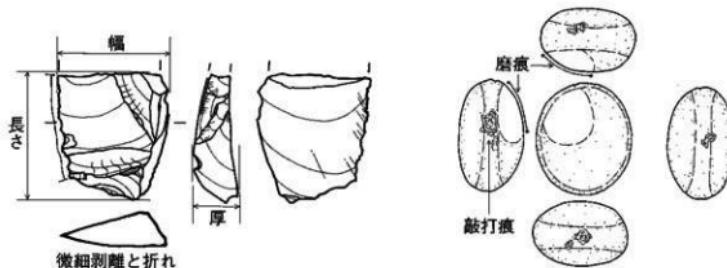
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

#### 第4節 報告書の記載について

- 1 本遺跡では全調査区を西からA～E区に分けて表記している。
- 2 遺物実測図の挿図の縮尺は次のとおりである。

・ 基本的な縮尺………2/3	・ 最大長が1cm未満の石器………1/1	
・ 最大長が10cm以上の石器………1/2	・ 須恵器、陶磁器、疊塊石器………1/3	・ 台石………1/4
- 3 遺物実測図以外の挿図の縮尺は次のとおりである。

・ 遺跡周辺図………1/2000、1/50000	・ 道路状遺構関連図………1/20、1/30、1/40、1/100
・ 土層図………1/20、1/30、1/60	・ 疋群実測図………1/20、1/40、1/50、1/100
・ 遺物出土分布図………1/20、1/200、1/250、1/400、1/500、1/600	
- 4 図版の縮尺（遺構・遺物写真等の縮尺）については統一されていない。
- 5 石器観察表の計測は下記の方法による。法量の単位はcm（最大長・最大幅・最大厚）とg（重量）である。
- 6 石器実測図の中の記号・表示は以下のものを示す。
  - ・ 石器の節理面は一点鎖線で表示する。
  - ・ 微細剥離が確認された部分は、 の記号を用いてその範囲を示す。
  - ・ 「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に の記号を記す。
  - ・ 敷打痕、磨痕は下記の要領で記す。



- 7 本報告書に記載する疊群について  
S I 1はA区の道路状遺構に存在したが、擾乱土層中のものと判断し、遺構から除外する。そこで本報告書の疊群は S I 2～S I 6の遺構番号を用いる。
- 8 本報告書に記載する遺構・遺物・文化層の順番について  
本遺跡の調査にあたって、道路状遺構の調査を終了させてから旧石器の調査を始めた。さらに旧石器時代においては時代をさかのぼるにつれ、遺物が風化し人為的な痕跡が不明瞭となる。そこで本報告書では、より明確に考察できるものを優先し、時代を遡る順序で記載することとした。

[道路状遺構]→[第Ⅲ文化層]→[第Ⅱ文化層]→[第Ⅰ文化層]→[第Ⅰ文化層の下]
- 9 本報告書に記載する層序について  
層（テフラ、ローム層）の略称は、平成14年度の「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ」第Ⅰ章第4節の記載に準ずる。
- 10 本報告書に実測図が掲載されている遺物については、各文化層ごとに観察表をつけてある。それ以外の疊を含む遺物観察表は、添付資料遺物及び疊計測表に記している。

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 遺跡名の由来

音明寺を小字名とするこの地区は高鍋町との町境にあり、世帯数7軒の小さな集落である。字名の由来を示す寺は痕跡すら今なく、ただ地域の古老がかつての寺の存在だけを語るのみとなっている。現在は新富町の町域となっているが、高鍋町（高鍋藩）との関わりも大きいと考えられることから両町の町史を調べると、「寛政6（1794）年 幕府は無壇、無本寺で無住の寺院を廃寺にするよう命じる」<sup>\*1</sup>、「明治2（1869）年 高鍋藩は、微禄無壇の寺院を本院に合併。無住職寺院の堂舎を取り除き地所引き払いを申請」<sup>\*2</sup>とのいずれも江戸時代における史実がある。

明治時代になると、「文献資料で確認できる廃寺29寺院、そのうち廃仏毀釈により明治4年までに廃寺となったもの15寺院」<sup>\*1</sup>とあるが、その中には「音明寺」は含まれていない。また、高鍋町史には「明治維新になって廃仏毀釈運動が起こり、町内の多くの寺々が廃された。町内には廃寺の後が多く残り、小字の名となっているところもある」<sup>\*2</sup>と記載されている。

これらのことから、江戸時代～明治時代初期にかけて、地区に「音明寺」と呼ばれる寺が実在した可能性は高い。さらに、この寺は町の寺院の末寺で、無住職の小さな寺と推察される。この点については、郷土史の調査と合わせて今後の解明に期待したい。

\*1 ……「新富町史」より抜粋 \*2 ……「高鍋町史」より抜粋

### 第2節 調査区の設定と調査概要

本遺跡の現況は、台地から南東方向に下る舌状の丘陵部を東西に押し広げて平坦とした耕作地を主体としており、この農地整備の際の削平によりアカホヤ層は存在しない。また、調査区北西部に向けて標高が高くなるにつれ土層の深い部分まで削平が及んでいる。遺跡の西側は北西方向から南西方向に下る幅約50m、深さ約4mの谷と接しており、西方向と南方向は急な傾斜となっている。

本調査に先がけて実施した確認調査では、前述の谷部（約2,900m<sup>2</sup>）及び町道を隔てて北方向にある南東向きの緩斜面（約2,200m<sup>2</sup>）において遺構・遺物ともに検出されなかった。そこで、山芋の栽培のため2m以上の搅乱を受けている平坦部東側の約3分の1と、削平の影響の大きい町道沿いを合わせて調査対象外とし、今回の調査では、調査対象面積16,800m<sup>2</sup>のうち約2,100m<sup>2</sup>を調査区として設定した。

この調査区に、国土座標軸に準じ南北A～K、東西0～10の10m×10mのグリッドを設定し、グリッド法による調査を進めた。さらに遺構の性格並びに土層堆積状況を考慮してA～Eの5区に分けた。

A区は丘陵部の西側斜面で谷に接する区域である。表土を剥ぐとイワオコシ層あるいは粘性の高い明褐色土層が表出し削平の影響を大きく受けている。また、残存する地層で旧地形を復元すると、現在の地形よりも緩やかに谷に向かって下っている。ここでは、構築技術の異なる4条の道路状遺構と土坑を検出した。そのうち1条の下部硬化面から古代の須恵器が出土した。

B区は谷に向かって下る南側斜面で、南下するにつれ削平された搅乱土が厚く堆積するが、小林軽石を含む褐色土層から下の層が自然堆積の状態で残存していた。旧地形における斜面はA区と同様で現地形よりもゆるやかである。ここでは、台形石器やスクレイパーなどの石器や測定等の旧石器時代の遺物が出土し、礫群も1基検出した。

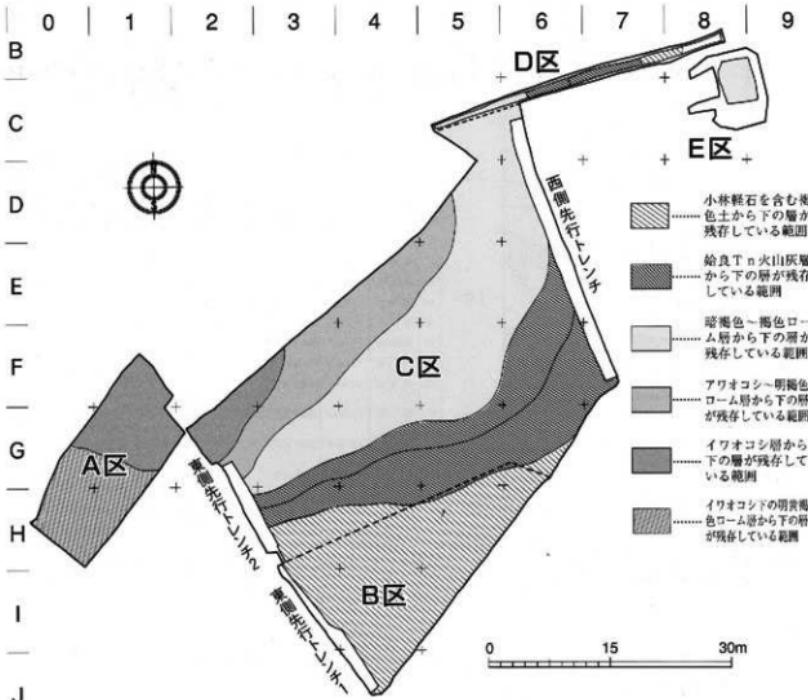


第2図 周辺地形図及び調査区 (1/2,000)

C区は丘陵を削平してできた耕作地の中心部で、表土を剥ぐと北西方向に向かって順に始良丹沢火山灰層や霧島イワオコシ層が表出した。町道付近は礫を含む明褐色の粘質土層で無遺物層と判断し、調査事務所並びに駐車場を設置した。ここでは、B区と同じ残存する小林軽石を含む褐色土中よりナイフ形石器やスクレイバーが出土した。また、始良丹沢火山灰層直下で遺物集中帯も検出した。さらに、始良丹沢火山灰層下の黒褐色土層や、霧島アワオコシ層直上の明褐色土層より敲石や台石、礫器等が出土し、黒褐色土層中で4基の礫群も検出した。

D区は長さ約40m、幅約1mの細長い調査区である。町道に沿って埋設された農業用水道管と前述の山芋の作付けで搅乱を受けた区域の間にわずかながら自然堆積層を成す部分が残っていた。この部分は丘陵の東斜面にあたり、旧地形も緩やかに東に向けて下っている。ここでは、始良丹沢火山灰層の下からナイフ形石器等が出土した。

E区は旧地形の丘陵東斜面にあたり。約3mの高低差がある東側の耕作地に向けて、旧地形の確認と残存する自然堆積層を確認する目的で調査した。搅乱土が厚く堆積しており、始良丹沢火山灰層下の黒褐色土層中位から自然堆積層を確認した。数点の剥片が出土する。



第3図 音明寺第2遺跡 調査区 (1/600)

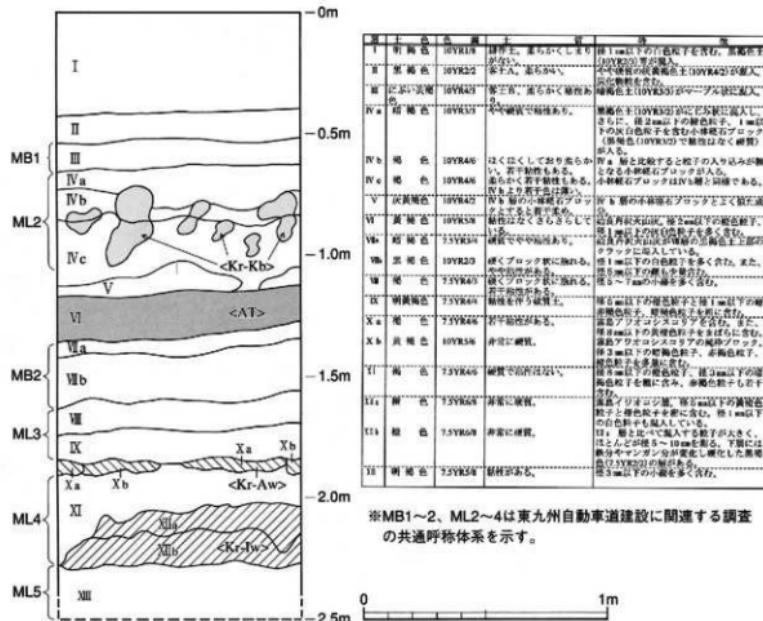
### 第3節 基本層序

音明寺第2遺跡の基本層序は、小林軽石を含む褐色土層から下の層が比較的良好に自然堆積しているB区東部の先行トレンチの土層をもとにし、調査の進歩過程で明確になった霧島アワオコシ層から下の層を付加するとI～XIII層に分けられる。この層序は、三財原台地上で確認されている層序と共通している。前節で述べたように、C区北西部は削平の影響を受け残存層は少ない。加えて牛蒡の作付けにより地表から約50～60cm程度トレンチャーによる擾乱を受けていた。また、A, D, E区においても削平や作物の作付けによる影響を少なからず受けている。

鍵層としては、IV層の褐色土中に含まれる小林軽石〔Kr-kb〕（約15,000年前）、VI層に姶良丹沢火山灰〔AT〕（約24,000年前）、X層で霧島アワオコシ〔Kr-Aw〕、XII層で霧島イワオコシ〔Kr-Iw〕を確認した。

遺構並びに遺物を包含する層は、A区の道路状遺構の埋土を除いて、IV層の褐色土、VII層の黒褐色土、Ⅸ層～IX層の褐色土～明黄褐色土といった旧石器時代の3層である。

なお、当時の植生や環境を復元するため、植物珪酸体分析を行っている。その結果については、遺構並びに各文化層における小結に記すとともに、第Ⅳ章に掲載した。



第4図 基本層序 (S=1/20)

## 第Ⅲ章 調査の記録

### 第1節 A区の調査

#### 1 調査の経過

A区は本遺跡が立地する丘陵部西側斜面に位置する。旧地形では西側の谷地形に向けて斜面が形成されていたが、現在は丘陵部を削平した際の土砂が谷部東側に堆積し、やや急な傾斜となっている。

この区域では、確認調査の際に1つのトレンチで霧島イワコシ層～明褐色土層にかけてV字状に掘り込まれた遺構を確認した。そこで、本調査ではこのトレンチを中心として、遺構があると推測される範囲約110m<sup>2</sup>の表土を除去した。その結果、北側部分は削平の影響で痕跡が消えるものの、谷に向かってS字状を呈しながら掘り込まれた遺構の平面プランを確認した。さらに、この遺構の全容を把握するため、南東側と谷部に向かう南西側を合わせて約100m<sup>2</sup>拡張して遺構検出にあたった。

検出当初は「溝状遺構」と考えたが、湾曲部分の外側が水流による浸食作用を受けていないことや、掘り込み下部に硬化面があること。また、底面の一部にピット状の掘り込みもあることから、「道路状遺構」と判断し、最終的には4条の道路状遺構と1基の土坑を検出するに至った。

#### 2 A区の遺構と遺物

##### (1) 遺構

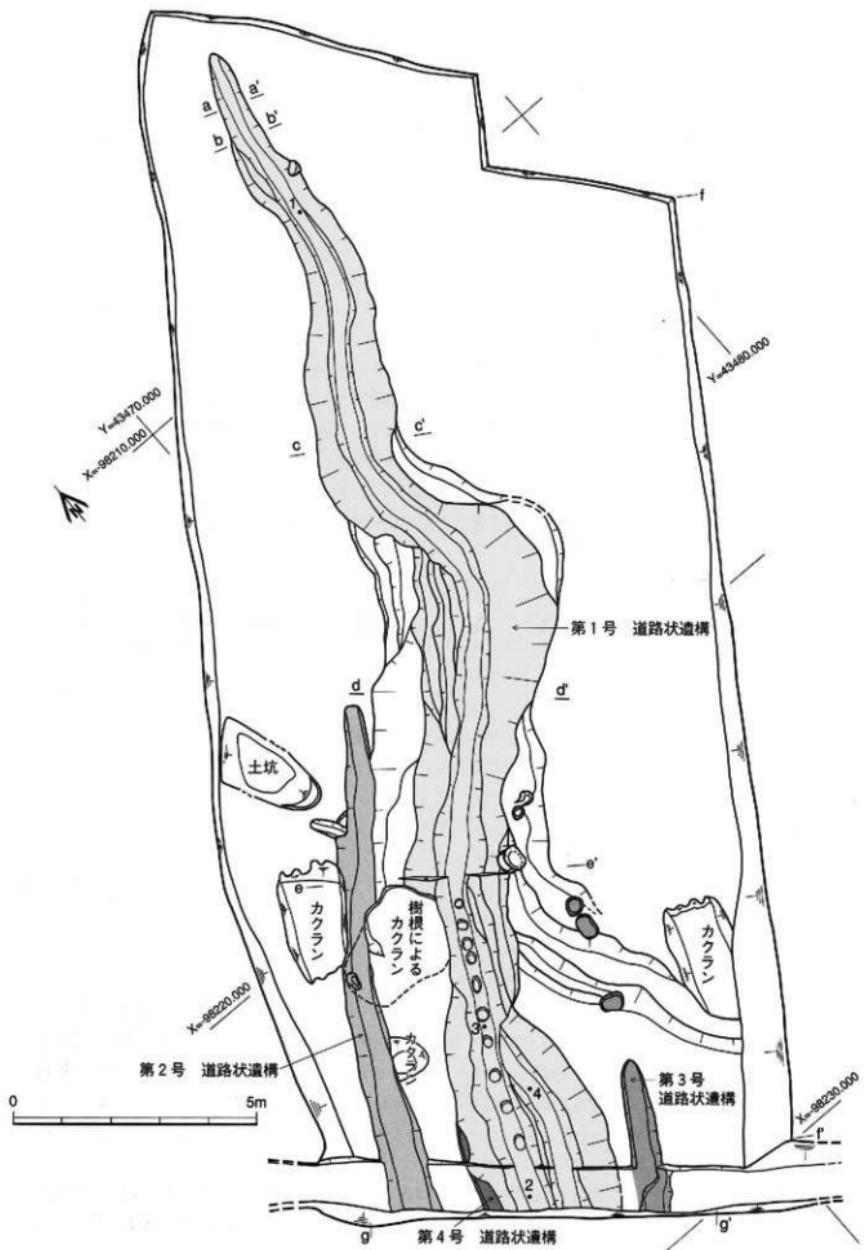
###### 第1号道路状遺構（SG1）

A区中央部、谷部に向かってS字状を呈して伸びる本遺構は現存長約26mを測り、主軸は概ね北北東～南南西の方向を取る。北北東部分は削平の影響を受け消滅しているが、南南西方向（谷部方向）に約2m下りながらその様相を明らかにしている。幅は上面で約0.5～3m、深さは完掘状態で最大約1mを測るが、検出面は霧島イワコシ下の明褐色土層（XIII層）であるため、本来は幅、深さともに現在より規模の大きい遺構であったことが推測される。断面は上部が大きく開くV字状を呈している。

硬化面は部分的に消失しているが、幅約25～30cm、厚さ約4～25cmで遺構底部に形成されており、谷部に近いほど良好な状態で残存していた。この硬化面は主に径3cm以下の礫層、砂層または灰色土層、赤褐色粒子と灰色粒子並びに黒色粒子が固まった層の3つで構成され、各硬化土層断面における1つの層に含まれる割合は異なるものの、基本的にはこの3層の繰り返しによって形成され、谷に近いところでは厚く非常に硬い硬化面となっていた。この硬化面が谷部に近づくにつれ厚さを増すことや、他の道路状遺構の下部にも類似した硬化面が見られることを合わせて考えると、人為的な土木工事（版築）によって形作られた可能性が高いと考えられる。

また、谷部に近い硬化面の下からは直線距離にして6mの間に10基のピットを確認した。これらのピットは長径約22～32cm、短径約16～24cmを測り多くは楕円形を呈している。ピットの並びを円の中心間距離でみると約30～70cmとまばらで、深さは約1～3cmと浅い。このような傾斜地における道路状遺構に伴うピット列は、隣接する音明寺第1遺跡や都城市の大岩田村上遺跡でも検出されており、その目的もまだ明確ではない。しかし、地形をみると降雨の際は水路になることは明らかであることから、硬化面の流失を防ぐ目的があったものと推測できる。

さらに、遺構の完掘までの過程で谷部付近は5期にわたって道路使用面が変遷している様相が土層断面及び埋土の状況から看取された。（第6図）第1～第2期にかけては曲がった道を直線的に変え、第



第5図 A区 道路状造構全体図 (S=1/100)

2～第3期にかけては硬化面を厚くしつつ幅を広げ、第3～第5期にかけては堆積する土を活用し幅を広げていると考える。また、第4～第5期にかけては新たな硬化面の形成は見られない。

この道路状造構が構築された時代に関して確証となる遺物は出土していない。北東部の硬化面中から8世紀後半の遺物と想定される須恵器の壺蓋の一部が出土しているものの、流れ込んだ可能性が高い。放射性炭素分析の結果（第IV章）より、中世から近世にかけて構築され、少なくとも数十年間利用された道ではないかと推定される。

#### 第2号道路状造構（SG 2）

A区北西部、谷部に向かってほぼ直線的に伸びる道路で、現存長約10.5m、幅約70～90cmを測り、主軸はほぼ北東～南西方向を取る。削平の影響で北東部は消滅しているほか、部分的に樹根や重機による搅乱を受けている。谷部に向けての造構底部の高低差は約1.5mで、断面は上部がやや開くU字状を呈しており、SG 1と比べてやや急な傾斜をもつスロープ状の道である。硬化面は径3cm大の砂礫を含む單一の暗灰色層である。断面と硬化層がSG 4とよく似ており、SG 4はSG 1に切られていることから、SG 1よりも古い可能性がある。

#### 第3号道路状造構（SG 3）

SG 2からSG 1を挟んで反対側に位置するのがSG 3（第14図）で、削平の影響を顕著に受けているものの、この区における道路状造構の中で最も複雑な構築技術を看取できる。SG 3は、主軸を北北東～南南西方向に取り、約2m延びる。さらに、南西方向に約20°向きを変え、約5m延びる。残存部の幅は約35～60cmを測り、不連続な7基のピットを確認した。ピットは長径約36～60cm、短径約30～48cmを測り、一部不正形ながら概ね橢円形を呈している。また、深さは最大約22cmになる。連なるピット間の距離は中心部で約60～66cmとはほぼ均一で、空白部分にもこの間隔でピットが復元できることから、削平の影響で消滅したものがあると考えられる。

これらのピットの埋土には、造構の周辺には見られない緑黒色土（第2、5、9層）が入っており、非常に硬質であることから人為的な土木技術（版築）が導入されている可能性もある。

SG 3の構築については、まず明褐色土（第XIII層）まで断面上部がやや開くU字状の道を作り、この道の立ち上がりよりやや広めのピットを約60cmの間隔で掘り込む。そして緑黒色土を持ち込み版築等の技術を用いて固め階段状にし利用したのではないかと推測できる。約60cmのピット間の距離は、成人の歩幅としては若干広いが、谷への往来を考えると十分活用可能である。このような目的でピットを形成し階段状の道路として活用した例は少なく、構築時期を含めて今後の解明に期したい。

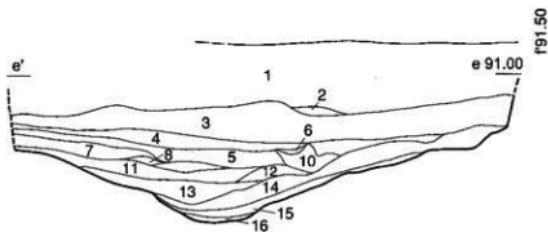
#### 第4号道路状造構（SG 4）

調査区の南西部土層を観察した際、SG 1とはレベルの異なる硬化面の存在と、平面プランの一部がわずかに2m程確認できたことからこれをSG 4とした。硬化面は硬質の暗褐色土單一層で、SG 2の硬化面と酷似している。残存する部分がわずかであることから断定はできないが、SG 1に切られていることから構築時期はSG 1以前であろう。SG 2同様のスロープ状道路であったと推察する。

#### 土坑（SC）

調査区北東部の壁沿いで検出した土坑（第15図）の平面プランは、南北方向に長径約2.5m東西方向に短径約1.2mを測る不定形で、礫を含む軟質の明褐色層に掘りこまれ、深さは約70cmを測る。埋土はほとんど霧島イワオコシの搅乱層で、時期及び用途については不明である。

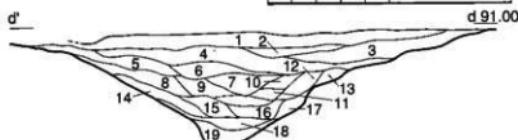




第1号 道路状造構 土層断面図2 (e'-e) 土層注記

層	土色	風化	特
1	10YR4/4	硬くしまっている。	層1-2mの表面部は黒褐色を含む。3m以上は茶褐色である。
2	灰褐色	7.5YR3/0	層1-2mの表面部は茶褐色を含む。3m以上は茶褐色である。
3	暗褐色	10YR3/4	硬くしまっている。
4	褐色	10YR4/6	半硬質。
5	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質。
6	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質。
7	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
8	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
9	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質。
10	褐色	10YR4/6	半硬質。
11	暗褐色	7.5YR4/0	硬くしまっている。
12	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
13	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質。
14	褐色	10YR4/6	半硬質。
15	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質。
16	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。

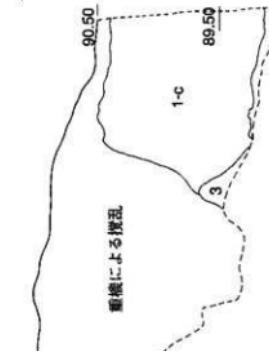
第8図 第1号道路状造構 土層断面図2 (e'-e) (S=1/40)



第1号 道路状造構 土層断面図3 (d'-d) 土層注記

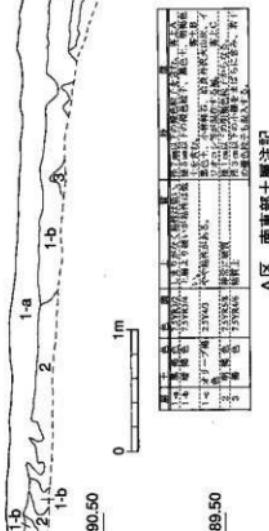
層	土色	風化	特
1	褐色	7.5YR4/6	柔らかくやや崩れ易い。
2	暗褐色	7.5YR3/0	硬くしまっている。
3	暗褐色	7.5YR3/0	硬くしまっている。
4	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
5	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
6	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
7	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
8	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
9	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
10	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
11	褐色	10YR4/6	硬くしまっている。
12	褐色	10YR4/6	崩れがあり、やや硬くしまっている。
13	暗褐色	7.5YR3/0	崩れがある。
14	褐色	10YR4/6	柔らかく崩れ易い。
15	暗褐色	7.5YR3/0	半硬質である。
16	暗褐色	7.5YR3/0	硬くしまっている。
17	褐色	10YR4/6	硬くしまっており堅密である。
18	褐色	10YR4/6	硬くしまっており堅密である。

第9図 第1号道路状造構 土層断面図3 (d'-d) (S=1/40)



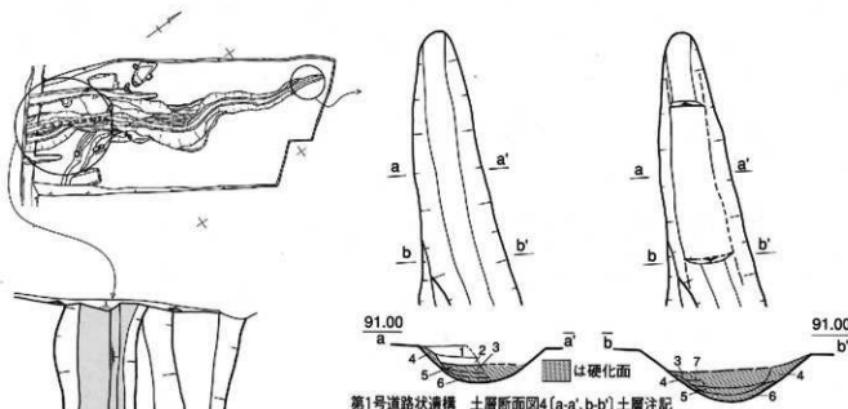
樹根による擾乱

2m  
0



A区 南東部土層断面図

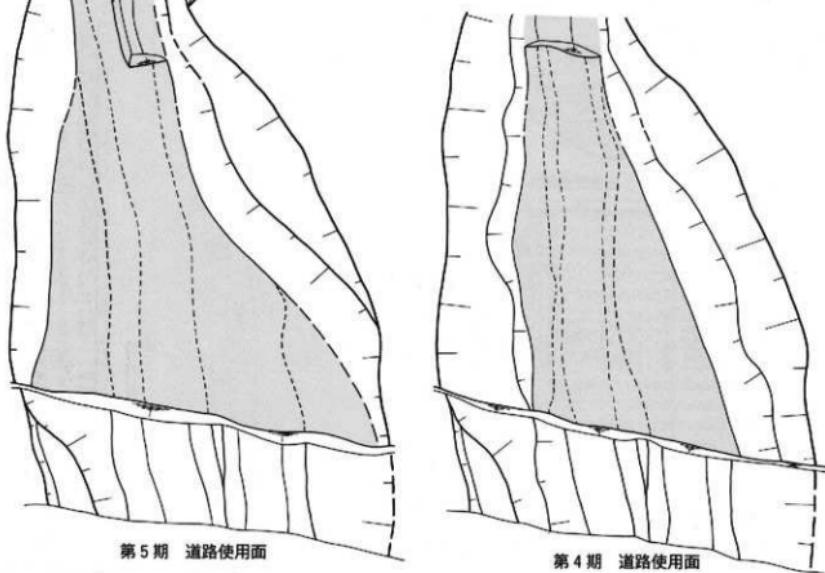
第10図 A区南東部土層断面図  
(縦S=1/40、横S=1/80)



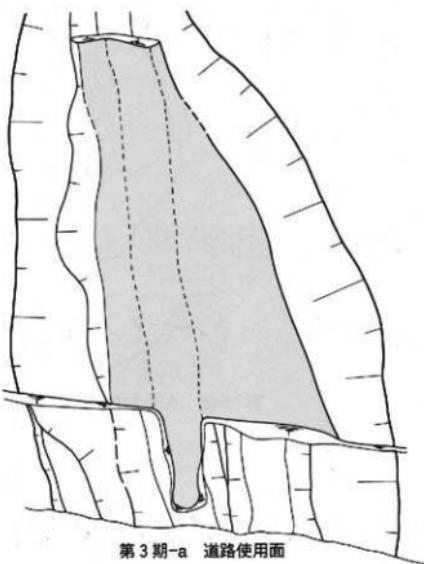
地盤区分	地盤名	特徴
1	堅硬土	堅硬な土質で、表面に砂利などの充積物がある。
2	軟弱土	堅硬な土質より軟弱な土質である。
3	泥炭	泥炭地帯に発達する。
4	砂	砂地帯。
5	堅硬土	堅硬な土質である。
6	軟弱土	堅硬な土質より軟弱な土質である。
7	泥炭	泥炭地帯に発達する。

第11図 第1号道路状造構 北端部平面図 ( $S=1/40$ )、  
土層断面図4 [a-a', b-b'] ( $S=1/20$ )

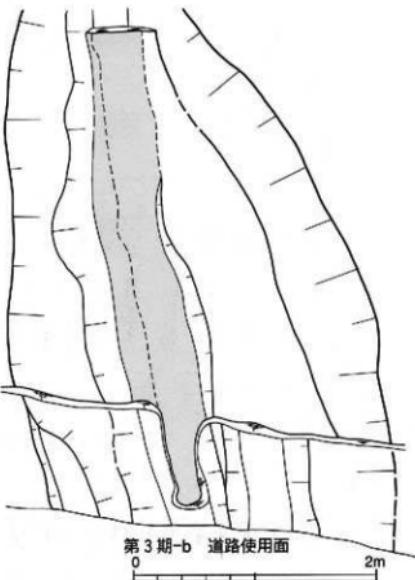
0 2m



第12図 第1号道路状造構 道路使用面の変遷図1 ( $S=1/40$ )

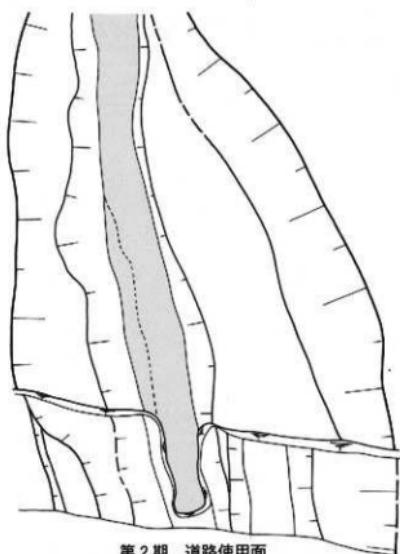


第3期-a 道路使用面

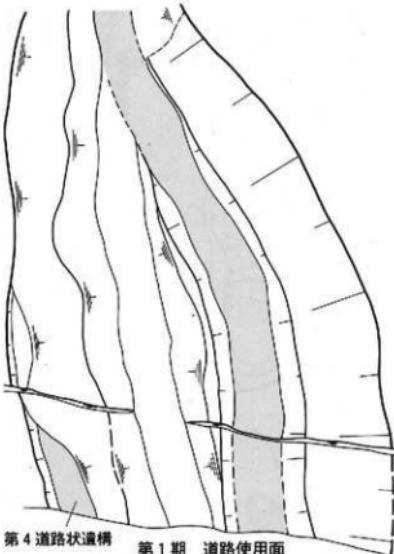


第3期-b 道路使用面

2m



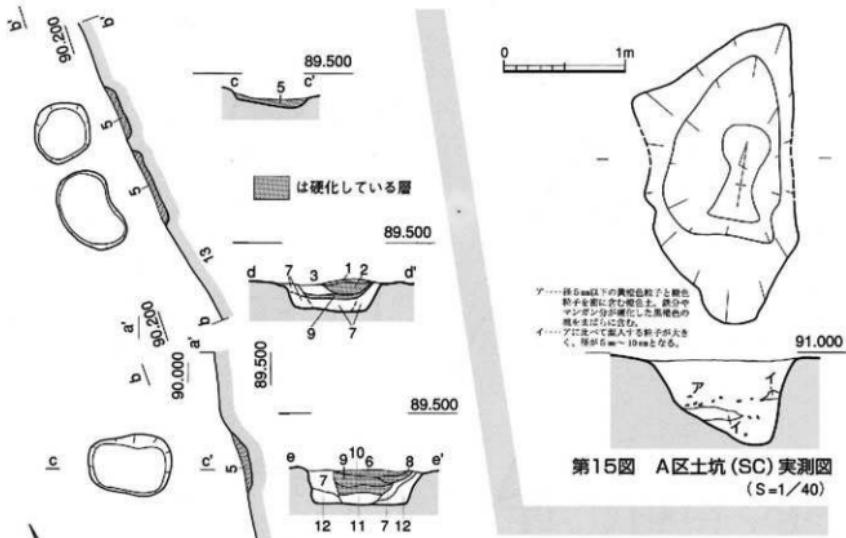
第2期 道路使用面



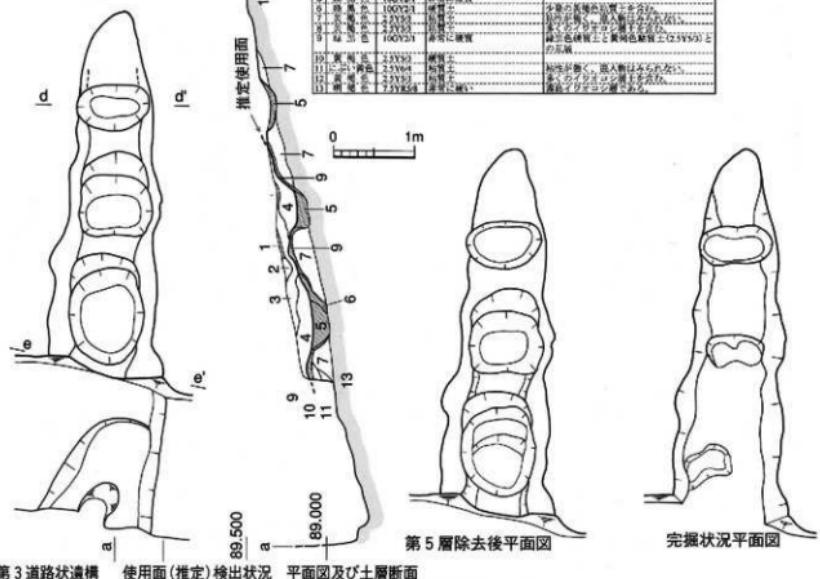
第4 道路状遺構

第1期 道路使用面

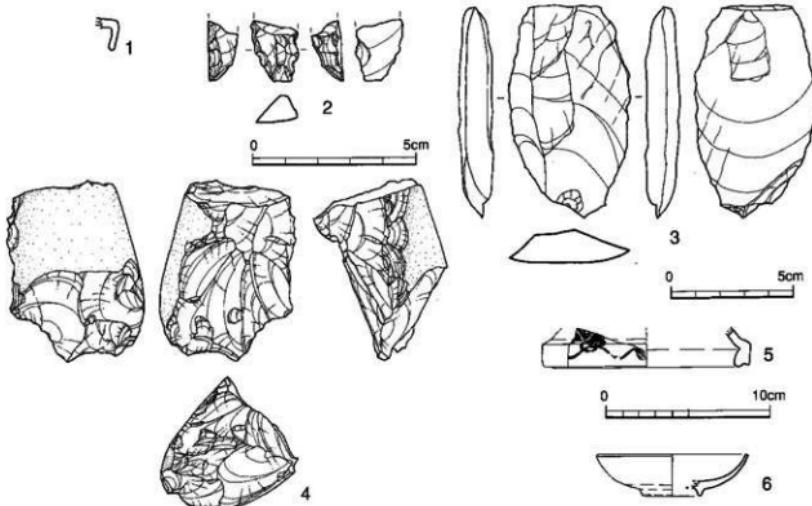
第13図 第1号道路状遺構 道路使用面の変遷図2 (S=1/40)



第15図 A区土坑(SC)実測図  
(S=1/40)



第14図 第3道路状構造平面図及び土層断面図 (S=1/30)



第16図 A区出土遺物実測図 (2.4はS=2/3、3はS=1/2、他はS=1/3)

## (2) 遺 物

1は須恵器の短頸壺蓋である。SG 1の北側の硬化面下層（第11図 5層）より出土した。内外面ともに横ナデが施され、肩部には自然釉が見られる。『古代の土器1:都城の土器集成Ⅰ』の編年によると、8世紀後半に位置付けられる。

2～4は石器である。いずれもSG 1の埋土中やや上位で出土した。道路状遺構が自然に埋まる過程で混入したものと考えられる。2は上部が折れにより欠損した細粒砂岩製の角錐状石器で、両側縁部に細かな調整が施される。3はホルンフェルスの測片、4は珪質頁岩製の石核である。いずれも他の区の出土遺物と照合すると、旧石器時代後半の小林蛭石を含む褐色土（第IV層）の遺物と推察される。

5～6は磁器で調査区の搅乱層中より出土した。5は蓋である。钢板転写による宝文が施されており、近代のものと思われる。6は近世の白磁皿である。口縁部は輪花口縁、底部内面は蛇の目釉刷ぎの後泥絆を塗っている。また、疊付は釉を焼成後に削り取った様相が見られる。この2点は、いずれも比較的新しく道路状遺構の構築年代に直接関わる遺物ではない。丘陵部の削平時に混入したものと考えられる。

## 3 小 結

A区で検出した4条の道路状遺構は、いずれも調査区西側に隣接する谷部から北西方向の丘陵部に向かっている。つまり、遺跡の北西方向には何らかの人の営みがあり、そこから湧水を求めて往来した道路と推察できる。そして、谷部に下る際の傾斜を緩和する目的でV字状の切り込みやスロープ、階段等の構造をもつ道路を構築したと考える。また、この道路は降雨の際は水路となり、谷部に向けて水のはけ口になっていたとも考えられる。今後、周辺微地形や地区的伝承、隣接する音明寺第1遺跡で検出された道路状遺構との関連性を踏まえて更なる遺構の性格付けをしていきたい。

4条の道路状遺構の前後関係は、切り合い関係と構築技術を考慮すると、SG 2とSG 4が最も古く、SG 1がSG 4を切っていることから、その後SG 1とSG 3が構築されたものと考える。SG 1とSG 3は切り合い関係がないので前後関係は不明である。

## 第2節 B～E区の調査

### 1 調査の経過

南側の谷部へと下る斜面部分のB区と農地整備で丘陵を削平してきた平坦地のC区は調査区のはば中央に位置する。また、D、E区は丘陵部東斜面部に位置し、山芋栽培による擾乱や削平の影響を大きく受けている。

この区域では確認調査の際、B区に設定した2m×2mのトレンチの1つから台形石器やナイフ形石器を含む41個の遺物が小林軽石を含む褐色土(IV層)から出土した。また、D区のトレンチでは始良丹沢火山灰層直下の暗褐色土(VII層)からナイフ形石器を含む20点の遺物が出土し、C区では同じく暗褐色土(VII層)から蝶群を検出した。そこで本調査においては2つの文化層を想定し、旧石器時代の遺物・遺構の検出を主眼に置いた。さらに、本調査中に設定した確認トレンチのⅦ層から蔽石と剥片の2点が出土したことから、Ⅶ層から霧島アワコシ層上位のⅩ層にかけても3つ目の文化層として調査を進めるに至った。

本節においては始良丹沢火山灰層(VI層)と霧島アワコシ火山灰層(X層)を主な健層と位置付け、IV層を旧石器時代第Ⅲ文化層、VII層を旧石器時代第Ⅱ文化層、VIII～IX層を旧石器時代第Ⅰ文化層とし、第Ⅲ文化層から時代をさかのばる形で報告する。

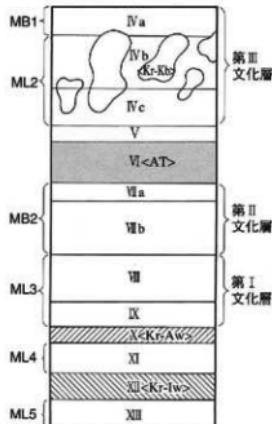
### 2 旧石器時代 第Ⅲ文化層の遺構と遺物

#### (1) 第Ⅲ文化層の概要

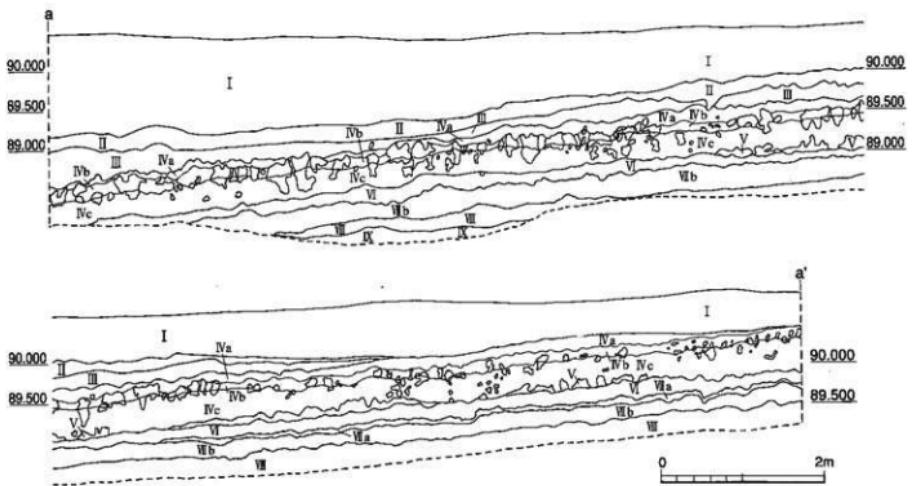
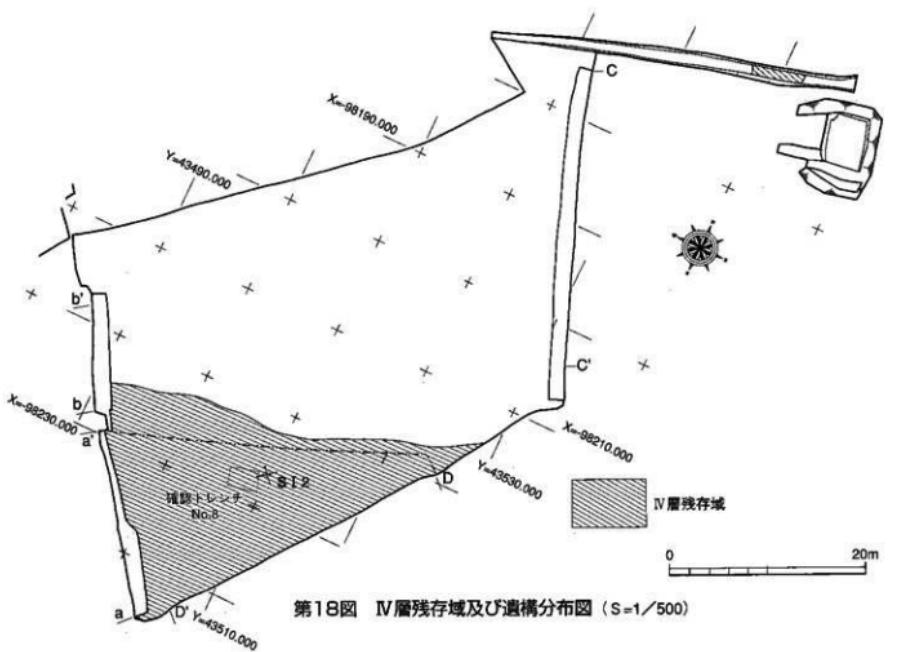
B区を中心として残存している小林軽石を含む褐色土(IVa, IVb, IVc層)から石器群並びに蝶群が出土したことから、この層を第Ⅲ文化層と位置付けた。C区並びにD区では削平の影響を受け部分的にしか残存していない。この層では、蝶群1基を検出するとともに、ナイフ形石器やスクレイパー、角錐状石器など約850点が出土した。特にB区においては台形石器が29点出土したことが特筆される。遺物のピークレベルは第IVb層で、東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う調査においては「MB1」～「ML2」に相当する。小林軽石を密に含むことから旧石器時代後半、約1万5千年前後の文化層と考える。

#### (2) B、C区の遺構

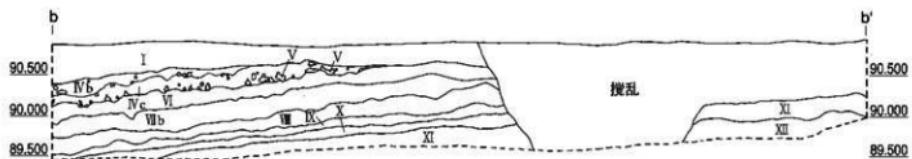
蝶群(S I 2)はB区中央やや北側の標高約90.5mの地点、谷に向かう斜面の際付近で検出された。長径約1.7m、短径約1.1mを測る楕円形の範囲に大小31個の蝶がみられ、掘り込みは伴わずほぼ平坦に散在している。蝶の重量は最大で約4,150g、最小で5.5gと様々である。また、ほとんどの蝶は軽重の差があるものの赤変してて、石材は約7割を砂岩がしめる。周辺では、ナイフ形石器や台形石器剥片等が出土しているが、炭化物は見られない。



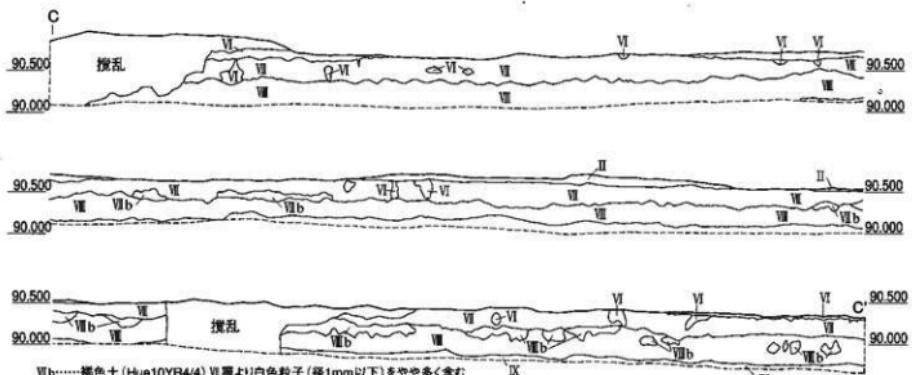
第17図 基本土層模式図



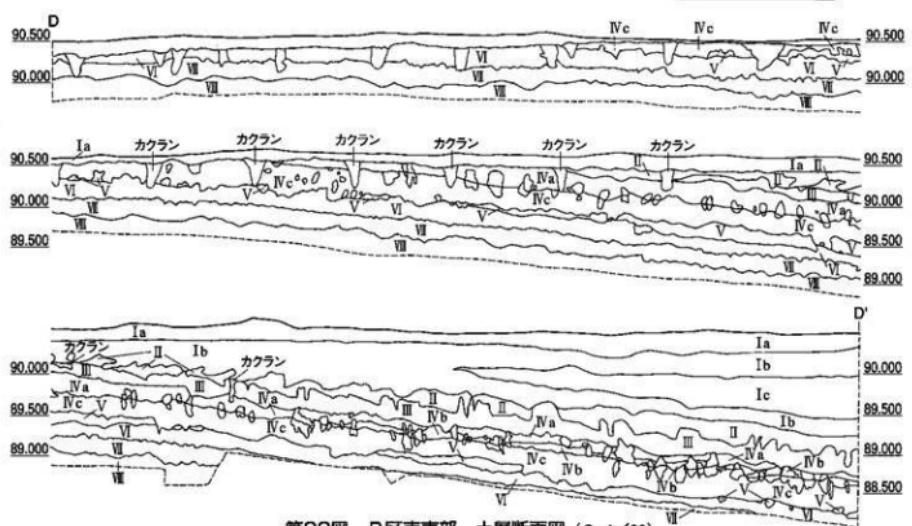
第19図 B区南西部 土層断面図 (S=1/60)



第20図 C区南西部 土層断面図 (S=1/60)



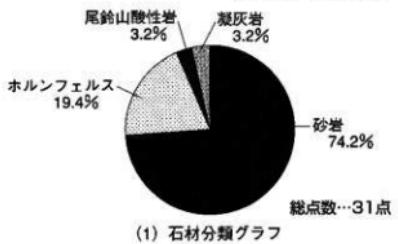
第21図 C区北西部 土層断面図 (S=1/60)



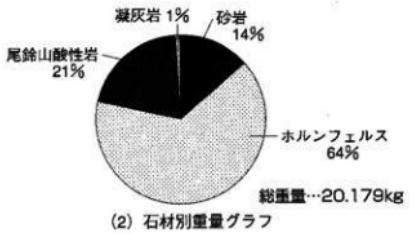
第22図 B区南東部 土層断面図 (S=1/60)



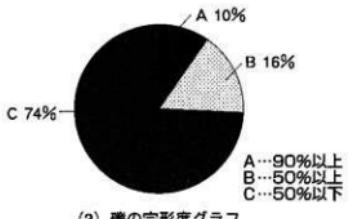
第23図 IV層疊群 (S I 2) 実測図 ( $S=1/20$ )



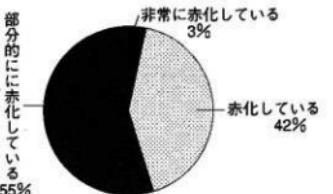
(1) 石材分類グラフ



(2) 石材別重量グラフ



(3) 磚の完形度グラフ



(4) 磚の赤化度グラフ

第24図 IV層疊群 (S I 2) 分析図

### (3) B, C区の遺物

出土石器は851点である。器種の内訳は、ナイフ形石器11点、台形石器29点、角錐状石器7点、スクレイパー17点（エンドスクレイパー4点とサイドスクレイパー2点を含む）、二次加工剥片15点、細石刃1点、錐1点、敲石2点、石核14点、剥片454点、碎片（チップ）300点となり、ナイフ形石器や台形石器といった定型的な器種の石器は65点で全体の7.6%となる。また、石材の内訳は、チャート347点、頁岩256点、珪質頁岩133点、ホルンフェルス77点、黒曜石23点と続き、チャートは全体の40.8%、頁岩は全体の30.1%を占める。さらに、重量的にはホルンフェルス1726.9g、チャート702.6g、頁岩600.1g、砂岩513.4gと続き、ホルンフェルス、砂岩の組成率が増加する。しかし、石材の接合関係を見る限り、本遺跡における第Ⅲ文化層においては、チャートと頁岩が搬入・消費の主体となっていたものと考える。

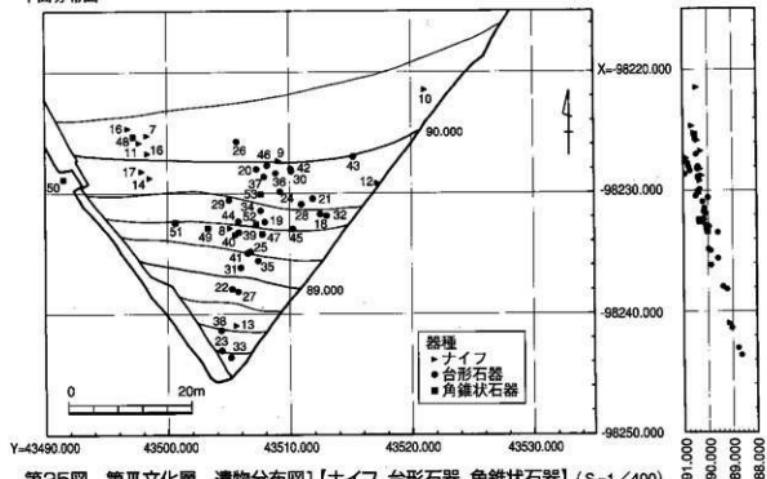
石材 器種	チャート	ホルンフェルス	珪質頁岩	黒曜石	砂岩	尾鷲山酸性岩	頁岩	流紋岩	総計
ナイフ形石器	2	1	2		1		5		11
台形石器	26	1	1			1			29
角錐状石器	1	3	1	1			1		7
スクレイパー	1	1	1			1	7		11
エンドスクレイパー			4						4
サイドスクレイパー		1					1		2
二次加工剥片	4	5	1	1			4		15
細石刃				1					1
錐		1							1
敲石					2				2
石核	6	2	4				2		14
剥片	184	45	86	12	7	1	117	2	454
チップ	123	17	33	8			119		300
総計	347	77	133	23	10	3	256	2	851

第1表 第Ⅲ文化層の石器・石材組成

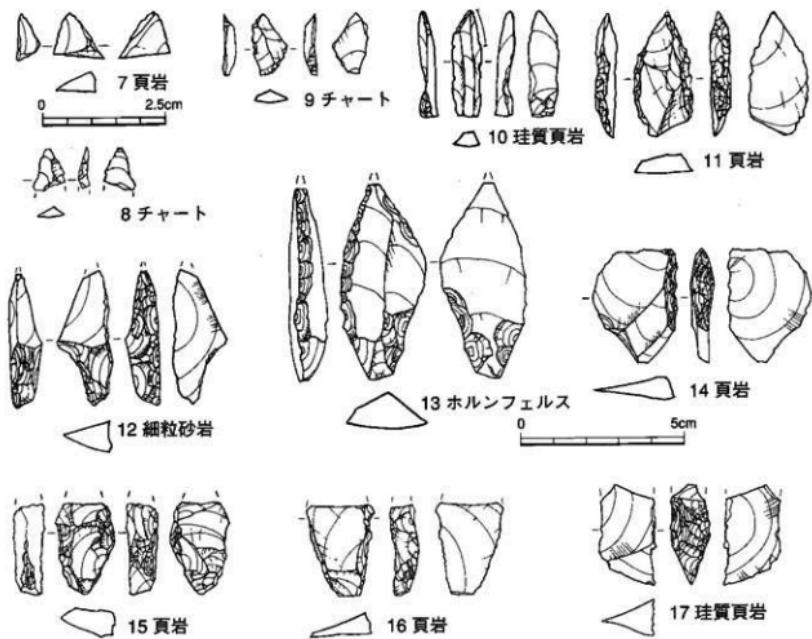
### ナイフ形石器（第26図）

11点のナイフ形石器は、石材や素材となった剥片とともにバリエーションに富み、調整や形状も様々である。7は横長剥片、8は縦長剥片を素材にし、ともに腹面からの刃潰し加工が施されている。9は右側縁と左側縁先端部に調整剝離のみられる切出形である。10は縦長剥片を素材とし、左側縁の先端と基部に調整剝離がみられる。11は横長剥片を素材とし、二側縁加工が腹面から施されている。12は横長剥片を素材とし、刃部側の側縁に抉入状の基部加工が施され、刃潰し部分は対向調整が施されている。13は大きめの縦長剥片を素材とし、基部と左側縁に加工が施されている。14は横剥ぎの剥片で、剥離させる際の打面部に腹面から調整を施し縁辺を刃部としている。15～17はいずれも何らかの負荷により半ばから先端部にかけてが欠損している。15は縦長剥片を素材にし、基部に平坦剝離を含んだ加工が施されている。16は横長剥片を素材とし、右側縁に腹面からの調整剝離が施されている。17も横長剥片を素材としており右側縁部の刃潰し部分は対向調整が施されている。

平面分布図



第25図 第III文化層 遺物分布図1【ナイフ、台形石器、角錐状石器】(S=1/400)



第26図 第III文化層 石器実測図1【ナイフ形石器】(S=2/3 \*7のみ S=1/1)

### 台形石器（第27図）

18～46は台形石器で、素材剥片を横位に用いたものが8割を超える。石材はチャート製が主体で、尾鈴山酸性岩、珪質頁岩、ホルンフェルス製がそれぞれ1点ずつ出土している。各測定の平均は、長さ1.92cm、幅1.31cm、厚さ0.53cm、重さ1.221gを測る。ナイフ形石器の分類に属する小型の石器である。本遺跡では、台形石器を次の3タイプに分類した。

- ・ I類……正面図において、中軸線に対し刃部がほぼ垂直に交わるもの
- ・ II類……正面図において、中軸線に対し刃部が左斜めに交わるもの
- ・ III類……正面図において、中軸線に対し刃部が右斜めに交わるもの

#### I類（18～24）

18は両側縁に腹面から調整があり、背面には基部に向かっての平坦剥離が入る。19も両側縁に腹面からの細かな調整がある。刃部の欠損は新しい。20は剥片剥離の際に力が加わった方向が刃部となり、右側縁に背面からの細かな調整がある。また、背面に右方向からの平坦剥離が入る。21は逆三角形の形状を呈し、両側縁に腹面からの細かな調整がある。22は背面に平坦剥離が入り、両側縁は腹面からの調整を主としている。全体の形状はバチ状を呈す。23はやや甲高な断面三角形の素材を用いる。基部が尖っており、腹面に平坦剥離がはいる。両側縁部の調整は腹面からが主だが、右側縁先端部は背面からの調整が施される。24は両側縁に腹面からの調整があり、背面右部に平坦剥離が入る。

#### II類（25～34）

25は右側縁に対向剥離による細かな調整、左側縁は折れ面を主としてその修復を目的とした細かな調整がある。腹背面ともに平坦剥離が入る。26はやや小さいが背面基部に細かな平坦剥離が入り、形状を整えた様相がみられる。また、両側縁に主に腹面からの細かな調整がある。27は基部がやや尖り、背面に両側縁方向からの平坦剥離が入る。両側縁には腹面からの調整がある。28は背面を平坦剥離で整え、両側縁に腹面からの調整が施される。特に右側縁の調整が細かい。29は剥片末端を刃部とし、素材剥片を縱位に用いる。基部はやや尖頭形で背面には右側縁からの平坦剥離が入る。両側縁ともに腹面からを主とする調整がある。30の平面形は長方形に近い。両側縁の腹面からの調整は非常に細かい。31は腹面右部に素材剥片の打痕がみられる。背面中央には右方向より、背面基部には刃部の方向に平坦剥離が入る。両側縁に腹面からの調整がある。32の基部は尖頭形で全体の形状は切出形のナイフ形石器に近い。両側縁に腹面からの細かな調整が入る。33は基部の左右に腹面からの調整で抉りが形成されている。また、両側縁にも腹面からの調整が入る。34は尾鈴山酸性岩製で比較的大きい。右側縁は緩やかな曲線で腹面からの細かな調整がある一方、左側縁はほぼ直線で対向剥離となっている。背面には刃部方向と左側縁方向からの平坦剥離が入る。

#### III類（35～46）

35はホルンフェルス製で小さめである。右側縁部に調整があるものの、左側面は単剥離面となっている。背面に平坦剥離が入り腹面には打痕がみられる。36の平面形は正方形に近い。刃部は調整によって形成されている。また、右側縁は腹面から、左側縁は背面から調整が施されている。37は基部が尖るもの、平面形は円形に近い。左側縁は折れ面が主で、右側縁も剥片剥離の際の打点となっており調整は少ない。38は34と形状が類似しており、左側縁が曲線的、右側縁が直線的となっている。両側縁の調整は対向剥離となっている。39の平面形は長方形に近く厚さは扁平で、両側縁は背腹相方から、

基部は腹面方向からの粗い調整がある。40の平面形はほぼ三角形を呈す。両側縁の調整は腹面からが主で、右側縁の調整は細かい。41は刃部を除いてほぼ均一な厚さとなっている。両側縁の調整は腹面からで非常に細かい。また、基部にも腹面からの調整がある。42の平面形は三角形で、左側縁と刃部は剥片末端部にあたる。右側縁は腹面からの細かな調整があり、背面には左側縁方向からの平坦剥離が入る。43は珪質頁岩製である。剥片剥離の際の打面が右側縁部となっており、剥片の左側縁を刃部としている。左側縁には背面からの調整があり、基部は鋭く尖る。44は平面形がバチ状で、剥片末端を刃部としている。両側縁とも腹面方向からの細かな調整がある。また、基部にも調整が入りやや尖った形を呈している。45の平面形は平行四辺形に近く、やや寸詰まりの素材剥片末端を刃部としている。両側縁には腹面側から細かな調整があり、背面には基部方向からの平坦剥離が入る。46は腹面からの調整が施される両側縁が平行で、平面形は台形を呈している。背面の基部側には左側面方向からの平坦剥離が入る。

#### 角錐状石器（第28図）

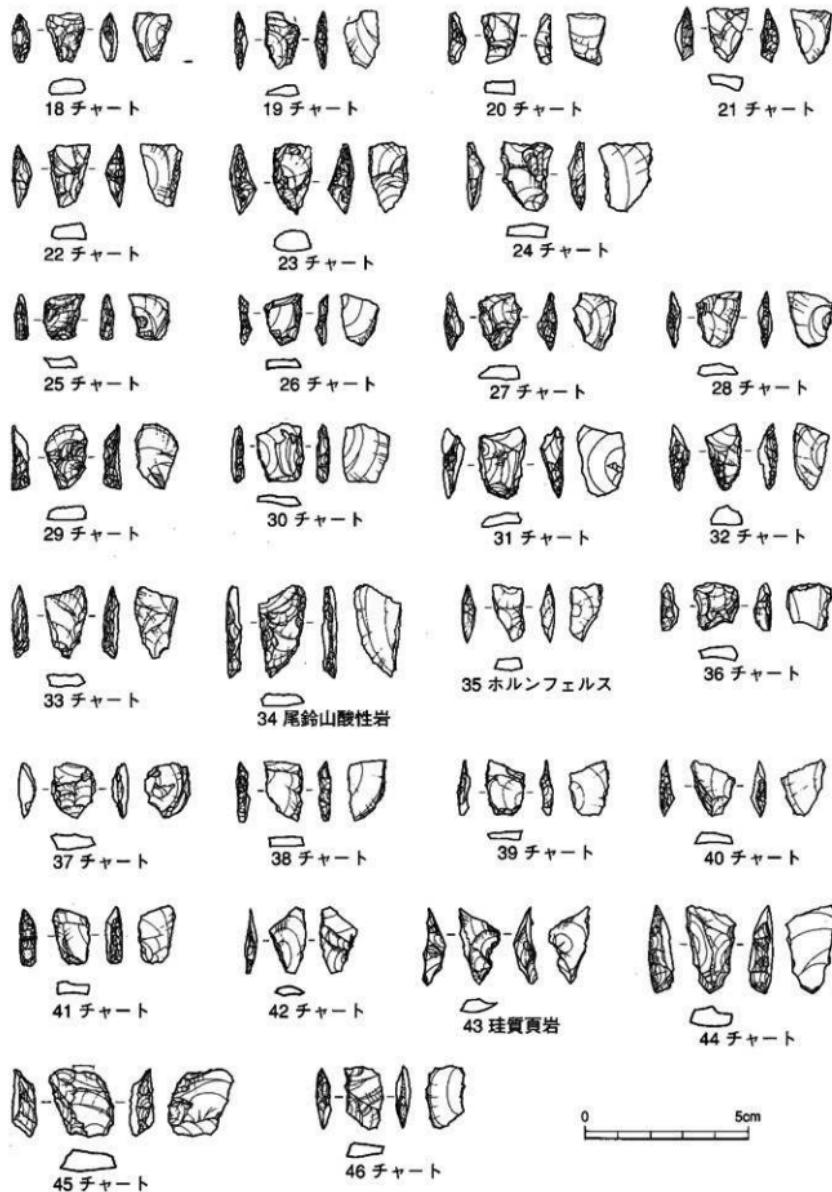
47～53は紡錘形の形状をした角錐状石器で、4点が完形、3点が欠損の状態で出土した。石材はホルンフェルス製が3点あるが、その他は全て異なり多様性に富む。また、大きさも中軸線で最小が2.2cm、最大が8.1cmと様々である。

47は三面加工がなされている小型のもので、右側面は裏面からの調整、左側面は対向調整が施されている。また、裏面にも一部調整がある。48は横長剥片を素材とする一面加工のもので、左側面に裏面からの細かな調整をして、先端部を作り出している。右側面は2つの剥離面で調整はない。裏面はこの素材剥片を剥いた際の打面と剥離面からなり、打瘤や打瘤裂痕も明瞭である。49は縦長剥片を素材として二面加工がなされている。左右側面とも裏面からの調整が施されている。50は三面加工がなされている大きめのもので、左右側面は裏面からの調整、裏面は対向調整が施されているが、調整自体は粗い。51は縦長剥片を素材とした二面加工のもので、左右側面とも対向調整が施されている。また、下部の欠損は裏面からの力が加わり折れている。52は横剥ぎの剥片を使用し三面加工がなされている。左側面は粗い対向調整、右側面は裏面からの調整、裏面は細かな対向調整が施されている。上部は右側面方向からの力が加わり折れている。53は横長剥片を素材として一面加工がなされている。加工のある右側面は風化が著しいものの対向調整が施されている。

#### スクレイパー（第30図、第31図）

54～67はスクレイパー（掻器、削器）である。その中で中軸と平行に刃部が形成されているものをサイドスクレイパー（削器）、短軸と平行に刃部が形成されているものをエンドスクレイパー（掻器）、それ以外のものをスクレイパーとした。この中で、小型で厚みのある剥片素材を使用しているものと、中型で自然面を残す剥片素材を使用しているものの2つに分類できる。石材利用に関しては、頁岩が半数を超え、ついで珪質頁岩、ホルンフェルスの順になる。

54は素材剥片末端部に腹面から調整を加え、刃部作出を施す。55は素材剥片末端部に腹面からと、打面側に背面から調整を加え刃部作出を施していくラウンドスクレイパーに近い。56は剥片の打点部分に近い比較的の厚さのある部分を素材とし、下部の腹面から調整を加え刃部作出を施す。また、腹面の打瘤部分に左側面からの調整がある。57も56と同様の素材を用い、右側縁に背面から調整を加え、刃部作出を施す。また、左側縁部にも背面からの調整痕を残す。58は素材剥片端部に弧をえがくように



第27図 第Ⅲ文化層 石器実測図2【台形石器】(S=2/3)

腹面から調整を加え、刃部作出を施す。54～58は同一石材で小型である。59～61は中型の自然面を残す剥片素材を使用している。59は背面と左側面に自然面を大きく残す。刃部は右側縁部に腹面から調整を加え作出を施す。60も背面に大きく自然面を残し、右側縁部に背面から調整を加え刃部作出を施す。61は素材剥片の右側縁部に腹面から調整を加え刃部作出を施す。62～67は小型のもので、石材は3種類に分かれる。62は縦長剥片を素材とし、末端部を除去した中央部付近に、腹面から大きい角度で調整を加え刃部作出を施す。63は厚みのある不整形剥片の左側縁端部に調整を加え刃部作出を施す。64は寸詰まりの縦長剥片を素材とし、下部の甲高な部分に腹面から角度の大きい調整を加え刃部作出を施す。65は素材剥片の末端部に、腹面からリングに沿った細かな調整を加え刃部作出を施す。ラウンドスクレイパーに近い。66は不整形剥片の底部に、腹面から左から右に4つの調整を加え刃部作出を施す。風化が著しい。67は背面に自然面を残し、下部に腹面からの細かな刃部作出を施す。

#### 二次加工剥片（第32図）

62～72は二次加工剥片である。出土点数は15点で、接合資料としても3点掲載している。石材はホルンフェルスと頁岩製がそれぞれ5点、チャート4点、黒曜石1点である。大きさは大小様々で、素材剥片や加工に関しても統一された特徴はない。68は上面と右側縁部に細かな加工痕がある。69は縦長剥片で右側縁部に加工がある。70は横長剥片で、背面左上部に細かな加工痕がある。71は下部が欠損している縦長剥片で、左側縁に腹面から、上部に背面からの加工痕がある。72は横長剥片で、左側縁部に腹面からの加工痕がある。73は縦長剥片で、左側縁部に若干の加工痕がある。74は背腹両面に打痕があり、縁辺部に加工痕と微細剥離がある。75は厚みのある縦長剥片で左側縁部には背面から、右側縁の上部と下部には腹面からの加工痕がある。76は縦長剥片で左側縁部に腹面からの加工痕がある。また、風化が著しい。77の腹面は自然面で、左側縁上部に粗い加工痕、上部と右側縁部には細かな加工痕がある。78は幅の広い縦長剥片で、左側縁部から下部にかけて、背腹相方からの粗い加工痕がある。また、風化が著しい。

#### 石核（第33図、第34図）

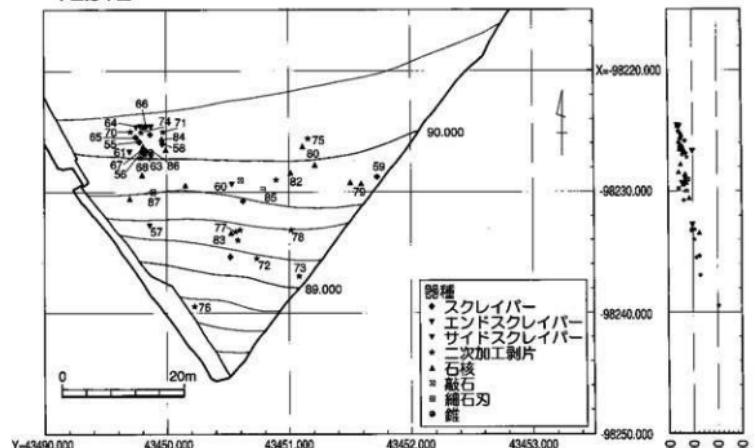
79～84は石核である。ここでは6点、接合資料でさらに6点を掲載している。石材は頁岩とチャートがそれぞれ6点、ホルンフェルスが2点となっている。特徴として、打面を定め、定形の剥片を連続して取り出す技術は未成熟で、打面と作業面を頻繁に入れ替えながら不定形な剥片を得てたことを示す。79は打面を上下交互転移させながら、大きめの不定形剥片を作出している。また、左右側面には、調整とみられる剥離痕がある。なお、この遺物はNo.59のスクレイパーと接合関係にある。80は風化が著しいものの、左右両側面並びに底面から不定形剥片を作出としたと考える。正面中央部には自然面を残す。81は剥離作業面を転移させながら、不定形剥片を作出している。打面は複剥離打面である。82は縦長剥片石核で、腹面は自然面である。単剥離打面から不定形剥片を作出している。83は左側面や裏の節理面を打面とし、不定形剥片を作出している。右側面は自然面である。84も風化が著しいものの、剥離作業面と打面を入れ替えて、不定形剥片を作出していることが明瞭に分かる。

#### 細石刃、錐、敲石（第34図）

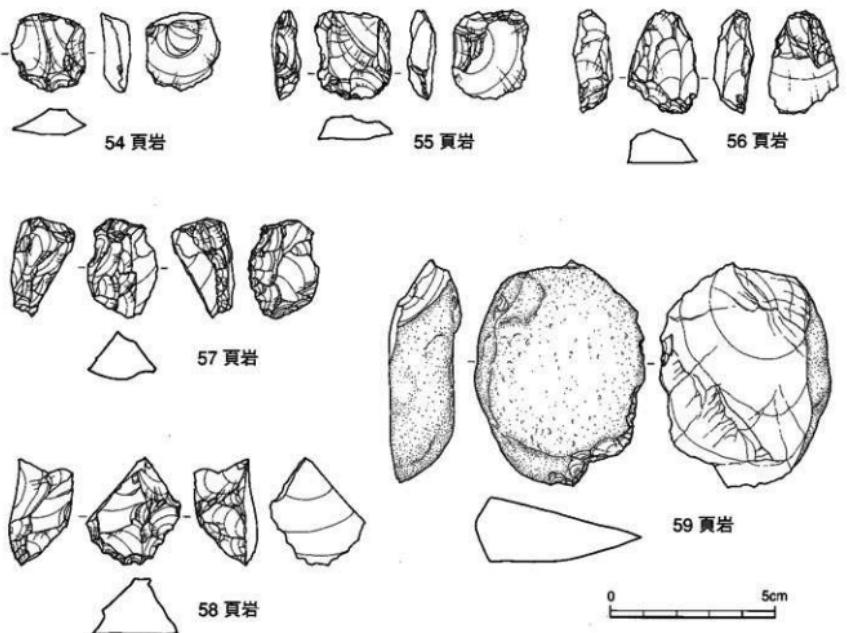
85は黒曜石製の細石刃で、上部が欠損している。なお、当遺跡では細石核の出土はない。86は錐で、不整形縦長剥片下部の両側縁末端に腹面から調整を加え、錐状の突出した刃部を作出している。87は棒状の砂岩砾で、下部に敲打痕が残る。上部は欠損する。



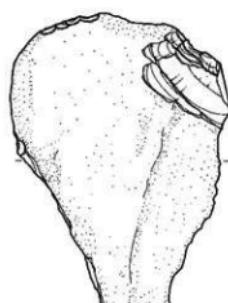
平面分布図



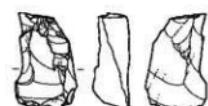
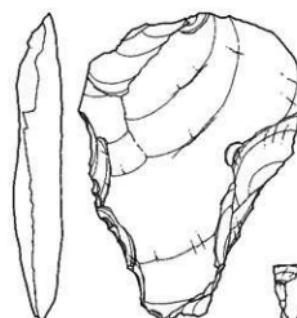
第29図 第III文化層 遺物分布図2【スクレイパー 他】(S=1/400)



第30図 第III文化層 石器実測図4【スクレイパー類 1】(S=2/3)



60 ホルンフェルス



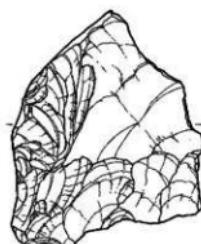
62 硅質頁岩



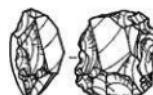
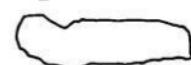
63 頁岩



64 硅質頁岩



61 尾鈴山酸性岩



65 硅質頁岩



66 ホルンフェルス



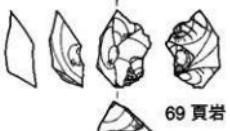
67 頁岩



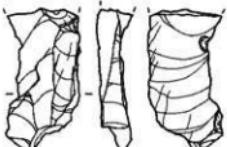
第31図 第Ⅲ文化層 石器実測図5【スクレイバー類 2】(S-2/3)



68 灰岩



69 灰岩



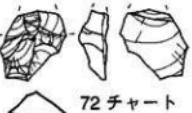
73 チャート



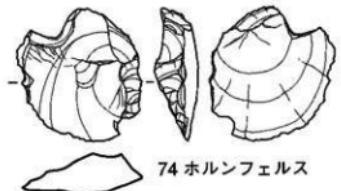
70 灰岩



71 玻璃質灰岩

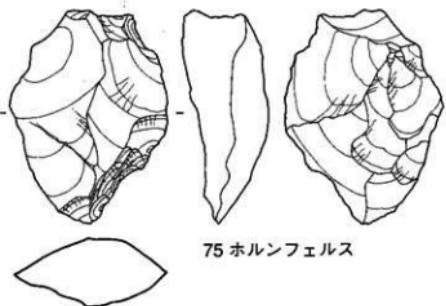


72 チャート

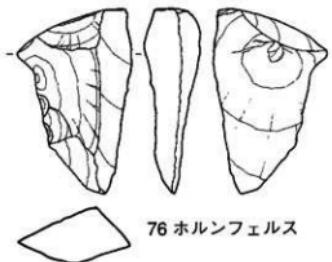


74 ホルンフェルス

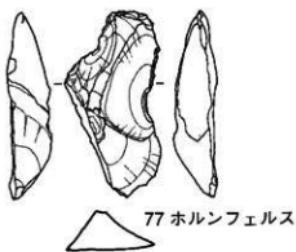
0 5cm



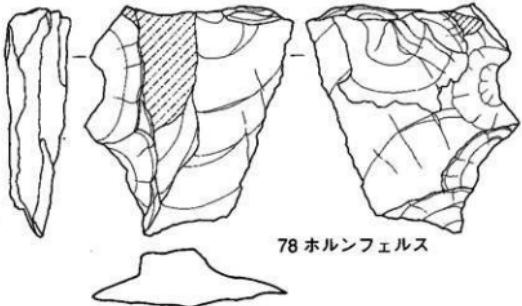
75 ホルンフェルス



76 ホルンフェルス



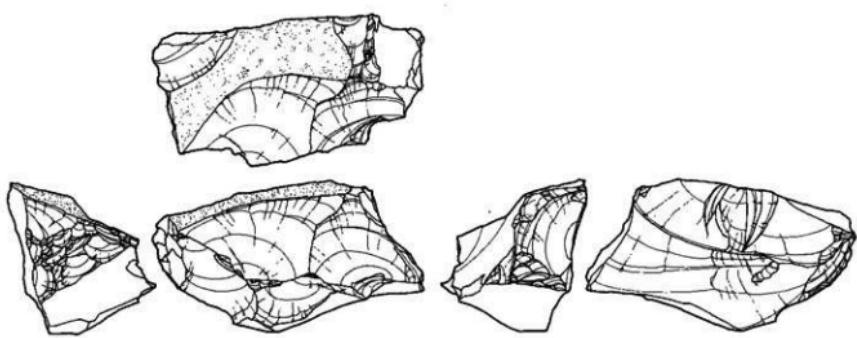
77 ホルンフェルス



78 ホルンフェルス

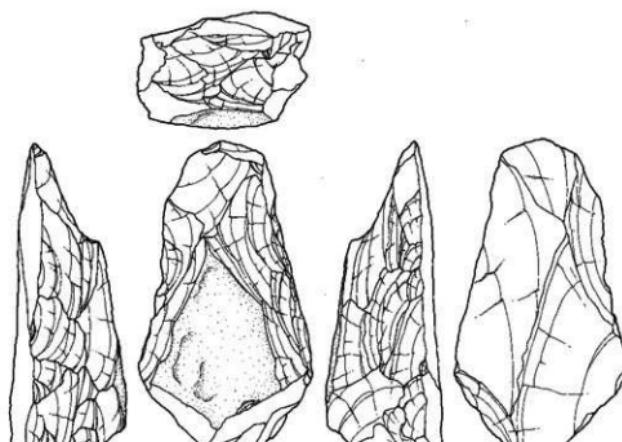
0 5cm

第32図 第III文化層 石器実測図6【二次加工剥片】(S=2/3 ※78のみ S=1/2)



79 頁岩

0 5cm  
(S = 2/3)



80 ホルンフェルス

0 5cm  
(S = 1/2)

第33図 第Ⅲ文化層 石器実測図7【石核1】



### 接合資料（第36図～第43図）

本遺跡の第Ⅲ文化層における接合資料は31個体、石器数にして78点となる。石材別に分類するとチャートが18個体42点、頁岩が3個体12点、珪質頁岩が10個体24点となる。また、この接合資料には、ナイフ形石器1点、スクレイパー3点、二次加工剥片3点の石器を含む。接合状況に目を向けると、剥離面同士の接合、折れ面同士の接合、節理面同士の接合の3つの様相に大別できる。さらにその分布状況を図化すると、チャートを主体とする集中域（A）【接合資料1～18】と、頁岩と珪質頁岩を主体とする集中域（B）【接合資料19～31】の2つの局面が存在した可能性が看取できる。

#### チャートの接合資料【接合資料1～18】（A集中域）

接合資料1（第36図）は石核（90）と剥片2点（88,89）が接合する。右方向からの加撃で88を剥出しし、さらに、90°回転させ剥離面を新たな打面とし89を剥出している。その後90から新たな作業が施されたかについては不明である。

接合資料2（第37図）は石核（95）と剥片4点（91,92,93,94）が接合する。円縫を分割した後、作業面と打面を頻繁に転移させ、不定形剥片を剥出する過程で新たな打面を作出するため自然面の残る94を剥出する。その後90°回転させ新たな打面から91を剥ぐ。そして、再度90°もどして自然面を多く残す93を剥出し、さらに作業面や打面を転移させ剥片を取り出す過程で92を剥出している。

接合資料3（第37図）は剥片4点が接合する。そのうちの3点（96）は石核から不定形剥片として剥出された後、打点の反対方向から整形を試みた痕跡が残る。その際、節理面に力が加わり3つに分割されたと考える。もう1点（97）は、96の剥出後石核の打点を90°回転させて剥出されたものである。

接合資料4（第38図）は石核（98）と剥片（99）が接合する。原石から99を剥出した後、98は中央稜部と下部の自然面の双方を打点として不定形剥片を剥出している。

接合資料5は原石をいくつかに分割した後、割れ面を打面として剥出した2点である。100は腹面に多方向からの調整痕がみられる二次加工剥片で、101は背面の右側縁部に刃部作出を施したスクレイバーである。

接合資料6は打面を頻繁に転移させながら剥出した剥片どうしの接合である。

接合資料7も6と同様で、石核から105を剥出した後、打点を90°回転させて104を剥出している。

接合資料8（第39図）は複剥離打面を形成し、自然面に向けての加撃で剥出された剥片107と、107を剥出後石核の打点を90°回転させて剥出した106との接合である。106は剥出後、右側縁部に主に腹面から調整が施される。

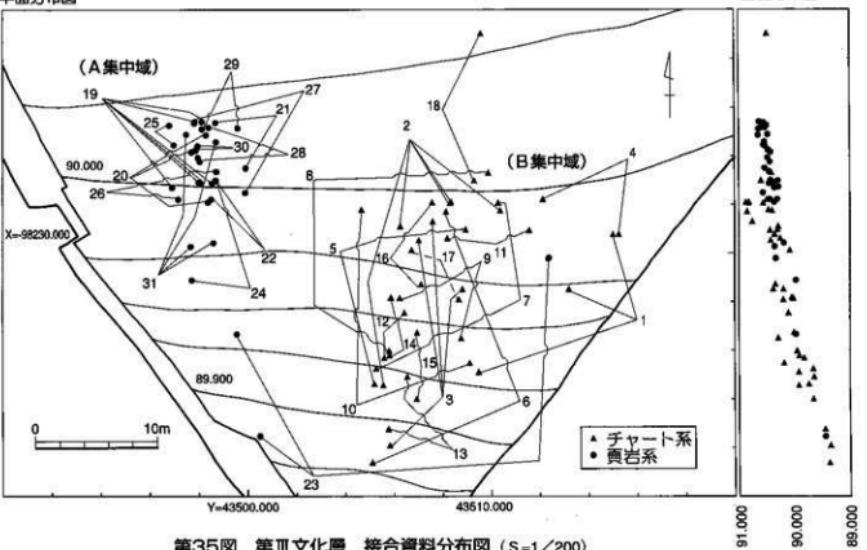
接合資料9は同一の複剥離打面から剥出された2つの剥片で、加撃の角度が約25°回転している。108の右側縁部には剥出前の細かな調整痕が残る。

接合資料10は自然面を打面として110を剥出した後、石核の打点を180°転移させて111を剥出している。

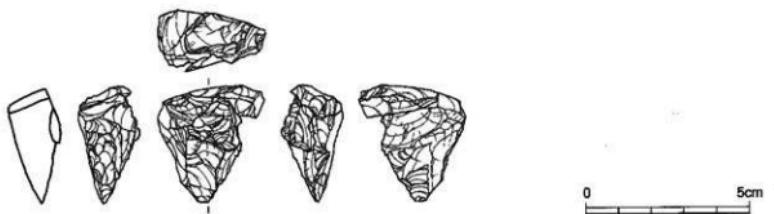
接合資料11は多方向から不定形剥片を剥出した後、打面調整の目的で石核から112+113を剥出し、その後90°打点を回転させて112から113を剥出している。

接合資料12は114+115を自然面付近の打面で石核から剥出し、その後180°回転させて不定形剥片を剥出し、再度打点をもどして115を剥出している。

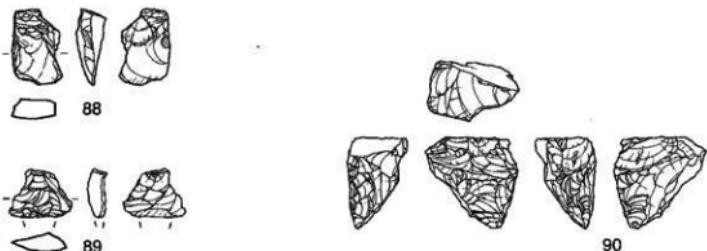
平面分布図



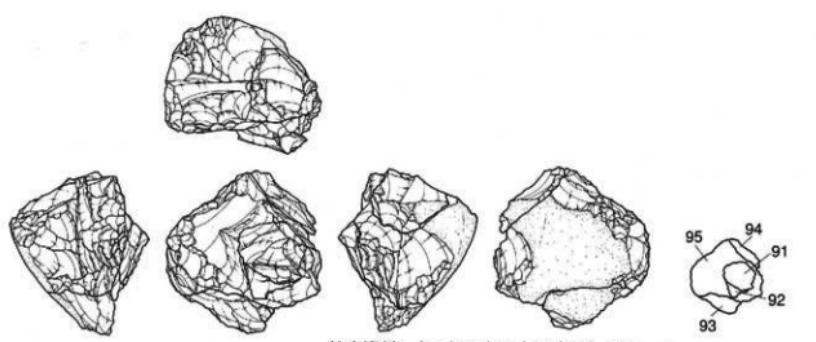
第35図 第III文化層 接合資料分布図 (S=1/200)



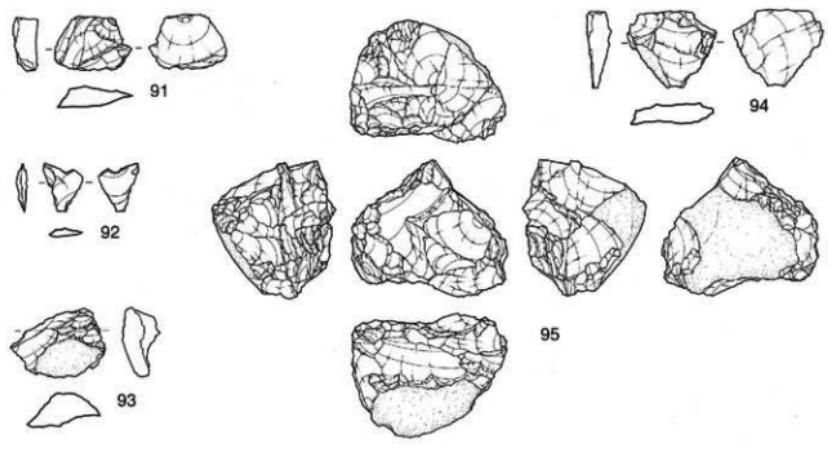
接合資料1 (88+89+90) チャート 母岩NO.7



第36図 第III文化層 接合資料実測図1【チャート系】(S=2/3)



接合資料2 (91+92+93+94+95) チャート  
母岩NO.2

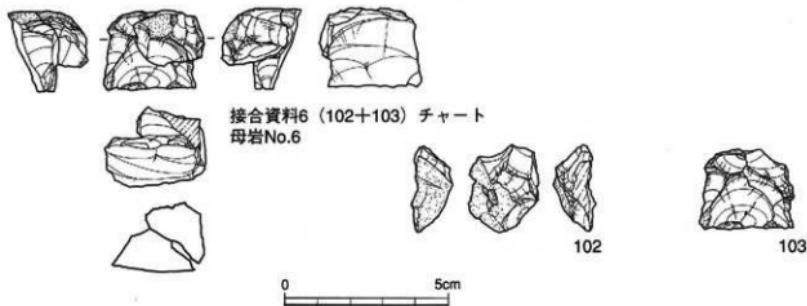
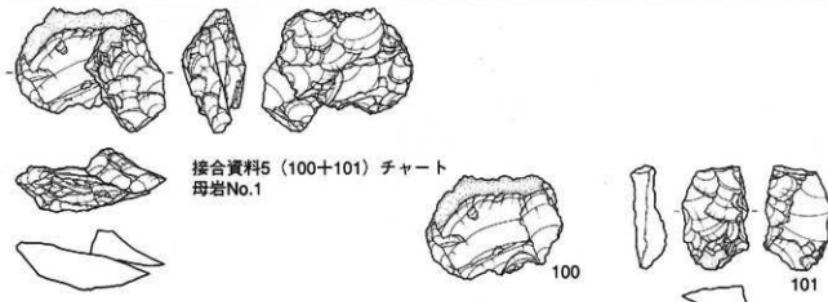
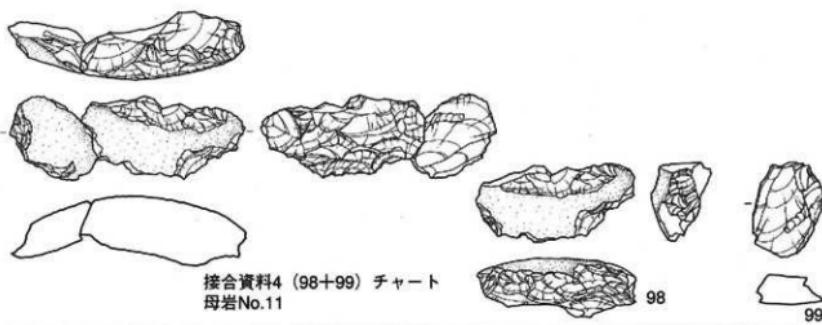


0 5cm

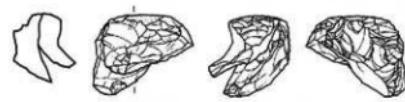
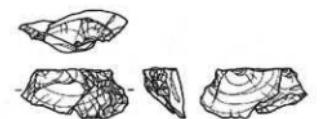
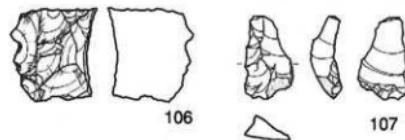


接合資料3 (96+97) チャート  
母岩NO.5

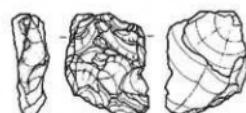
第37図 第Ⅲ文化層 接合資料実測図2【チャート系】(S=2/3)



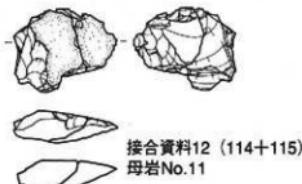
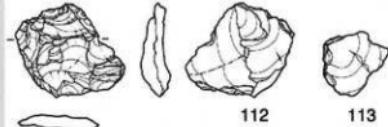
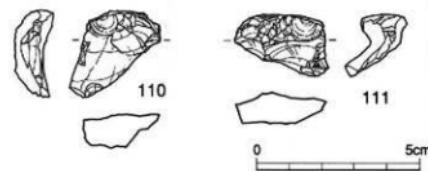
第38図 第Ⅲ文化層 接合資料実測図3【チャート系】(S=2/3)



接合資料10 (110+111)  
母岩No.7



接合資料11 (112+113)  
母岩No.15



接合資料12 (114+115)  
母岩No.11



接合資料13 (116+117)  
母岩No.4



第39図 第Ⅲ文化層 接合資料実測図4【チャート系】(S=2/3)



接合資料13は節理面で石核から離れたもので、右からの加撃で117が剥出される。接合資料14～18（第40図）は、剥片の剥出過程におけるアクシデントで、折れや割れが生じて分割されたものである。

#### 頁岩、珪質頁岩の接合資料〔19～31〕（B集中域）

接合資料19（第41図）は石核1点（124）と剥片6点（118～123）が接合する。右斜め下から左斜め上に向けて118と120、次いで180°回転させて119、そして、90°回転させて123、打面を変えて121、122の順で剥出している。

接合資料20は剥片2点（125,126）とナイフ形石器1点（127）が接合する。右斜め上方向から連続的に不定形剥片を剥出している。ナイフ形石器は、最後に剥出した縦長剥片の両側縁を腹面から刃溝し加工しており、左側縁の先端部約1/3で刃部を作出する。

接合資料21（第42図）はスクレイパー1点（128）と石核1点（129）の接合である。129は頻繁に打面を転移させて不定形剥片を剥出した石核で、最終打面から128も剥出されている。その後128は、左側縁部に腹面から調整加工がなされ刃部を作出する。

接合資料22は同一の打面から連続して剥出された剥片どうしの接合である。

接合資料23は3つの剥片の接合で、母岩に打面を形成する際に剥出された背面が自然面の剥片である。剥出後134、133、132の順に分割されている。

接合資料24は二次加工剥片（135）と剥片（136）の接合である。石核の節理面を打面として136を剥出し、その際に形成された新たな打面から135を剥出している。135はその後左側縁部に背面から調整が施される。

接合資料25は上面に自然面を残す2点の剥片の接合である。母岩に打面を形成する際に剥出され、その後自然面側からの加撃で分割されている。

接合資料26は打面を異にして剥出された2点の剥片の接合である。140を右方向からの加撃で剥出し、90°打点を回転させて139を剥出している。

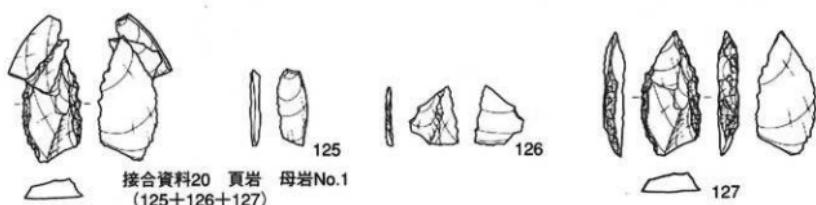
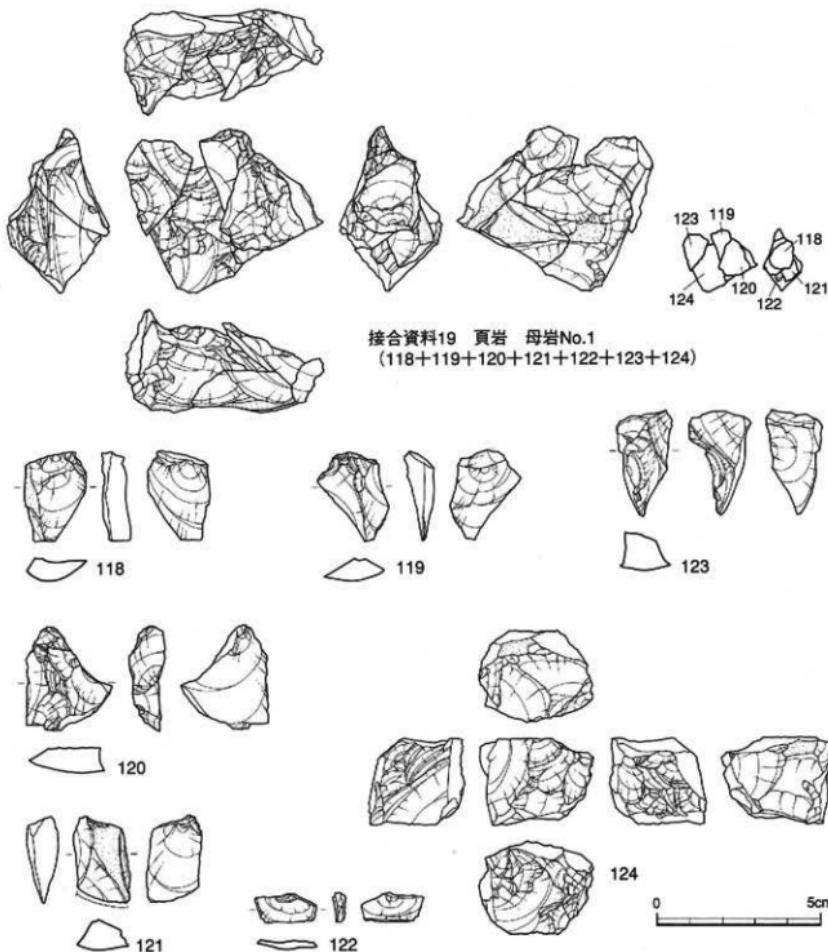
接合資料27（第43図）はエンドスクレイパー（141）と剥片（142）の接合である。自然面が残り厚みのある剥片を素材とし、自然面側からの加撃により大きさを調整する過程で142は剥出される。その後、剥片腹面からの調整により刃部が作出され141となる。

接合資料28は石核（143）と剥片（144）の接合である。143は打面を頻繁に転移させながら不定形剥片を剥出しており、その最終打面からの加撃で144は剥出されている。

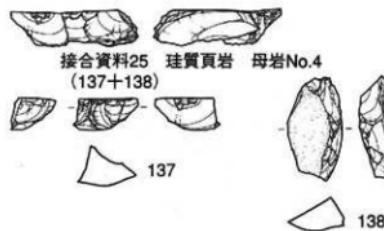
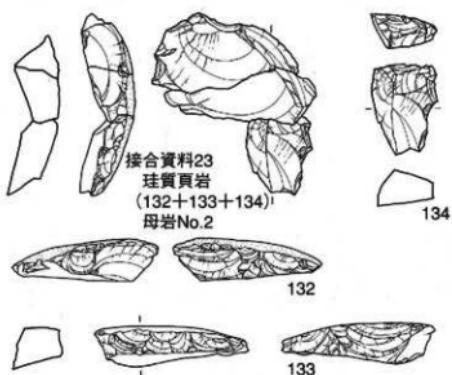
接合資料29はともに打面形成に関わる2点の剥片の接合である。自然面からの加撃で146を剥出した後、90°打点を回転させ145を剥出している。

接合資料30はもともと1つの剥片として剥出されたもので、その後右下部の自然面を取り除く目的で分割されている。

接合資料31は5点の剥片の接合である。背面が全て自然面であることから、接合体は打面形成のための剥片で、剥出後腹面からの加撃によって分割されている。



第41図 第Ⅲ文化層 接合資料実測図6【黄岩系】(S=2/3)



第42図 第III文化層 接合資料実測図7【頁岩系】(S=2/3)



### 剥片（第45図・第46図）

151・152は、いずれも打面は単剥離打面で、縦長剥片である。153は背面からの力が加わって胴部半ばから折れているが、縦長剥片と推察できる。右側縁に若干の調整がある。154・155は下部に若干の自然面や節理面を残す縦長剥片で、背面にはともに不定形剥片を剥出した痕跡がある。いずれの打面も複剥離打面である。156は背面及び右側面に剥片を剥出した痕跡が残り、打面再生剥片と推察できる。157は単剥離打面を有する横長の不定形剥片である。158は下部で折れているが単剥離打面を有する縦長剥片と推察できる。石材が珍しい。159は左側縁部に微細剥離が観察できる。打面は単剥離打面で、縦長剥片である。160は単剥離打面を有する横長剥片で、右側縁上部に若干の微細剥離が観察できる。161は単剥離打面を有する縦長剥片で、左側縁に微細剥離が観察できる。162は左側縁部と下側縁部に微細剥離を有する。打面は単剥離打面で打面再生剥片と推察できる。163は腹面、背面双方に加撃方向の異なる単剥離打面を有する。164は台形石器に類似するが、左右側縁の調整が明瞭でない。上側縁部に若干の調整が観察される。165は複剥離打面を有し、打面再生剥片と推察できる。166は複剥離打面を有する打面再生剥片と推察できる。下部に自然面を残す。

### （4）B、C区の遺物分布状況

第Ⅲ文化層における遺物の出土分布状況を、前述の接合資料の出土分布状況（第35図）の特徴と比較しながらその様相について分析する。ここでは、剥片と碎片（チップ）の出土分布状況と各石材ごとの出土分布状況、さらに礫の出土分布状況について述べる。

#### 剥片、碎片（チップ）

剥片の出土状況（第44図）から、区の西側で南北に長径約5m、東西に短径約3mを測り、ほぼ梢円形を呈する「A集中域」と、東側から傾斜に沿って南南西方向に約20m下る細長い「B集中域」の二つを観察できる。これは、接合資料で頁岩・珪質頁岩の接合関係の分布と、チャートの接合関係の分布の2つの様相が存在することと酷似する。さらに、碎片の出土状況（第47図）においても同様の特徴を示している。

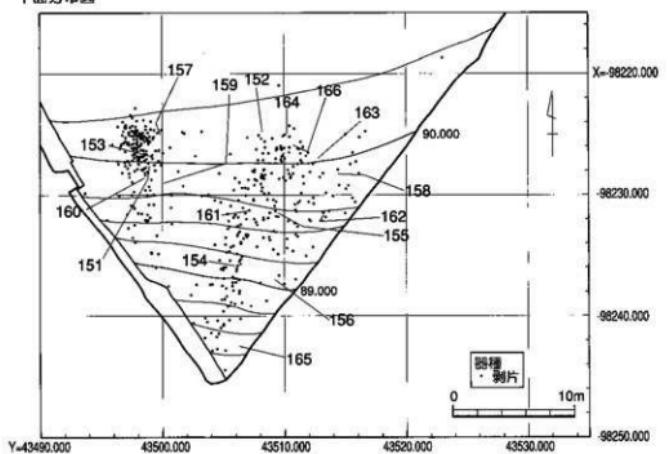
#### チャート（第48図）

348点出土した。石器の種類ではナイフ形石器2点、角錐状石器1点、スクレイパー1点等があるが、台形石器が26点出土していることが特筆される。また、表面の色調、光沢、質感、内部の混入鉱物、透明度等を分類基準とすると18種類の母岩に分類する。しかし、1つのチャート内においても微妙に特徴が変わることから種類の確定はできない。分布状況では、「B集中域」に属する。地形的に平坦部から南に下る斜面の際あたりでこの石材を主体的に活用し、時間の経過や自然流路の影響を受け帶状に流出したと考える。

#### 頁岩（第49図）

256点出土した。石器の種類はナイフ形石器5点、スクレイパー8点、角錐状石器1点などがある。表面は灰色～暗灰色を呈する。色調、粒度、表面鉱物等を分類基準として5種類の母岩に分類する。分布状況では、若干「B集中域」にも出土しているものの、ほとんど「A集中域」に属する。南に下る際からやや離れた平坦な土地でこの石材を主体的に活用したと考える。

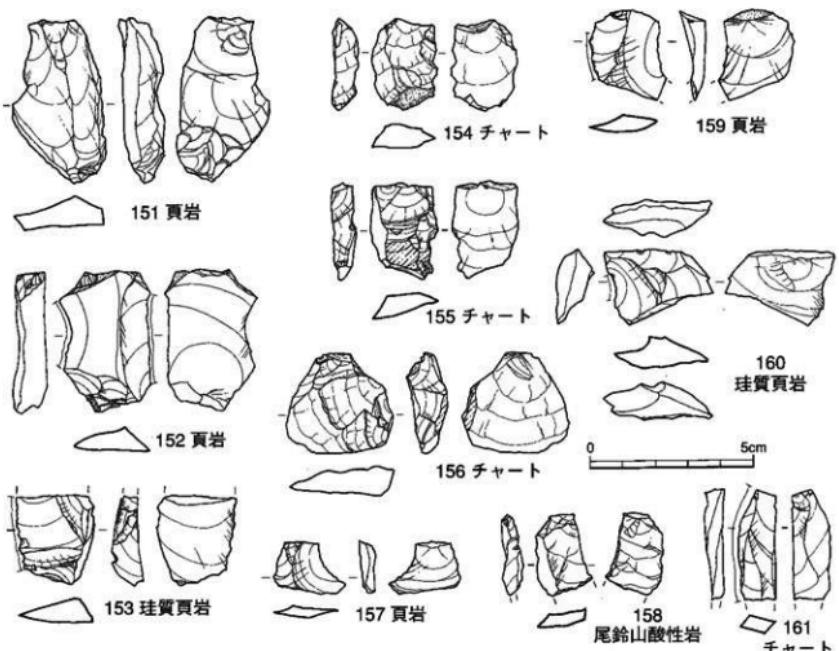
平面分布図



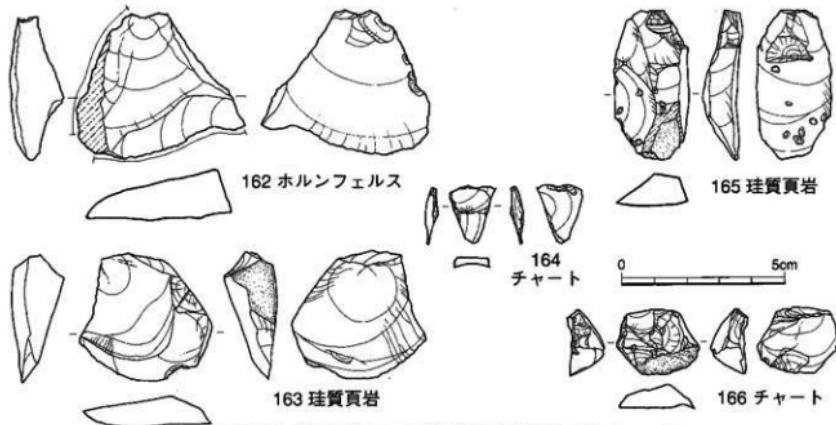
垂直分布図



第44図 第III文化層 遺物分布図3【剥片】(S=1/400)



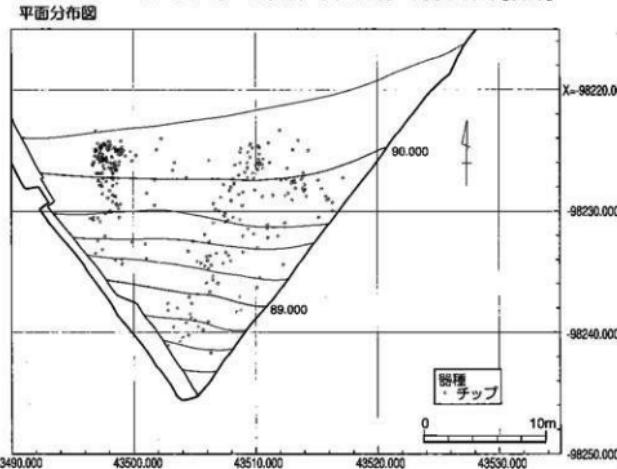
第45図 第III文化層 石器実測図9【剥片-1】(S=2/3)



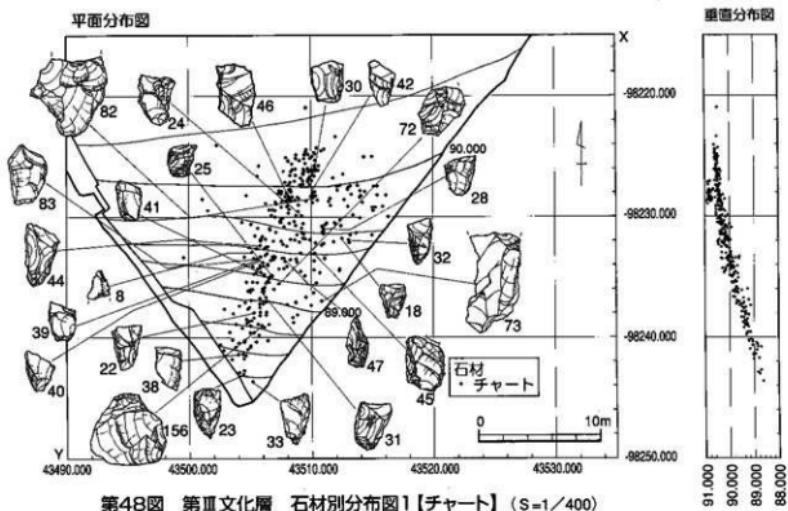
第46図 第III文化層 石器実測図10【剥片-2】(S=2/3)

No.	器種	石材	番号	出土場所	X座標	Y座標	レベル	件名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
151	剥片	頁岩	2	B IV層中	-98227.840	43497.970	90.582	66	1.80	1.40	0.40	6.7	
152	剥片	頁岩	3	B IV層中	-98225.250	43507.700	90.539	381	4.30	2.90	1.05	12.3 微細削離有	
153	剥片	珪質頁岩	2	C IV層中	-98226.260	43497.670	90.538	C-231	2.75	2.40	1.05	8.6 微細削離有、折れ有	
154	剥片	チャート	10	B IV層中	-98226.120	43504.810	89.505	624	2.80	2.05	0.85	4.3	
155	剥片	チャート	8	B IV層中	-98231.860	43506.300	90.294	460	3.00	2.10	0.85	4.5	
156	剥片	チャート	9	B IV層中	-98237.260	43506.030	89.542	430	3.10	3.30	1.25	10.5	
157	剥片	頁岩	1	C IV層中	-98225.130	43496.140	90.500	C-327	1.00	2.20	0.55	1.2	
158	剥片	尾崎山脈性岩	1	B IV層中	-98228.520	43511.900	90.441	182	2.50	1.70	0.65	9.1	
159	剥片	頁岩	2	B IV層中	-98229.260	43496.920	90.542	334	2.75	2.35	0.85	5.5	
160	剥片	珪質頁岩	3	B IV層中	-98231.300	43501.460	90.428	162	2.30	2.30	0.85	5.5	
161	剥片	チャート	18	B IV層中	-98231.650	43506.990	90.406	140	2.45	1.15	0.65	2.4 微細削離有、折れ有	
162	剥片	ホルンフェルス	4	H IV層中	-98223.020	43517.050	90.505	345	4.65	5.30	1.65	28.7 微細削離有	
163	剥片	珪質頁岩	2	B IV層上	-98237.320	43511.430	89.374	520	3.00	4.10	1.05	18.0	
164	剥片	チャート	8	B IV層中	-98225.320	43509.050	90.568	109	1.85	1.40	0.45	0.7	
165	剥片	珪質頁岩	2	B IV層中	-98242.860	43505.160	89.885	538	4.65	2.35	1.10	19.0	
166	剥片	チャート	8	B IV層上	-98226.220	43509.490	90.552	29	2.00	2.55	1.20	5.2	

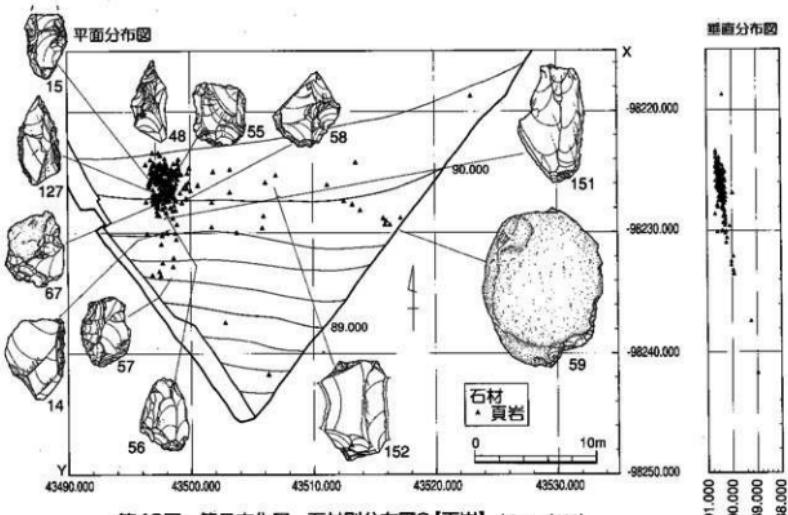
第6表 第III文化層 出土遺物 観察表(3)【剥片】



第47図 第III文化層 遺物分布図4【チップ】(S=1/400)



第48図 第Ⅱ文化層 石材別分布図1【チャート】(S=1/400)



第49図 第Ⅲ文化層 石材別分布図2【頁岩】(S=1/400)

### 珪質頁岩（第50図）

133点出土した。石器の種類はナイフ形石器2点、台形石器1点、角錐状石器1点、スクレイバー8点などがある。表面はオリーブ黒～赤灰色を呈する。色調、粒度、光沢等を分類基準として5種類の母岩に分類する。分布状況は、頁岩とは同じで「A集中域」に属する。頁岩と比較して緻密で硬質な珪質頁岩は、頁岩と一緒に搬入し消費したものと考える。

### ホルンフェルス（第51図）

77点出土した。石器の種類はナイフ形石器1点、台形石器1点、角錐状石器3点、スクレイバーが2点などがある。表面は灰黄色～暗緑灰色と多様な色を呈す。色調、質感、混入変成鉱物等を分類基準として9種類の母岩に分類する。但し、分布状況は、「A集中域」と「B集中域」の双方に若干のまとまりが看取されるが、調査区全体に散らばっている。チャートを中心とした集中域、頁岩系の石材を中心とした集中域の双方に持ち込まれ活用したものと考える。

### 黒曜石（第52図）

23点出土した。石器の種類は角錐状石器1点、細石刃1点などがある。色調、透明感、気泡の混入具合等を分類基準として3種類の母岩に分類する。分布状況を述べる上で出土資料数が少ないものの、「A集中域」「B集中域」のどちらにも属さない「全体散布」の様相を呈している。

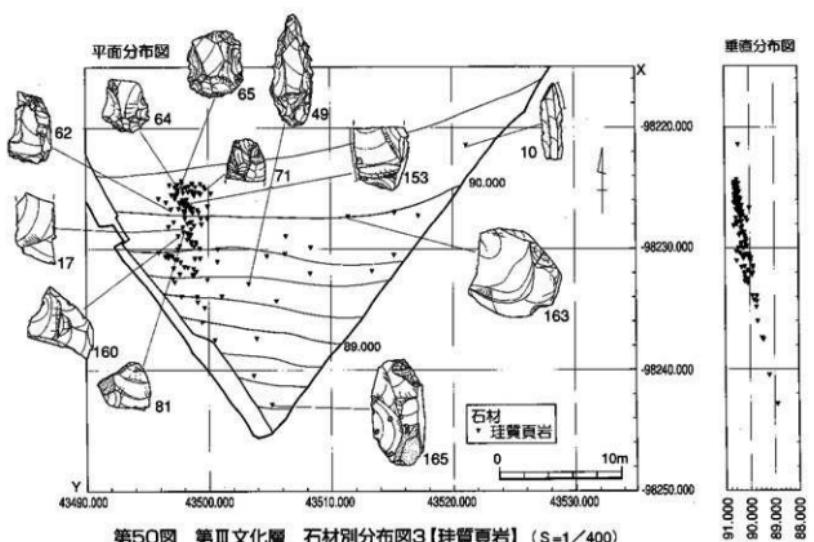
### 砂岩、尾鈴山酸性岩、流紋岩（第53図）

3種類の石材あわせて15点（砂岩10点、尾鈴山酸性岩3点、流紋岩2点）が出土した。石器の種類はナイフ形石器1点（砂岩）、台形石器1点（尾鈴山酸性岩）、スクレイバー1点（尾鈴山酸性岩）、蔽石2点（砂岩）などがある。色調、質感、粒度等を分類基準として、砂岩3種類、尾鈴山酸性岩2種類、流紋岩1種類の母岩に分類する。分布状況は、黒曜石と同様で出土資料数が少なく「全体散布」の様相を呈している。

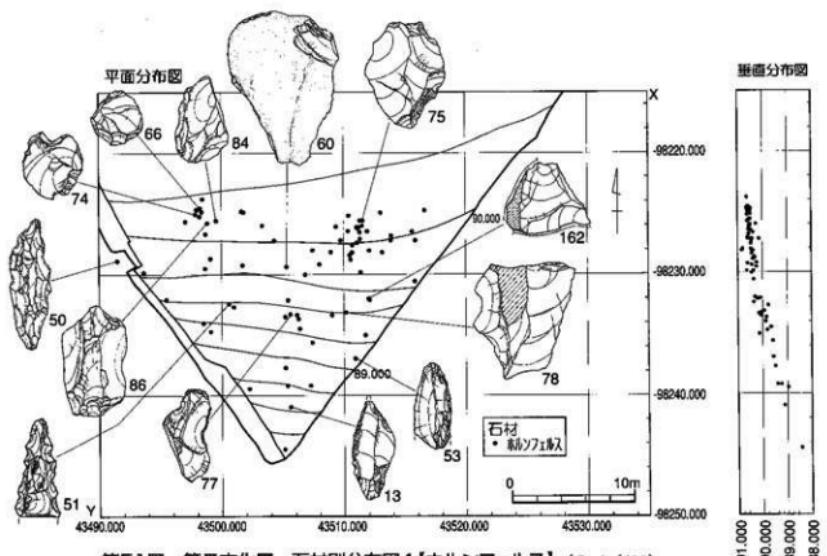
### 礫（第54図）

礫は155点出土し、総重量2,310gを量る。ホルンフェルスの出土数が最も多いが、重量別では砂岩が上回る。ほとんどが破碎礫で原形をとどめていないのに対し、砂岩は割れていても比較的大きいものが出土している。石器素材として活用度の大きかったチャート並びに頁岩・珪質頁岩はほとんど含まれない。石器素材との使い分けがなされていたものと考えられる。また、全体または一部分の赤化が認められるものが全体の半数以上を占め、他の文化層と比較しても赤化度は大きい。分布状況は、石器の分布状況とよく似た特徴を呈し、西側では楕円状の集中域、東側では傾斜に沿っての細長い集中域が看取できる。これは、それぞれ石器分布における頁岩系の石器集中域（「A集中域」）と、チャート系の石器集中域（「B集中域」）とに重なり合う。

このようなことから、石器を製作し活用する人々の営みにおいて、何らかの目的で礫が持ち込まれ、利用されたものと考える。半数以上が赤化していることから、熱源としての利用が推察できる。

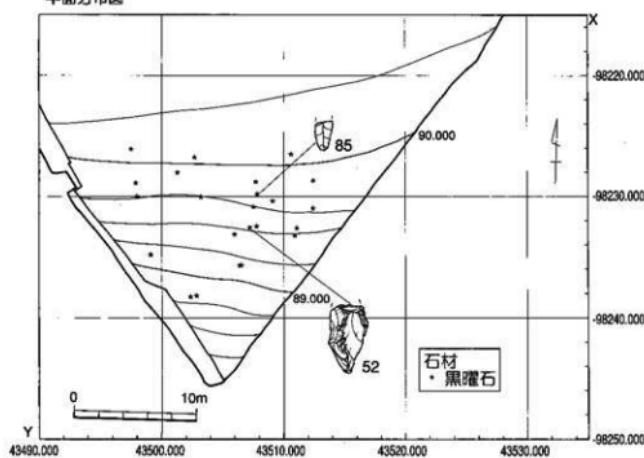


第50図 第III文化層 石材別分布図3【珪質頁岩】(S=1/400)



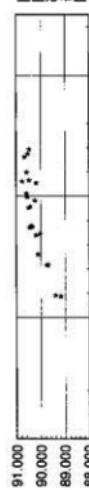
第51図 第III文化層 石材別分布図4【ホルンフェルス】(S=1/400)

平面分布図

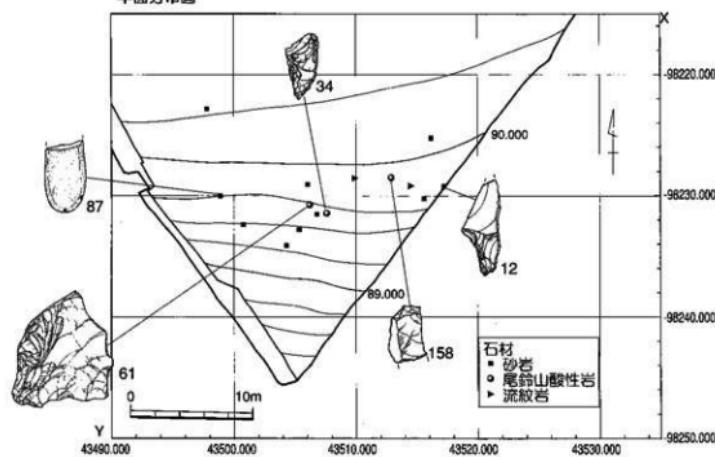


第52図 第III文化層 石材別分布図5【黒曜石】(S=1/400)

垂直分布図

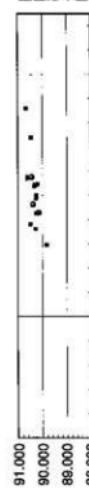


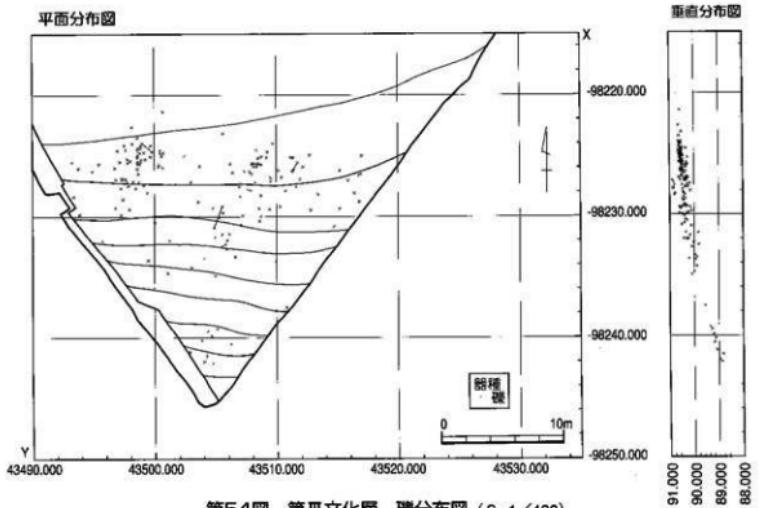
平面分布図



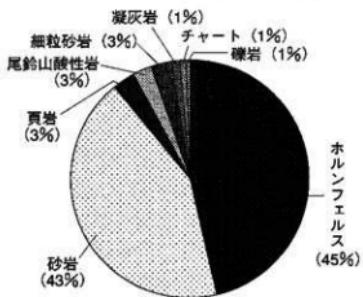
第53図 第III文化層 石材別分布図6【その他の石材】(S=1/400)

垂直分布図

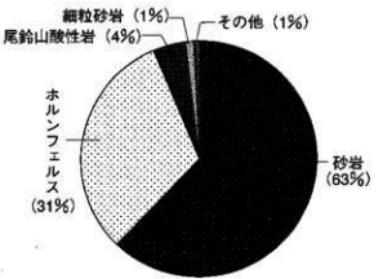




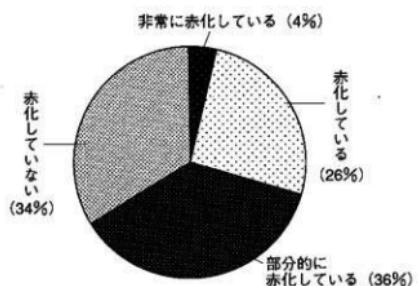
第54図 第Ⅲ文化層 磚分布図 ( $S=1/400$ )



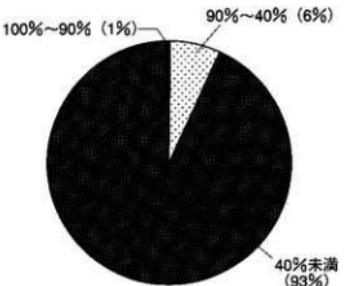
(1) 石材分類グラフ (個体数) 総数155個体



(2) 石材別重量グラフ (総重量2310.6g)

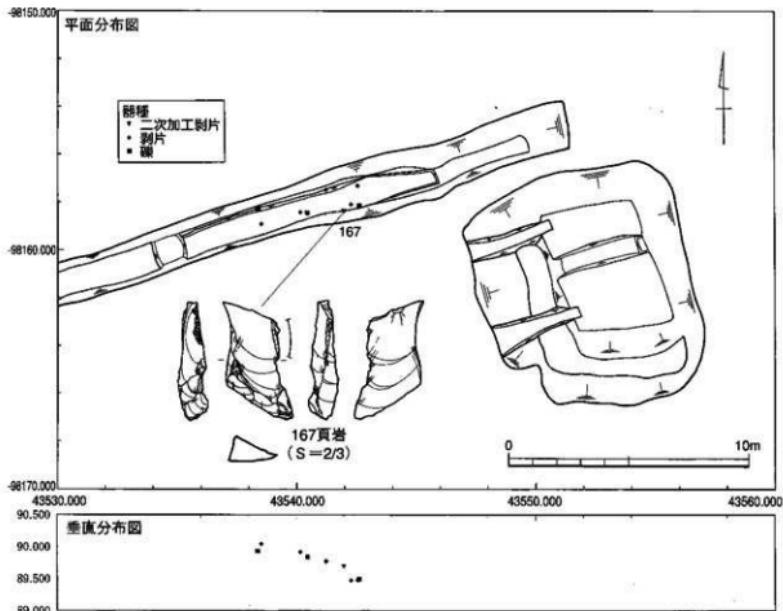


(3) 焼成度グラフ



(4) 完形度グラフ

第55図 第Ⅲ文化層 磚分析図



第56図 第Ⅲ文化層(D区) 遺物分布図(S=1/200)

### (5) D区の遺物

D区において残存するIV層は、削平の影響を受けてわずかである。出土石器は二次加工剥片1点と剥片5点で、石材は剥片の1点が砂岩で残りは珪質頁岩である。また、砾は3点出土した。167は縦長剥片を素材とし、左側面に背面からの加工痕があり、右側縁部には微細剥離がある。硬質で粒子が非常に緻密な珪質頁岩を石材としている。※座標値は巻末に添付

### (6) 小結

この期における植生と環境を植物珪酸体分析から推定すると、当時はクマザサ属(ミヤコザサ節)などのササ類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、少量ながらチシマザサ節やチマキザサ節なども見られる。このことからこの時期にはそれ以前よりも積雪量(降水量)が増加した可能性が考えられる。クマザサ属は雪の中でも緑を保ち、冬季においてはシカなどの草食動物にとって重要な食物となっている(高槻,1992<sup>※1</sup>)ことから、動植物とともに豊かな環境にあったものと推測できる。

このような環境において活用石材を含めて人間の営みを推察すると、チャートを主体としたものと、頁岩・珪質頁岩を主体としたものとの2つの文化が浮かび上がる。そして、いずれも短期間滞在したキャンプ地的な様相が推測できる。この2つの時代差は明確ではないことから、今後とも石器製作技術の違いや出土レヴェルの差などをもとに研究・検討していく必要がある。

<sup>※1</sup>高槻成紀(1992)「北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学ー」どうぶつ社

### 3 旧石器時代 第Ⅱ文化層の遺構と遺物

#### (1) 第Ⅱ文化層の概要

第Ⅱ文化層は、C区北西部の一部分を除いてB～E区の全般にわたって残存している。層位では始良丹沢火山灰層の下層に位置し、本遺跡においてはⅣ層にあたる。また、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う調査においては「MB 2」～「MB 3」に相当する。層の特徴として火山性ガラスや輝石を含む硬い土質で「ブラックバンド」とも呼称される。ここでは、礫群4基と遺物集中域1基を検出し、この遺物集中域では、ナイフ形石器や二次加工剥片など約180点余りが出土した。また、遺物集中域以外では、B、C区でスクレイバーや二次加工剥片など約60点余り、D、E区ではナイフ形石器や二次加工剥片など約80点が出土した。出土レヴェルは遺物集中域がⅣ層上位で、他は若干下がる。東九州自動車道建設に関連する調査においては「MB 2」に相当する。始良丹沢火山灰層下以前の時期となることから、約2万4千年をさかのばる文化層と考える。

#### (2) B、C区の遺構と遺構に関わる遺物

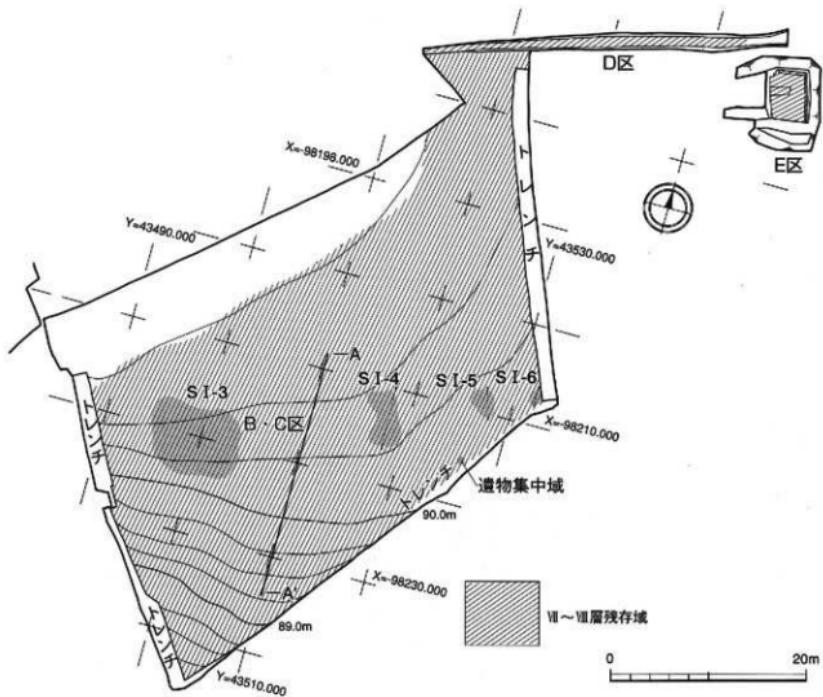
##### S I 3 (第59図)

C区の中央よりやや西側で標高約90.3m～90.4mの地点、南に下る斜面の際付近で検出された。東西に約8m、南北に約6mを測る楕円形の範囲で、若干の剥片や敲石を含み290点の礫が散在する。掘り込みや配石はない。10～50cmの出土レヴェルの差があり、南の傾斜地に向かうにつれレヴェル差は大きくなる。礫は割れた円礫が多く、ほぼ完形を保つものは12%にすぎない。礫の重量は平均207.3gで平均的な1個体の礫の大きさは、長さ7.4cm、幅4.9cm、厚さ2.9cmを測る。また、ほとんどの礫にあたる98%が赤化しており被熱によるものと考えられるが、炭化物の検出には至らなかった。石材は数量及び重量ともに90%以上を砂岩とホルンフェルスが占める。

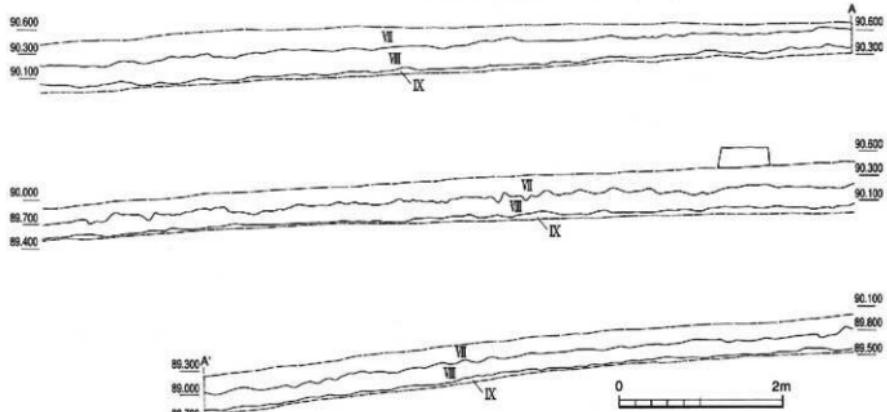
礫の接合関係を調べた結果118点、全体の約40%の礫が接合した。また、接合した礫はほぼ大きさの等しい亜円礫となり、平均重量370.5g、平均の大きさは、長さ11.2cm、幅7.2cm、厚さ4.0cmを測る。近辺の川沿い（境谷川もしくは鬼附女川）、あるいは開析谷沿いでほぼ等しい大きさの亜円礫を採取し持ち込んだ可能性が高い。被熱によって礫が分割したのか、分割して礫の表面積を大きくして被熱させたのかは不明である。

この接合関係を図化すると大きく2つのまとまりに分かれ、相互のまとまり同士の接合関係がないことから、調査当初は1基の礫群と認識していたが2基の礫群が隣接したものと判断する。西側の礫群は約3.5m×約2.5m、東側の礫群は約4m×約4mの範囲で形成されたものと推察する。時代差を明らかにする切り合い関係は不明である。

さらに、この礫群において何らかの植物利用の跡を調べる目的で植物珪酸体分析を行う。資料は礫群内から6点、礫群の外から比較資料として2点採取した。その結果、周辺はウシクサ族、シバ属、ヌマガヤ属（？）、クマザサ属（ミヤコザサ節）などが生育する草原的な環境であったと考えられ、部分的にキビ族やススキ属も見られたと推定される。この結果は、基本土層における始良丹沢火山灰層下位層の結果と類似しており、礫群内とその外側においても植物珪酸体の組成や量にとくに大きな差異は認められなかった。つまり、礫群内でなんらかの植物利用はなされていなかった可能性が高いことが分かる。この植物珪酸体分析に関する数値は第IV章に記す。



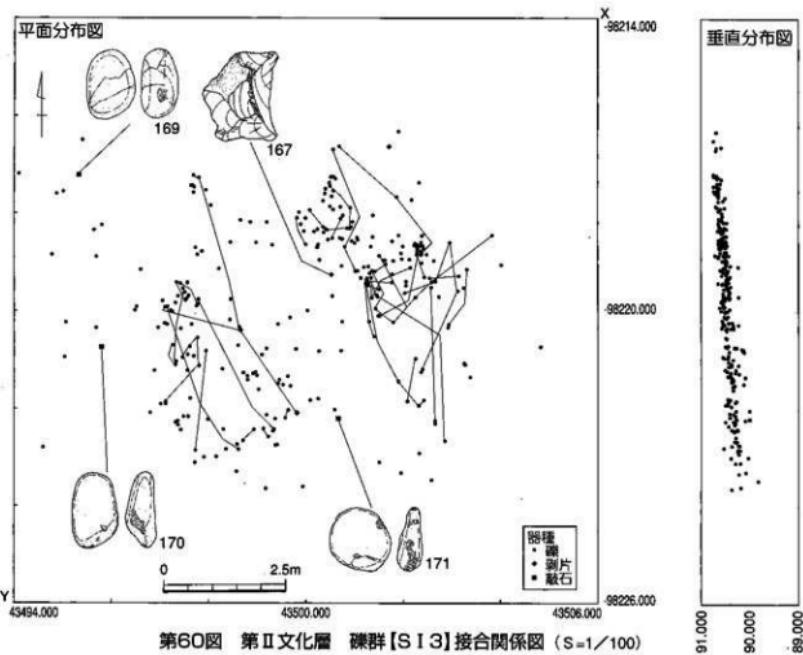
第57図 VI～VII層残存域及び遺構分布図 (S=1/500)



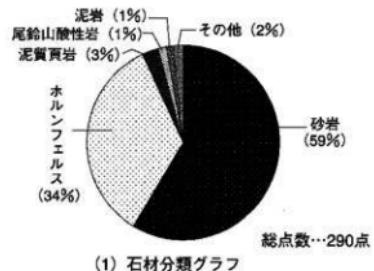
第58図 B,C区中央部 土層断面図 (S=1/60)



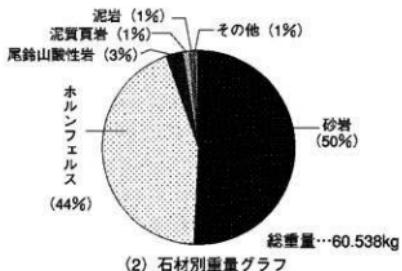
第59図 第II文化層 磚群[S13]実測図 (S=1/50)



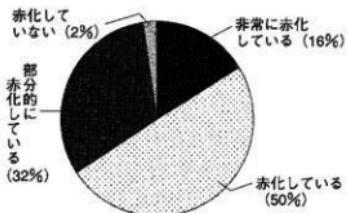
第60図 第Ⅱ文化層 碑群【SI3】接合関係図 (S=1/100)



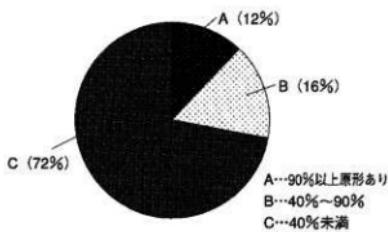
(1) 石材分類グラフ



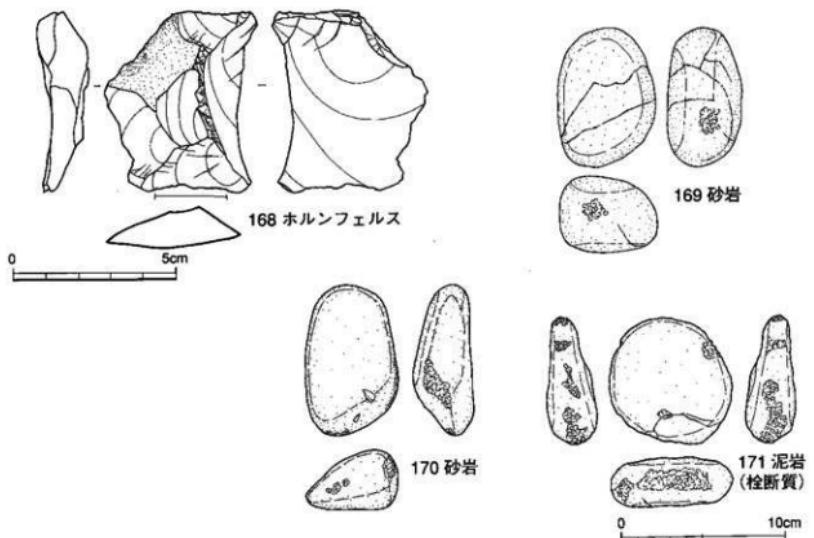
(2) 石材別重量グラフ



(3) 碑の赤化度グラフ



第61図 第Ⅱ文化層 碑群【SI3】分析図



第62図 第II文化層 磁群[S I 3]出土 石器実測図 (168はS=2/3、169~170はS=1/3)

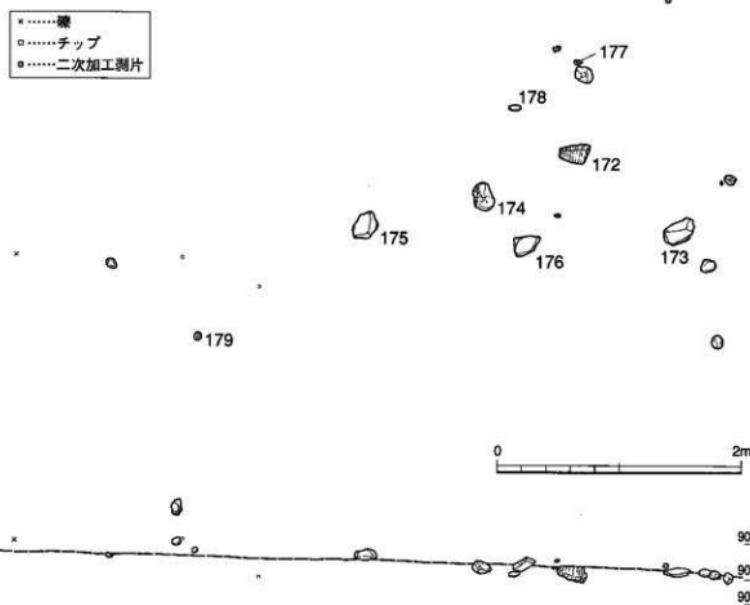
No.	器種	石材	加工上区分	層	加工方法 及加工度	加工上度 及度	レベル	注記番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
168	石片	ホルンフェルス	C	Ⅲ層	-	-	43500	020	90.560	5.40	1.60	29.5	
169	敲打石	砂岩	C	Ⅳ層	-	-	43492	331	90.685	8.00	6.02	361.0	
170	敲打石	砂岩	C	Ⅳ層	-	-	43500	853	90.504	12.69	9.70	3.72	202.0
171	敲打石 (泥岩質)	C	Ⅳ層	-	-	-	43495	801	90.390	7.90	7.50	3.08	217.0

第7表 第II文化層 磁群[S I 3]出土遺物観察表

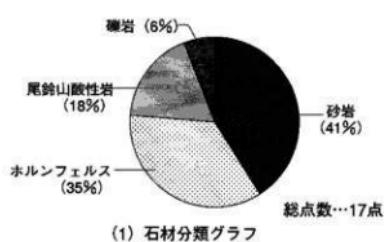
168は、複剥離打面で縦長剥片である。背面には一部自然面を残す。右側からの加撃により不定形剥片を剥出した後、石核の打面を新たに90°回転させて剥出された打面再生剥片である。169は下部に顕著な敲打痕が残る。また、衝撃によるひび割れも看取できる。170は亜敲打石で、下部や右側面下部の痕跡を敲打痕と積極的には言い難い。また、171も同様で丸餅状の亜敲打石である。いずれも参考資料として掲載する。

#### S I 4 (第63図)

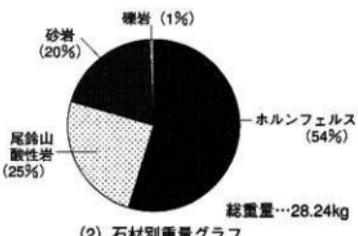
S I 3から東北東に約20m離れ、南に下る傾斜が緩やかな地点に位置する。径約5m×約2.5mの範囲内に17点の遺物で構成される。石材では砂岩の数が多いが、重量別ではホルンフェルスが50%以上を占め、その後は尾鈴山酸性岩、砂岩となる。磁のほとんどが赤化しておらず、また、ほとんど原形を留めるものが75%を超える。その中に重さ3,000 gを超す台石が5点含まれ、周辺に敲打石や磨石が散在する。炭化物は確認されず、掘り込みも伴わないほど平坦な地形に位置する。



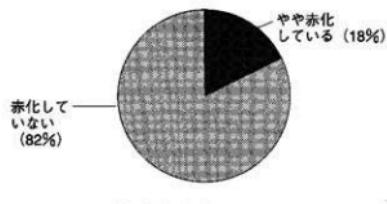
第63図 第Ⅱ文化層 碓群[S I 4] 実測図 (S=1/40)



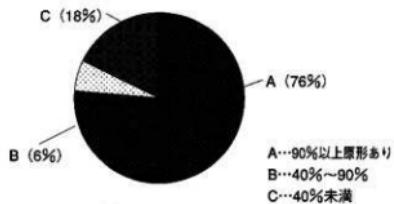
(1) 石材分類グラフ



(2) 石材別重量グラフ

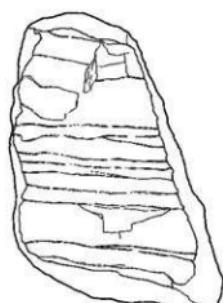


(3) 赤化度グラフ

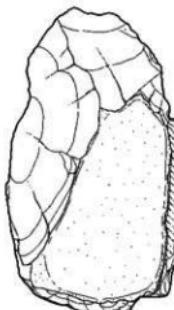


(4) 完形度グラフ

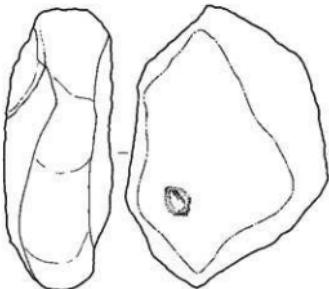
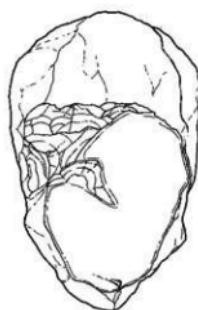
第64図 第Ⅱ文化層 碓群[S I 4] 分析図



172 ホルンフェルス



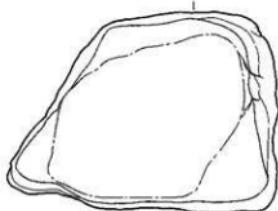
173 砂岩



175 尾鈴山酸性岩



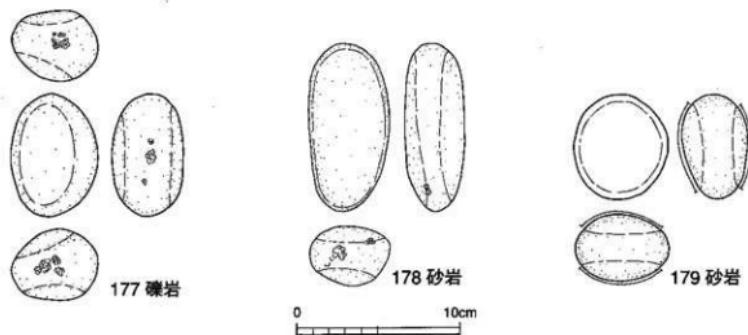
174 ホルンフェルス



176 ホルンフェルス

0 10cm

第65図 第Ⅱ文化層 磚群【S14】出土 石器実測図1 (S=1/4)



第66図 第II文化層 碾群[S I 4]出土 石器実測図2 (S=1/3)

No.	種類	石材	出土位置	量	国土地理院 地図	国土地理院 測量記号	レバカル	直角 長さ(cm)	幅 幅さ(cm)	厚さ 厚さ(cm)	重さ 重さ(g)	備考
172	台石	ホルンフェルス	C	錠	-98214.529	43515.511	90.211	1228	25.16	17.08	9.15	5744.0 SI-4
173	食石	砂岩	C	錠	-98218.454	43517.971	90.207	1224	23.96	15.75	6.76	2396.0 SI-4
174	台石	ホルンフェルス	C	錠	-98213.491	43518.259	90.256	1224	24.95	15.76	11.46	4714.0 SI-4
175	台石	尾鷲山鱗片岩	C	錠	-98213.922	43517.999	90.373	1223	23.26	16.68	8.95	4429.0 SI-4
176	台石	ホルンフェルス	C	錠	-98214.219	43517.862	90.295	1228	22.16	16.56	7.80	4194.0 SI-4
177	錠	砂岩	C	錠	-98214.659	43515.366	90.210	1230	7.55	5.48	4.46	241.0 SI-4
178	錠	砂岩	C	錠	-98214.145	43519.264	90.341	1227	10.46	5.98	3.70	372.0 SI-4
179	錠	砂岩	C	錠	-98212.630	43511.551	90.420	1225	6.48	5.86	4.10	194.5 SI-4
180	ナイフ	錠	C	錠	-98209.470	43527.460	90.329	787	1.55	1.06	1.45	0.4 SI-5
181	刀	錠	C	錠	-98209.880	43527.640	90.328	761	2.40	3.63	1.16	6.5 SI-6
182	錠	ホルンフェルス	C	錠	-98207.130	43533.250	90.350	709	5.35	4.98	1.28	21.0 SI-6

第8表 第II文化層 碾群[S I 4, S I 5, S I 6] 出土遺物観察表

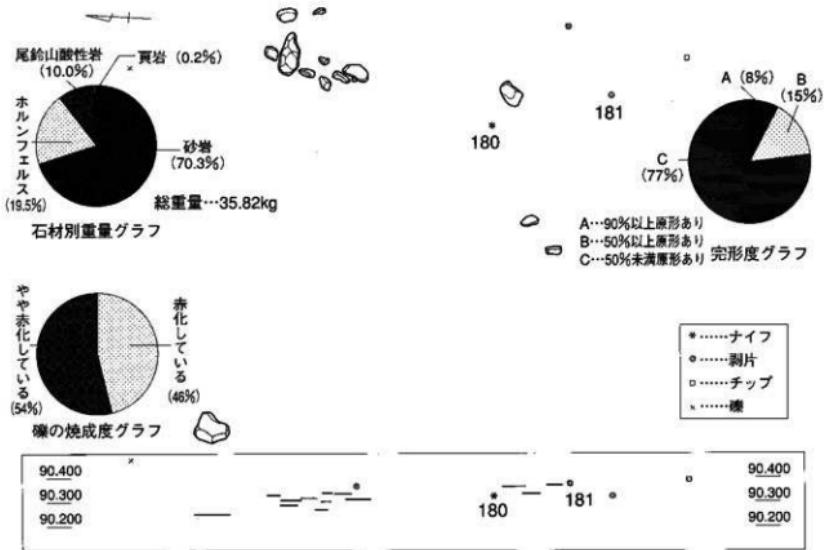
S I 4では重量が大きく、表裏面に平坦面が確認されるもの5点を台石とした。172は、断面がほぼ長方形となり、節理が平行に走る。173は右上部が欠損しているが、表面に平坦面を有す。174は裏面が平坦で表面に若干の窪みを残す。175は表面が若干窪みのある平坦面で、その中央やや左下に敲打痕が見られる。176は表裏ともに平坦面を有し、安定感がある。また、表面には若干の窪みと敲打痕が見られる。177、178は敲石で179は磨石である。177は組成粒子の大きい砾岩で、上部と下部及び右側面の一部に敲打痕が残る。178は下部に若干の敲打痕が残る。179は上面と下面に磨痕が残る。磨面は、部分的に赤化する。

### S I 5(第67図)

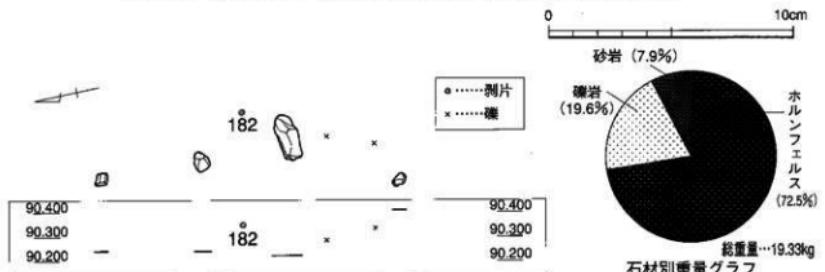
S I 4から東北東に約10m離れたほぼ平坦地に位置する。径約2m×約1.8mの範囲内にナイフ形石器1点、剥片2点、砾13点など19点の遺物で構成される。砾13点のうち約7割を砂岩が占め、ほとんどに赤化が認められる。また、砾の完形成度は低い。180は上部が折れて欠損しているナイフ形石器で、左側縁に腹面からの調整がある。181は背面に若干の自然面を残す横長剥片である。

### S I 6(第68図)

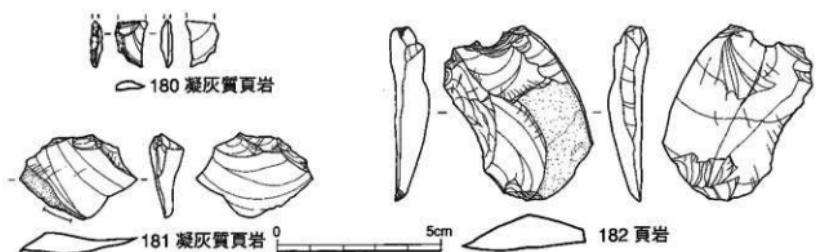
S I 5から東北東に約5m離れ、C区最西部の平坦地に位置する。径約1.3m×約0.4mの範囲内に剥片1点、砾6点で構成される。砾は個体数では砂岩が多いものの、重量別ではホルンフェルスが7割以上を占める。182は背面に自然面を残し、不定形剥片を剥出した痕が残る。継長剥片である。



第67図 第II文化層 瓦群【SI 5】実測図 (S=1/20) 並びに分析図



第68図 第II文化層 瓦群【SI 6】実測図 (S=1/20) 並びに分析図



第69図 第II文化層 SI 5並びにSI 6出土石器実測図 (S=2/3)

### 遺物集中域（第70図）

S I 5から南に約6m離れ、調査区南東部の土層確認のサブトレンチ近くに位置し、径約1.8m×約1.2mの範囲内に183点の石器が集中する。器種内訳はナイフ形石器5点、二次加工剥片4点、石核1点、剥片81点、チップ92点となる。石器の最大長の平均が1.58cm、重量の平均が1.7gで、小粒な石器が集中している。層位ではⅦ層上位にあたり、姶良丹沢火山灰層にパックされた様相を呈す。石材は全て凝灰質頁岩で、同一母岩の可能性が高い。接合状況では6個体の接合資料（接合資料32～37）が確認された。

183～187（第72図）はナイフ形石器である。183は右側縁部に腹面から加工が施される。上部にあたる刃部が欠損している。184、185はいずれも背面図が二等辺三角形の形状を呈し、右側縁の刃剥し部分に腹面からの加工が施される。185には若干の対向調整加工が施される。また、基部には背面からの調整が見られる。186は左側縁部に対向調整による刃剥し加工が施される。さらに、基部は急角度の加工により素材の継長剥片打面部を除去している。187は接合資料32でもあり、上部と下部の折れ面接合である。二側縁加工が施され、形態は切出状に近い。左側縁部は対向調整、右側縁部は腹面からの調整が施される。188～190は二次加工剥片である。188は上部に細かな加工痕、左側縁部と下部に若干の加工痕がある。189は自然面を背面にもち、右側縁部に腹面からの加工痕がある。190は継長剥片が折れた後、折れ面を腹面から加工している。

接合資料33（第74図）は剥片4点が接合する。正面左下方からの加撃で191を剥出し、その際に形成された打面からの加撃で192、193を連続して剥出している。さらに打面を約90°回転させて石核から194を剥出している。

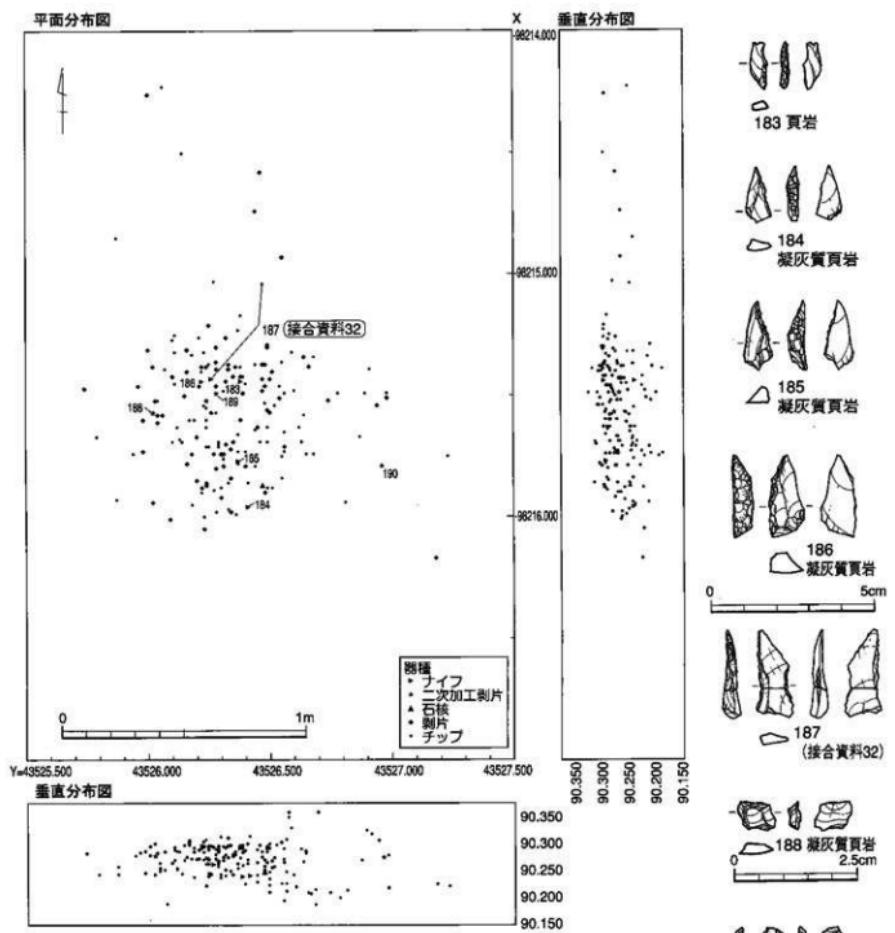
接合資料34（第75図）は剥片14点が接合する。接合体の外周には多くの自然面が残ることから、母岩は径が6～7cmであったことが推測できる。母岩の打面形成の後、正面図上部を打面として198、199の順で剥出し、さらに打点を90°回転させ197を剥出する。この後石核が分割され、左側面図左側の分割された石核からは、打点を180°回転させて196、195の順で剥出する。右側の石核からは正面図上面を打点として202を剥出し、打点を90°回転させ200を、そして再度打点をもじて201、203、205、206、204、207、208の順で剥出する。201からは継長剥片を連続して効率よく剥出していることが伺える。

接合資料35（第78図）は剥片2点が接合する。不定形剥片を剥出した後、打面を形成して210、211と連続して剥出する。

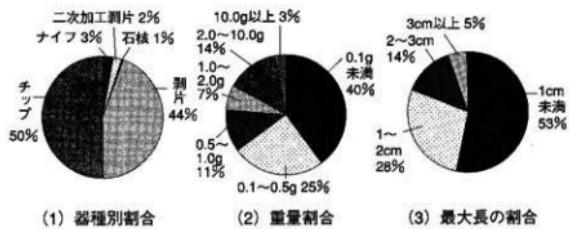
接合資料36（第79図）は剥片12点と碎片（チップ）1点が接合する。211を剥出した後、打面を90°回転させ212、213、215、214の順で剥出する。そして214が剥出された面を新たな打面として220、221、216を連続して剥出し、再度打面を正面図上部にして218、222を剥出する。さらに正面図右上に打面を形成して217を剥出し、最後に左斜め上からの加撃で219を剥出している。この資料からも、連続して剥片を剥出しようとする技術が伺える。また、223は剥片素材の石核の可能性もあり、ここからえぐる感じで剥片を剥出している。

接合資料37（第80図）は石核1点と剥片2点が接合する。打面を頻繁に転移させながら不定形剥片を剥出していったことが分かる。224、225のいずれも石核から剥片を剥出する最終段階のもので、剥離順は不明である。石核から頭部調整や打面調整をして、厚みのある剥片を剥出していったことが伺える。

接合資料38は剥片2点が接合する。石核からの剥出時に折れたものと考える。

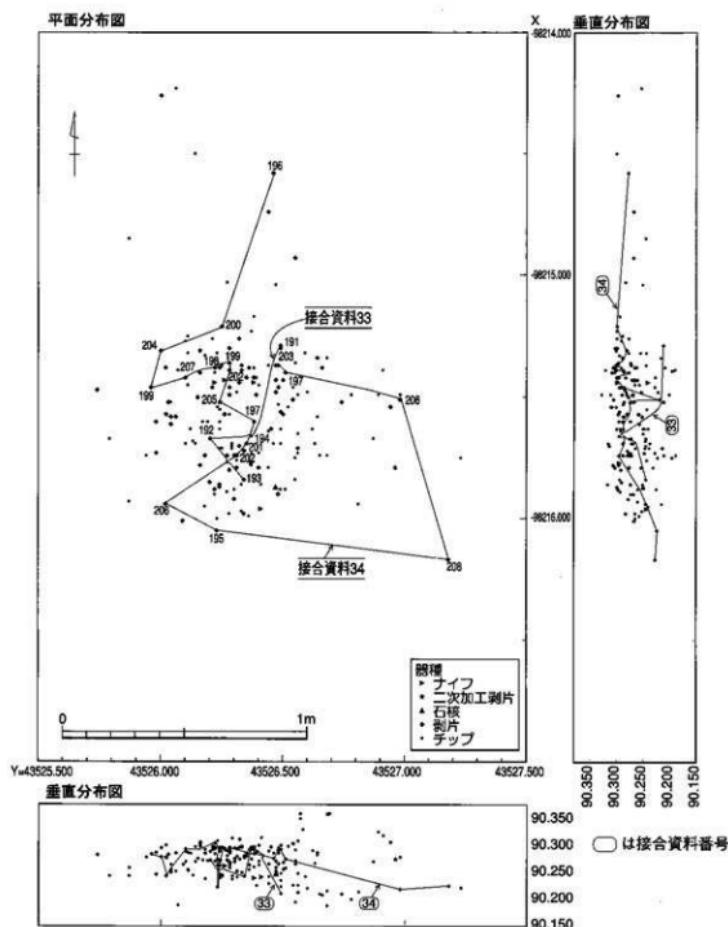


第70図 第II文化層 遺物集中域 石器分布図 (S=1/20)

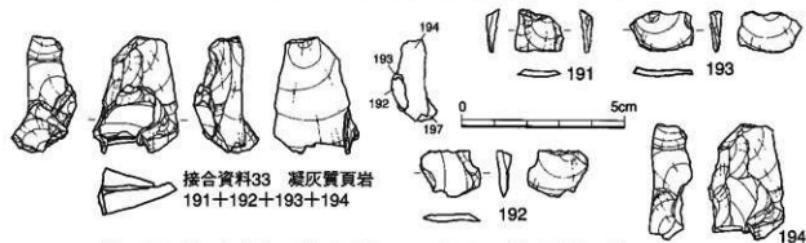


第71図 第II文化層 遺物集中域 石器分析図

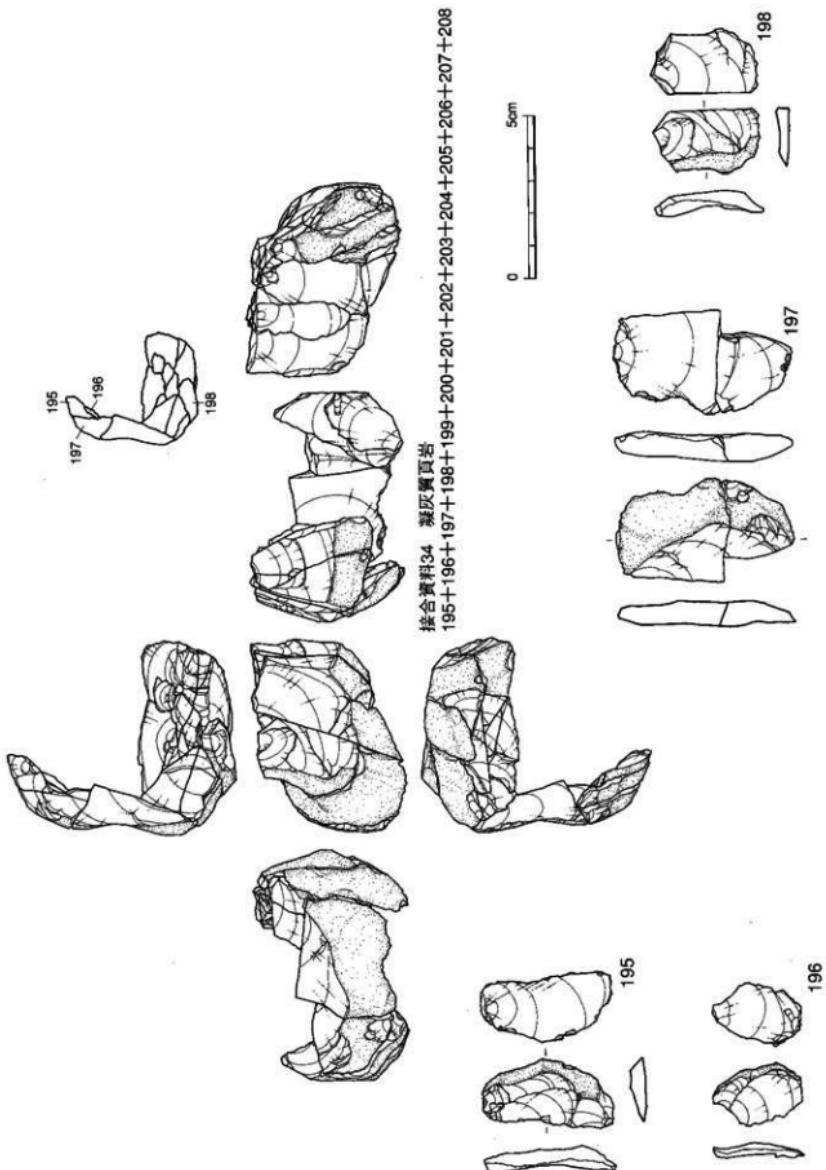
第72図 第II文化層  
遺物集中域 石器実測図  
【ナイフ形石器、二次加工剥片】  
(S=2/3 ※188のみ1/1)



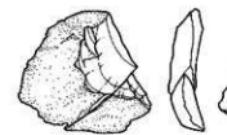
第73図 第II文化層 遺物集中域 石器分布と接合状況図1 (S=1/20)



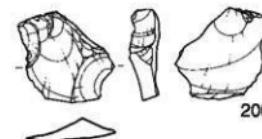
第74図 第II文化層 遺物集中域 石器実測図2【接合資料33】(S=2/3)



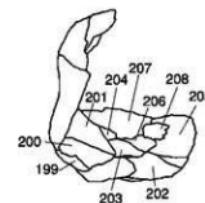
第75図 第II文化層 遺物集中域 石器実測図3【接合資料34-1】(S-2/3)



199



200



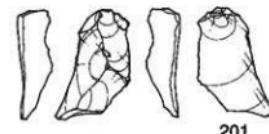
200

199

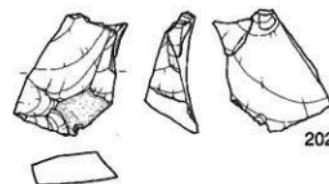
203

202

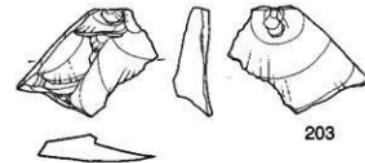
0 5cm



201



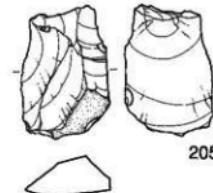
202



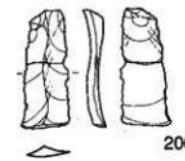
203



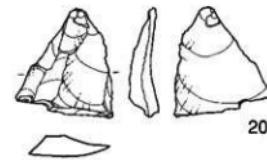
204



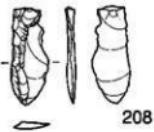
205



206

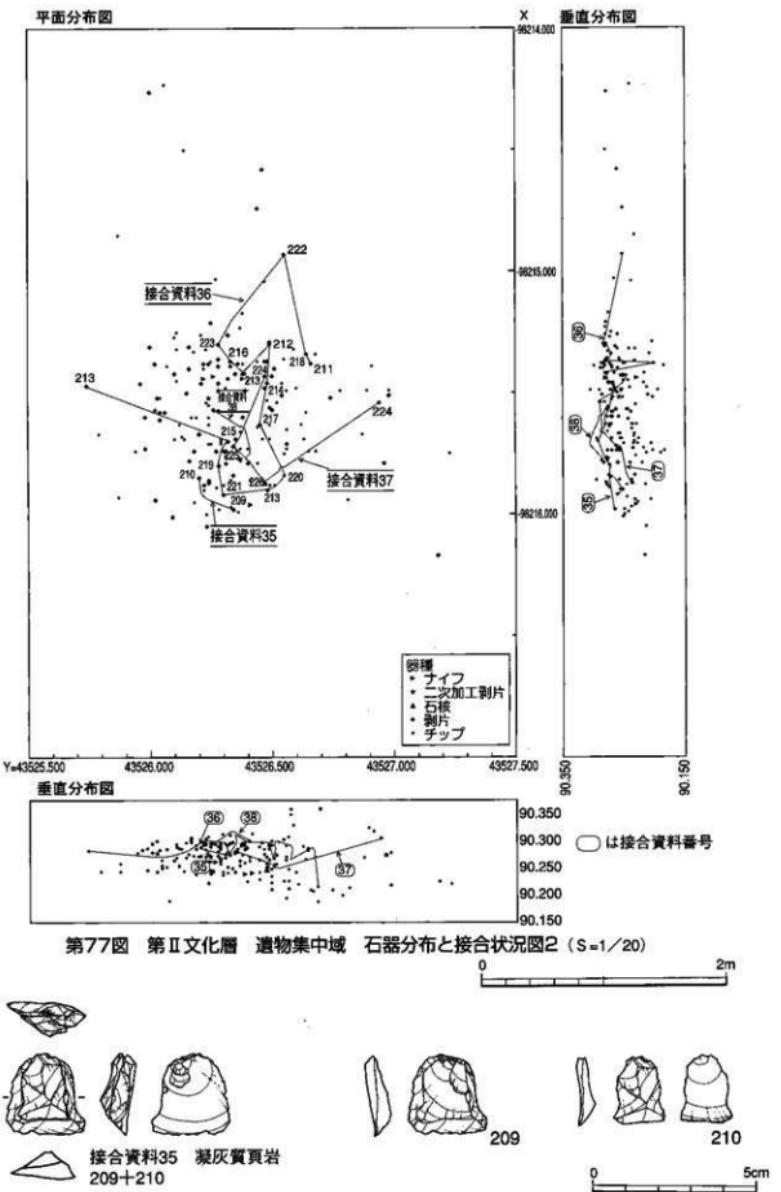


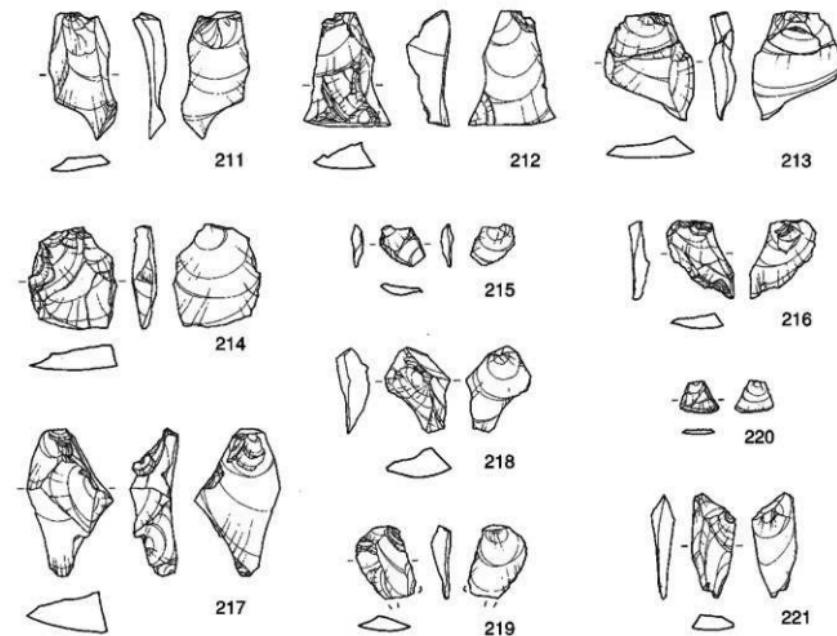
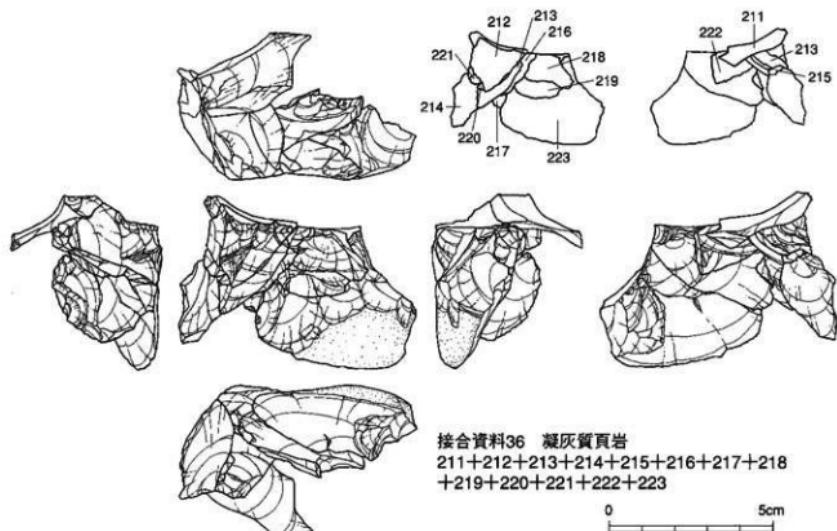
207



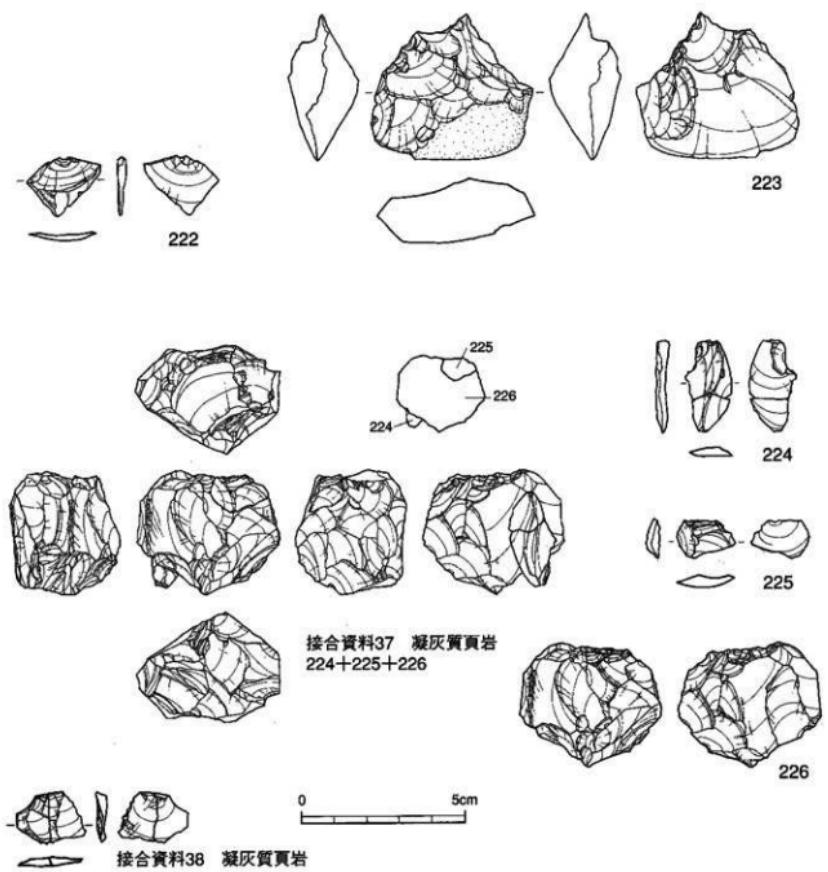
208

第76図 第II文化層 遺物集中域 石器実測図4【接合資料34-2】(S-2/3)





第79図 第II文化層 遺物集中域 石器実測図6【接合資料36-1】(S-2/3)



第80図 第II文化層 遺物集中域 石器実測図7 (S=2/3)



石材 器種	チャート	ホルンフェルス	凝灰質頁岩	珪質頁岩	砂 岩	尾鷲山酸性岩	頁 岩	流紋岩	総計
スクレイパー							1		1
二次加工剥片		1					2		3
剥 片		16		2			8	1	27
チップ	2	9	2				11		24
穀 器		1							1
敲 石				5					5
磨 石				1	1				2
原 石	1								1
総 計	3	27	2	2	6	1	22	1	64

第10表 第II文化層B,C区出土の石器・石材組成（礫群内と遺物集中域の石器は除く）

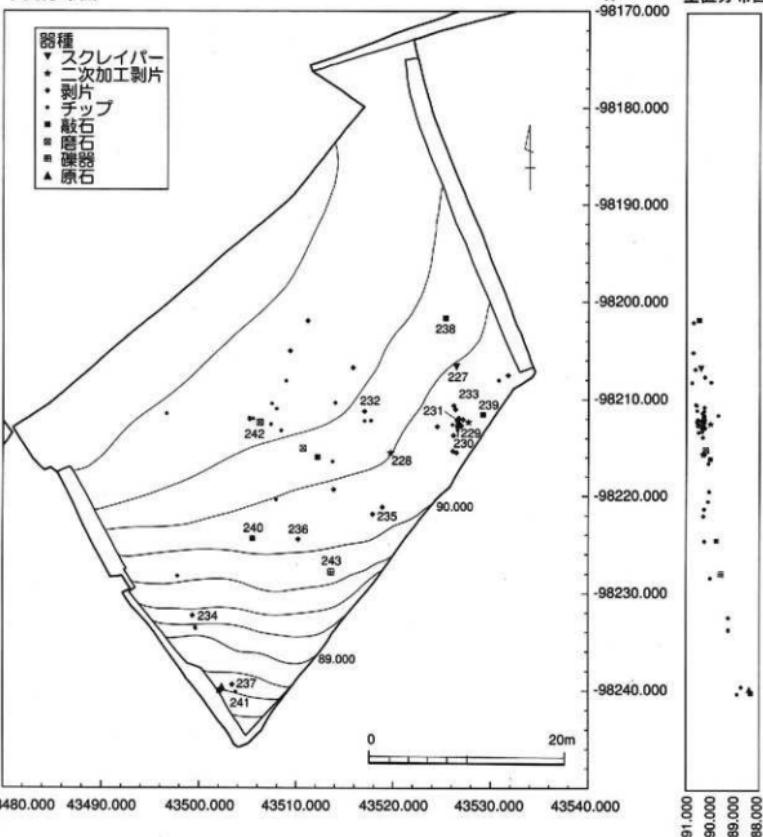
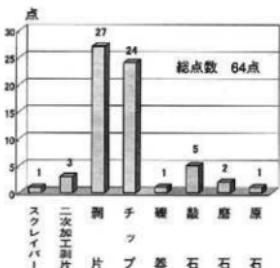
227はスクレイパーである。縦長剥片を素材とし、右側縁部に腹面から調整を加え刃部作出を施す。上部は欠損している。228～230は二次加工剥片である。228は剥出の際の打面部分を腹面からの加撃で取り除く。下部は欠損している。229は上下部ともに欠損している。右側縁上部に腹面からの加工痕がある。230は縦軸と横軸がほぼ同一の長さになる剥片で左側縁部には腹面から、右側縁部には背面からの加工痕がある。231～237は剥片である。231は下部に自然面を残す縦長剥片で右側縁下部に微細剥離がある。232はやや幅広の縦長剥片で、背面右側には不定形剥片を剥出した痕跡を残す。233は背面に多方向から剥片を剥出した痕があり、下部には自然面を残す。234はサイコロ状の厚みのある剥片で、左側縁部に粗い剥離痕がある。235は背面がほとんど節理面で、右側縁部に剥離痕がある。複剥離打面を有す。236は背面下部に背面側からの剥離痕がある。単剥離打面を有す。237は単剥離打面を有し、背面には不定形剥片を連続して剥出した痕がある。また、左側縁部に微細剥離が観察できる。238は敲石である。下端部と右側面に敲打痕が残る。砂岩円礫を使用し上部は欠損している。239～241は亜敲石である。敲打痕らしき痕跡が残ることから参考資料として掲載する。242は磨石である。正面左上部分に顕著な磨り痕が残る。また、上下左右の端部に若干の敲打痕が残る。243は穀器である。自然面を多く残し、左側縁部に腹面からの加工痕がある。また、右側縁部は折れている。

石材別分布状況（第85図）においては、同一石材が集中して出土する様相は確認できない。また、表面の色調、光沢、質感、粒度、表出鉱物等を基準に石材別母岩数を求めるに、頁岩3種類、ホルンフェルス6種類、黒曜石3種類、チャート3種類、珪質頁岩2種類、凝灰質頁岩と流紋岩が各2種類となる。しかし、接合資料がないため確定できない。一つの石材にこだわらず、石器の特性に応じて比較的搬入しやすいものを活用したと推測できる。

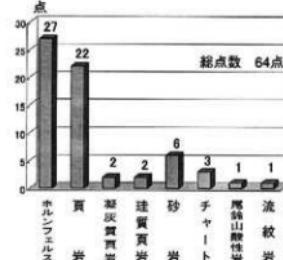
#### 礫（第86図）

礫は368点出土し、総重量22,277.1gを量る。個体数では砂岩が50%を超え、次いでホルンフェルスの順になるが、重量別ではホルンフェルスが50%を超える。石器の重量別石材活用の割合としては砂岩が80%を超えることから、礫塊石器として活用した以外の砂岩は破碎され、比較的小さいものが出土したと考える。また、石器として活用している石材も散在していることから、遺跡内に持ち込んだ可能性があるものの、加工を示す碎片等の出土はみられない。赤化度に関しては、赤化していないものが70%を超える。赤化を確認した礫も、付着した鉱物の酸化によるものもあることから、被熱によるものとは言い難い。分布状況については若干集中する部分はあるが、出土礫の様相から礫群としていない。

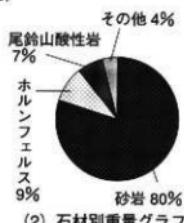
平面分布図

第81図 第II文化層 B,C区 出土石器 分析図 ( $S=1/500$ )

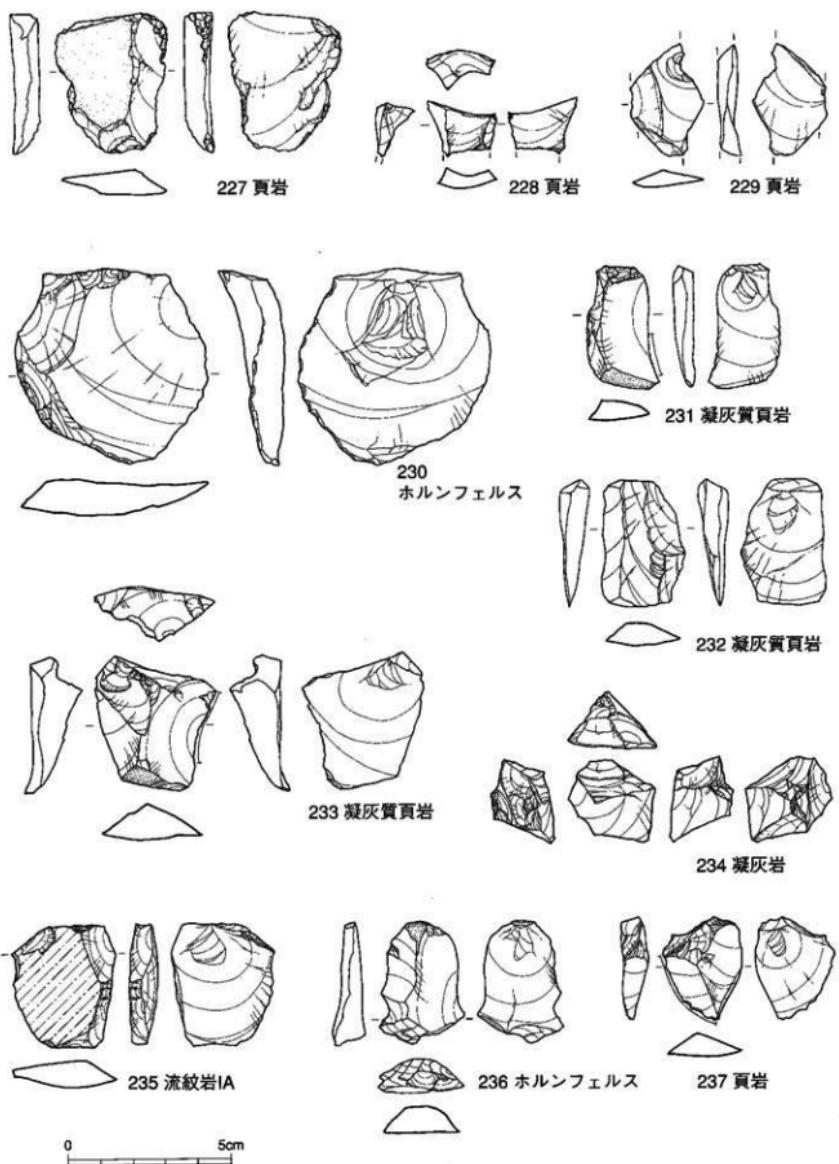
(1) 器種別分類グラフ



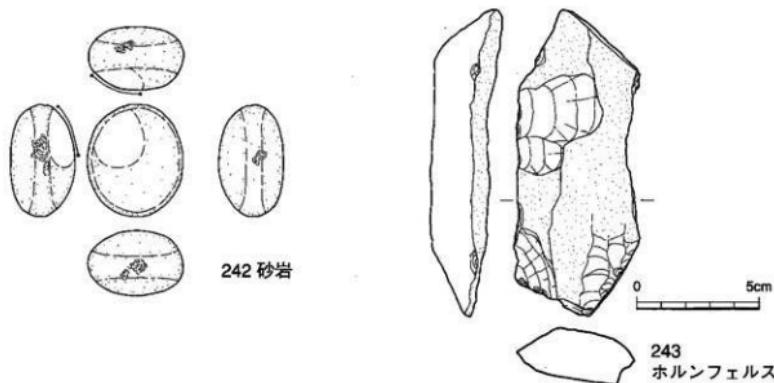
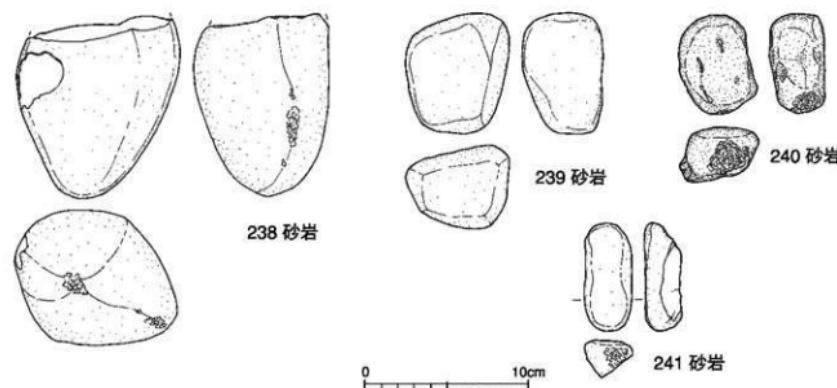
(2) 石材別分類グラフ



第82図 第II文化層 B,C区 出土石器 分析図



第83図 第II文化層 出土石器実測図1【スクレイバー、二次加工剥片、剥片】(S-2/3)

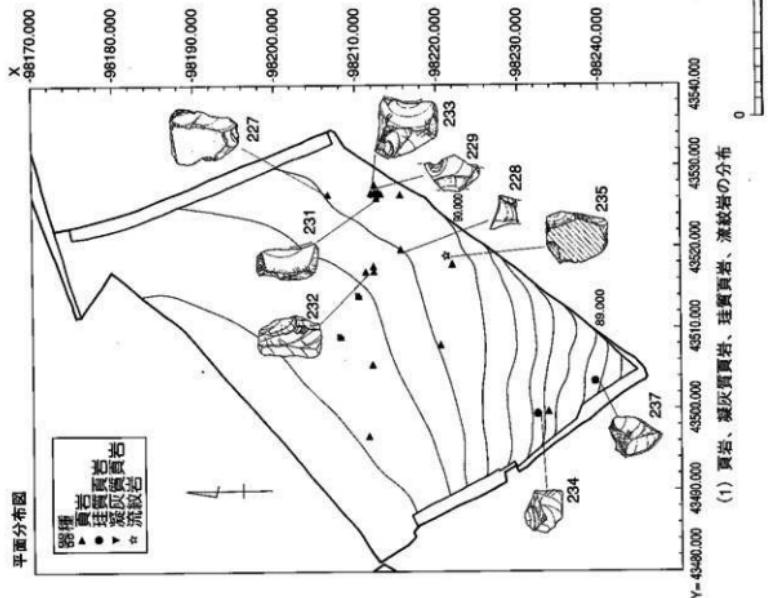


第84図 第II文化層 出土石器実測図2【敲石、磨石、礫石】(S=1/3, 243はS=1/2)

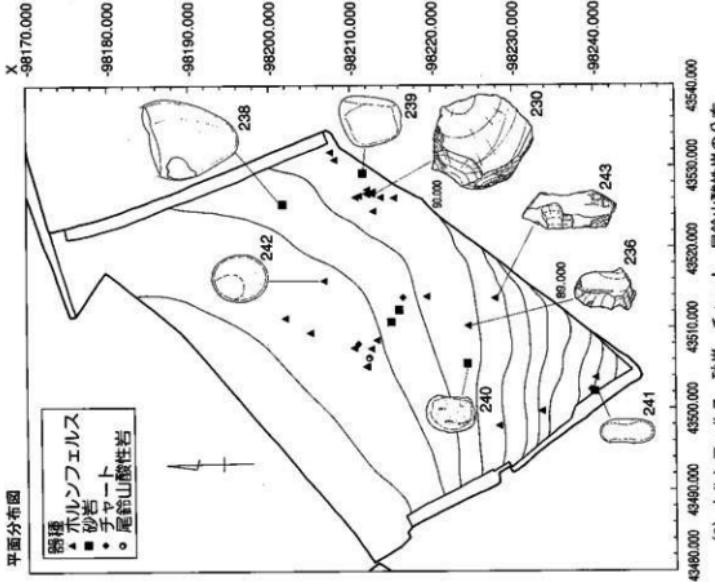
No.	器種	石材	出土区	層	国土土壤 A土壤	国土土壤 B土壤	レベル	注記 番号	最高 点(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
227	スクレーパー	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
228	二次加工削片	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
229	二次加工削片	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
230	二次加工削片	カルシフロカス	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
231	刮削片	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
232	刮削片	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
233	刮削片	頁岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
234	刮削片	透質頁岩	B	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
235	刮削片	透質頁岩	B	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
236	刮削片	カルシフロカス	B	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
237	刮削片	透質頁岩	B	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
238	敲打石	砂岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
239	敲打石	砂岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
240	敲打石	砂岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
241	敲打石	砂岩	C	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
243	ホルンフェルス	ホルンフェルス	B	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第11表 第II文化層 B.C区 出土石器 観察表

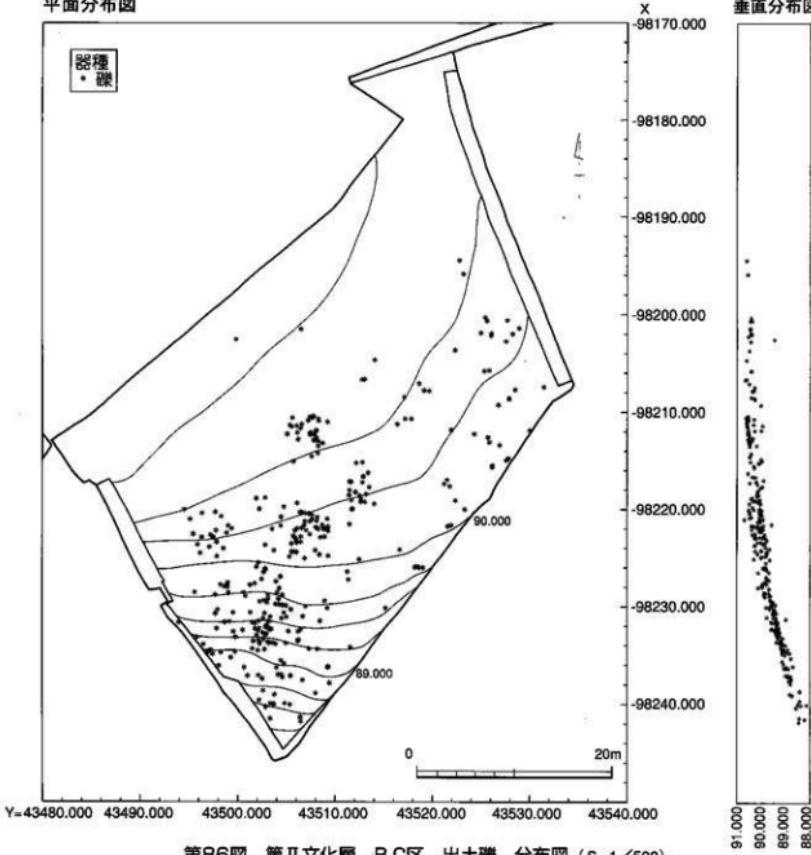
平面分布図



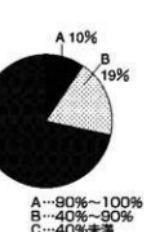
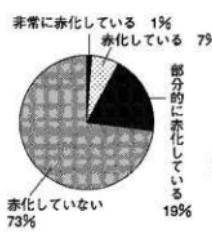
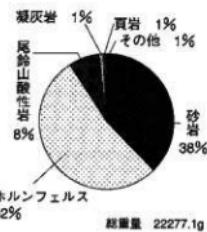
平面分布図



平面分布図



第86図 第II文化層 B,C区 出土跡 分布図 (S=1/500)



(1) 石材分類グラフ (個体数) (2) 石材別重量グラフ

(3) 焼成度グラフ

(4) 完形度グラフ

第87図 第II文化層 B,C区 出土跡 分析図

(4) D, E区の遺物

石 器 (第88図~第91図)

出土石器は79点である。器種並びに使用石材の内訳は、D, E区出土の石器・石材組成(第12表)に示したとおりである。調査面積が狭い中で形態や使用石材の異なるナイフ形石器が4点出土する。また、接合資料が2個体あるが極めて近い場所で出土している。使用石材は個体数、重量ともにホルンフェルス、次いで頁岩が多い。B, C区では出土していない黒曜石を素材とした石器が出土していることも特筆される。さらに、姶良丹沢火山灰層直下で確認した遺物集中域の石器と最大長を比較すると平均で1cm以上上回り、敲石や磨石などの礫塊石器は出土しなかった。周辺は農地整備や山芋の作付けで搅乱が進んでおり確認できないが、遺物集中域の存在が想定できる。

石材 器種	チャート	ホルンフェルス	凝灰質頁岩	黒曜石	水晶	頁岩	流紋岩	総計
ナイフ形石器			1	1		1	1	4
二次加工剥片		1	2					3
剥片	1	21		5		15		42
碎片(チップ)		10		7	1	11		29
石核		1						1
総計	1	33	3	13	1	27	1	79

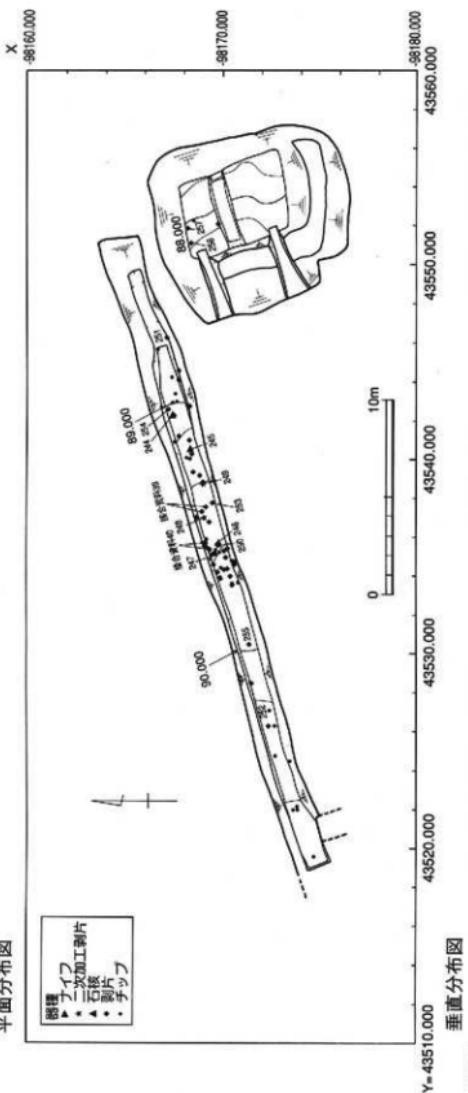
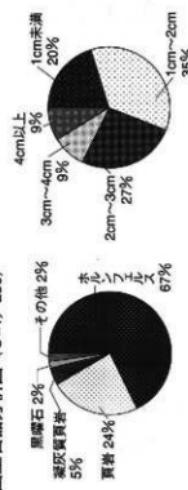
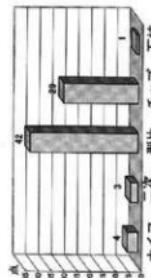
第12表 第II文化層 D,E区 出土の石器・石材組成

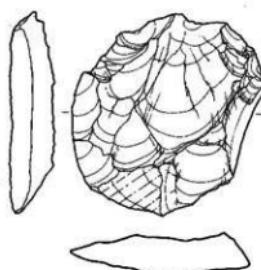
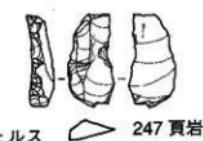
244~247はナイフ形石器である。244は基部に腹面からの二側縁加工を施し、右側縁の刃部を伴う先端部分が欠損する。245は継長剥片を素材とし切出状の形態を呈する。右側縁は先端部まで、左側縁部は基部から胴部に至るまで腹面からの加工を施す。246は左側縁部に腹面からの加工を施す。247は継長剥片を素材とし形態は瓢箪状を呈す。左側縁部に腹面からの加工を施し、右側縁部全体を刃部とする。248~250は二次加工剥片である。248は継長剥片の副部を背面から加工し分割する。249は背面に不定形剥片を剥出した作業面の様相を呈す。また、頭部調整の痕を有す。250は小型の継長剥片で下部に背面からの加工痕があり、左側縁に微細剥離を有す。251~257は剥片である。251は左側縁部に微細剥離のある継長剥片である。252は単剥離打面で、背面には不定形剥片を剥出した痕が残る。253は継長剥片で複剥離打面を有す。腹面からの力が加わって胴部で折れている。253の背面は多方向から不定形剥片を剥出した痕を残す。打面は単剥離打面で打面再生剥片と推察される。254は背面に下端部からの加撃による剥離痕を有す。255は継長剥片であるが上下部とともに折れている。また、両側縁に微細剥離を有す。256、257は同一母岩で連続剥離で剥出されたものと推察される。接合資料40は石核と石核から最終段階で剥出された剥片が接合する。打面形成後、石核を回転させて縁近くから剥片を剥出していったことが分かる。260と261は上位の搅乱層から出土した。石材を比較して260は第II文化層、261は第III文化層にはいるものと推察される。

礫 (第93図)

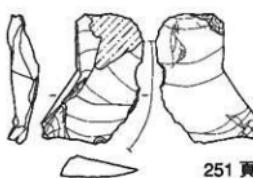
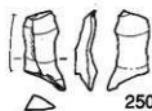
礫は49点出土し、総重量は2,669.7gを量る。石材では個体数、重量ともにホルンフェルスが60%以上を占め、これは石器の石材別重量割合でホルンフェルスが占める割合とほぼ一致する。また、赤化度では80%が赤化しておらず、完形度では破碎礫がほとんどである。この2つの傾向はB, C区における出土礫とほぼ同様の値を示す。

平面分布図

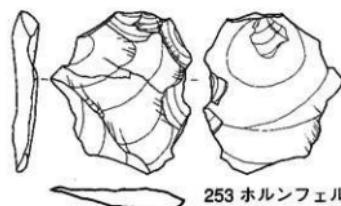
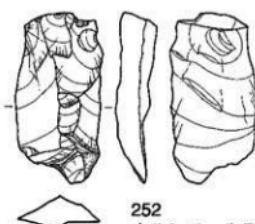
第88図 第II文化層 D-E区 出土石器分析図 ( $S=1/250$ )(4) 遺物最大長の割合  
第89図 第II文化層 D-E区 出土石器分析図(1) 器種別分類グラフ (総点数79点)  
(2) 石材別分類グラフ (総点数79点)  
(3) 石材別重量グラフ (総重量264.5g)



249 ホルンフェルス



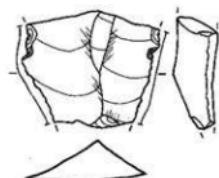
251 灰岩



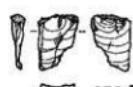
252 ホルンフェルス



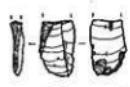
254 黒曜石



255 灰岩

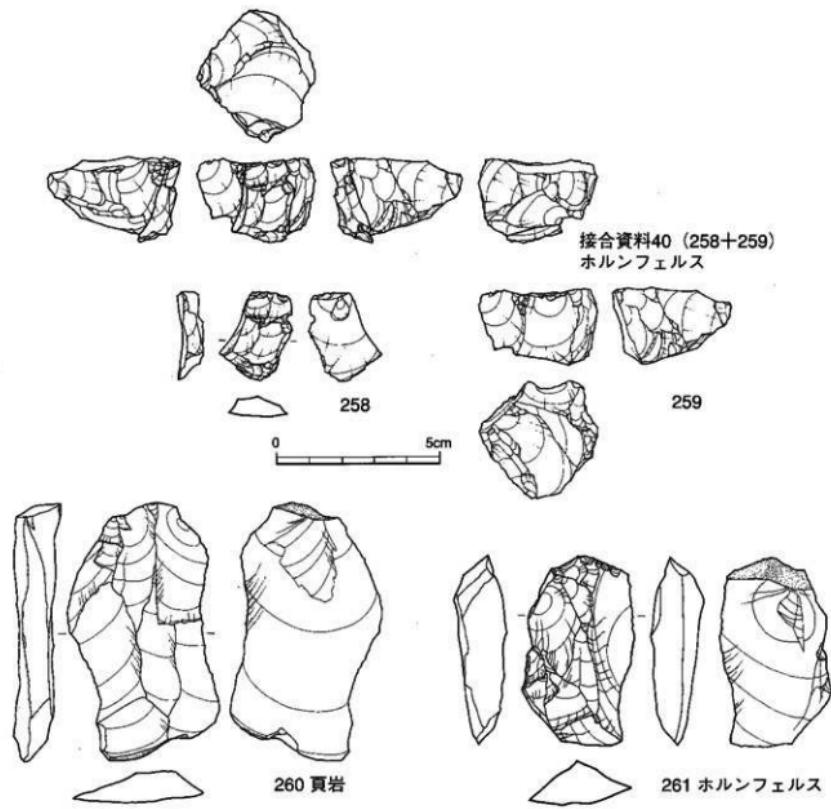


256 黒曜石



257 黒曜石

第90図 第II文化層 D,E区 出土石器実測図1 (S=2/3 No.244はS=1/1)

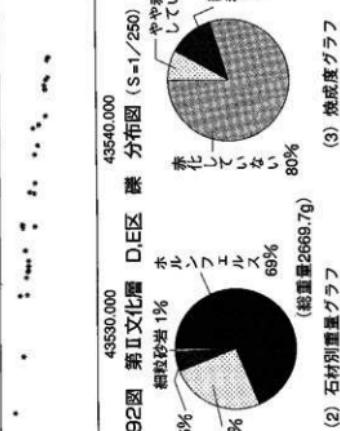
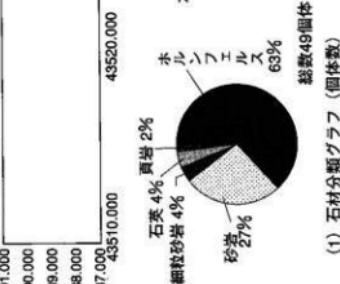
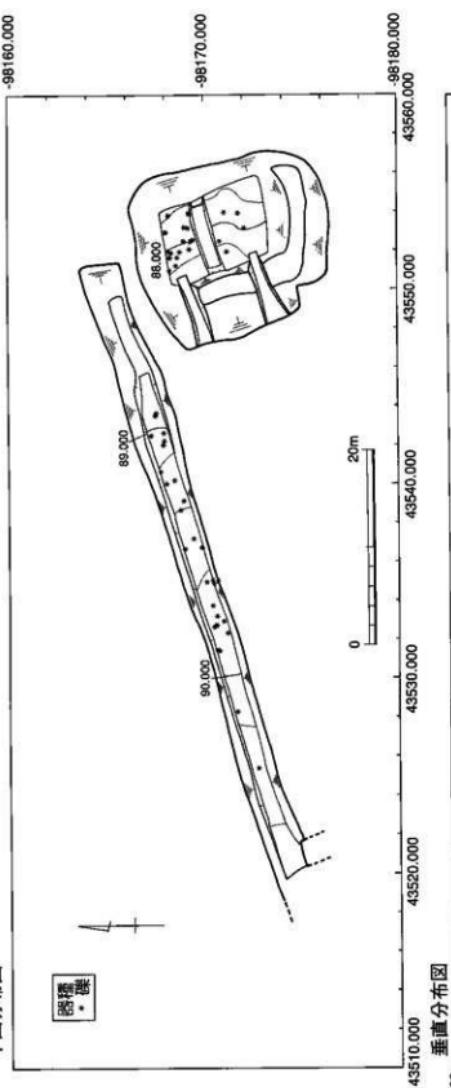


第91図 第II文化層 D,E区 出土石器実測図2 (S=2/3)

No.	器種	石材	出土区	層	復元座標 X(Y)	復元座標 Y(深さ)	レベル	復元 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
244	ナイフ	麻痺石	D	Ⅴ層	-98107.460	43542.370	89.045	D-78	1.65	0.90	0.28	0.2
245	ナイフ	真岩	D	Ⅴ層	-98168.370	43540.360	89.367	D-14	2.70	1.60	0.45	1.0
246	ナイフ	鰐頭質真岩	D	Ⅴ層	-98169.840	43535.700	89.754	D-21	2.60	1.60	0.55	1.8
247	ナイフ	鰐頭質	D	Ⅴ層	-98169.650	43535.250	89.965	D-109	2.85	1.45	0.66	2.7
248	一次加工剝片	鰐頭質真岩	D	Ⅴ層	-98169.090	43535.360	89.712	D-18	2.75	1.20	0.76	18.0
249	一次加工剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98169.020	43535.720	89.447	D-72	6.65	1.40	64.38	72.0
250	二次加工剝片	鰐頭質真岩	D	Ⅴ層	-98169.840	43535.570	89.741	D-23	2.52	1.30	0.78	1.1
251	剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98167.170	43546.570	88.962	D-10	4.05	3.10	0.98	7.3
252	剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98172.390	43525.270	90.156	D-77	5.30	2.70	1.30	14.1
鰐頭質他所	剝片	真岩	D	Ⅴ層	-98169.180	43537.540	89.681	D-16	3.65	2.10	1.00	6.4
#	剝片	真岩	D	Ⅴ層	-98168.990	43537.300	89.672	D-17	2.85	2.05	0.90	5.1
253	剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98168.520	43537.750	89.565	D-70	4.95	4.05	0.60	13.1
254	剝片	真岩	D	Ⅴ層	-98168.320	43532.590	90.115	D-61	1.65	1.55	0.80	1.0
255	剝片	真岩	D	Ⅴ層	-98171.790	43530.470	90.495	D-29	4.25	4.20	1.30	17.5
256	剝片	麻痺石	D	Ⅴ層	-98168.420	43530.190	87.919	F-27	1.28	1.05	0.85	0.9
257	剝片	麻痺石	E	Ⅴ層	-98168.240	43531.190	87.825	E-26	1.28	1.05	0.85	0.9
258	剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98169.130	43535.510	89.703	D-99	2.73	2.10	0.85	4.0
259	剝片	ホルンフェルス	D	Ⅴ層	-98169.070	43535.700	89.792	D-23	2.35	3.70	3.68	30.8
260	剝片	真岩	D				D-1	7.85	4.60	1.45	29.8	
261	剝片	ホルンフェルス	D				D-2	5.25	3.40	1.80	26.7	

第13表 第II文化層 D,E区 出土石器 観察表

平面分布図

X  
-98160.000

第93図 第II文化層 D.E区 出土譜 分析図

## (5) 小結

この文化層で確認した遺物集中域には、極めて狭い範囲内に同一母岩の碎片（チップ）を中心とする比較的小さい石器が集中する。また、接合関係の位置を固化すると、集中区域の範囲内で散らばっており、レベル差も様々である。これらのことから、石器製作を行った後何らかの目的で散らばった碎片等を搔き集めたか、他の場所で石器製作を行った後で散らばった碎片等を収集し、この場所に廃棄したという2つの様相が推測できる。4基の礫群については、それぞれの規模と特徴が異なり、南斜面から少し上がった平坦地に20~30cmのレベル差で並んで位置することから、何らかの関連があったものと考えられる。今後、同一時期の調査例を集め考察を深めたい。また、石器については始良丹沢火山灰層下位においても、石核から連続的かつ効率よく剥片を剥出する技術があることが分かる。今後はこの技術がどこまでさかのほるか、また、ナイフ形石器との共伴する石器はどのようなものかなどについて検討していく必要がある。

## 4 旧石器時代 第I文化層の遺構と遺物

### (1) 第I文化層の概要

第I文化層は、C区北西部の極一部を除いてB、C区のほぼ全般にわたって残存している。D、E区では安全面を考慮し調査をしていない。層位では火山性ガラスや輝石を伴うⅦ層の下位にあたり、混入する鉱物が減少し、土色も褐色から明褐色を帯びる層となる。本遺跡においてはⅧ~Ⅸ層となり、東九州自動車道（都農~西都間）建設に伴う調査においては「ML3」に相当する。ここでは遺構の検出には至らなかったものの、遺物は敲石や礫器などの石器が34点が出土し、礫の出土は988点を数えた。

### (2) B、C区の遺物

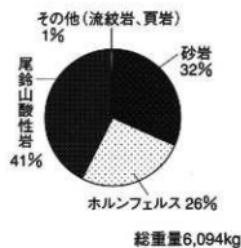
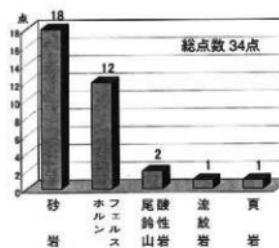
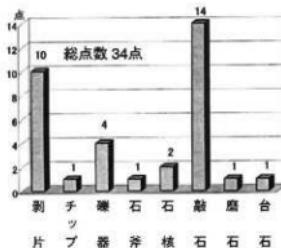
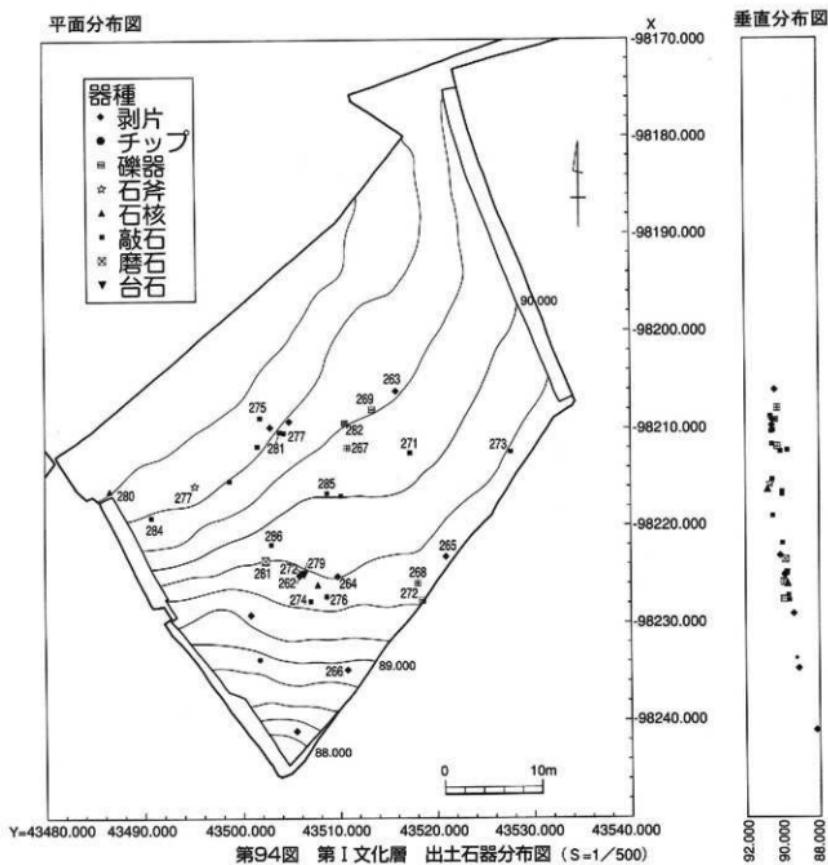
#### 石 器（第94図～第99図）

出土石器は34点で、器種並びに使用石材の内訳は、第I文化層の石器・石材組成（第14表）に示すとおりである。敲石、磨石、台石といった礫塊石器が約半数を占める。この中には敲打痕の明瞭ではない亞敲石も含む。また、自然面や節理面が多く、わずかな調整を加えて多用途に使用した礫器も4点を数える。さらに、C区西側のやや平坦な部分で石斧が1点出土した。使用石材を個体数で分析すると砂岩が50%を超え、次いでホルンフェルスとなる。しかし、重量別では、尾鈴山酸性岩の占める割合が高い。石器分布図（第94図）からは、特に集中して出土している様相は見られない。

石材 石器	砂 岩	ホルンフェルス	尾鈴山酸性岩	流紋岩	頁 岩	総 計
剥 片	3	5		1	1	10
チップ(碎片)		1				1
石 斧		1				1
礫 器	2	2				4
石 核		2				2
敲 石	13	1				14
磨 石			1			1
台 石			1			1
總 計	18	12	2	1	1	34

第14表 第I文化層の石器・石材組成

平面分布図



第95図 第I文化層 出土石器分析図

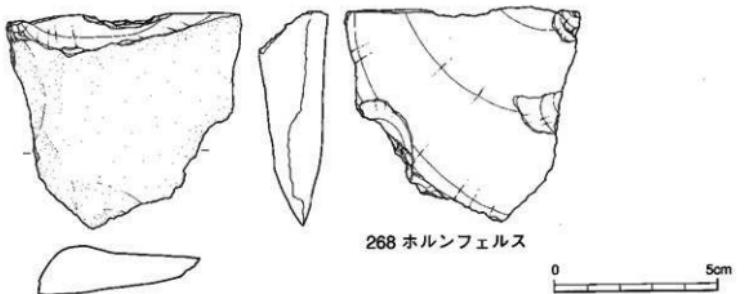
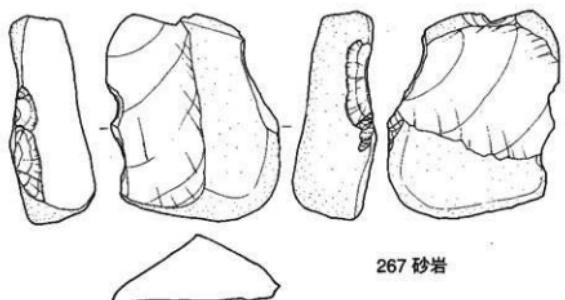
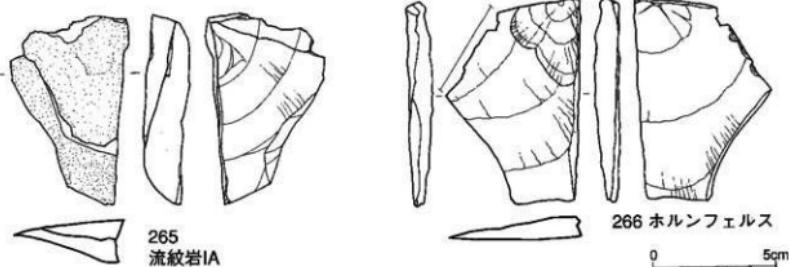
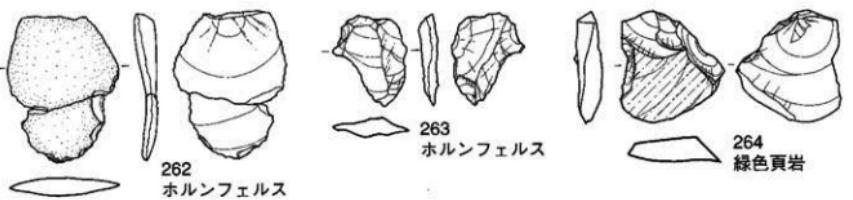
262～266は剥片である。262は背面が自然面で单剥離打面を有し、打面形成剥片の可能性もある。263は上部に頭部調整の痕跡が残る。264は背面の左右に腹面側から不定形剥片の剥出痕を有し、腹面下部には自然面も残る。打面形成剥片と推察する。265は石核の節理面を打面とした最初の剥片と推察される。幅広の剥片が背面中央からの力が加わり、左右に折れた右部である。266も幅広の剥片が中央部や右側で左右に分割した剥片である。背面右肩部に微細剥離痕が残る。267～270は礫器である。267は左側面に2ヶ所、右側面に1ヶ所に腹面からの加工の痕跡を残す。268は背面の大半を自然面が占める。裏面左下部に背面側からの少なくとも5回以上の加撃で刃部を作出する。また、上部も剥出後に腹面側からの調整がなされる。269は下部に背腹両面からの連続的な加撃により刃部を作出する。裏面には左側からの加撃で自然面を剥いだと考えられる大きな剥離痕を残す。270は上部に背面側からの細かな調整痕を有し、下部には背腹両面からの加撃で刃部を作出する。左側面は折れによるものだが、右側面は腹面下部からの加撃によって形成される。石斧を創出する際の破片の可能性がある。271～277は敲石である。271はやや縦長の砂岩礫を横位に用いたもので、直線的な縁辺を敲打面としている。272は279の台石と共伴して出土する。縁辺の鋭角部分でなく、鈍角の部分を敲打面としている。273は下部に若干の敲打痕を残す。掌握部分がやや大きいことから、使用回数は少なかったと推察する。274は271、272と類似し、縁辺の鈍角部分に敲打面を有する。また、上部にも若干の敲打痕がある。275は縁辺下部の鋭角部分を敲打面とする。敲打の衝撃で分削される。276は下部に顕著な敲打痕を有する。使用中に礫に割れが生じ、廃棄されたと推察する。277は下部に若干の敲打痕を残す。使用頻度は少なかったものと考える。278は石斧である。左右側縁部には背腹両面からの調整がなされ、刃部は自然面の曲線を利用し作成される。基部は折れている。279は断面が三角形となる台石である。3つ側面のうち二面に磨面がある。左右を石等で固定し使用したと考えられる。280は石核とした。多方向から不定形剥片を剥出した痕跡を有する。下部は背面からの剥離痕があり、これを刃部と考えた場合はチョッパーの可能性もある。281は正面左上部と裏面に顕著な磨痕が残る。また、右側面上部には若干の敲打痕を有す。282は亜礫器である。右側縁部分を刃部として使用した可能性がある。283～286は亜敲石である。敲打痕らしきものはあるが、積極的には肯定できないことから参考資料として掲載する。

石材別分布状況（第99図）では、砂岩が若干集中して出土する部分があるが、ほかは各石材とも分散した状態で出土している。表面の色調、光沢、質感、粒度、表出鉱物等を基準として石材別母岩数を求めるとき、礫塊石器の砂岩と尾鈴山酸性岩を除いて、ホルンフェルス9種類、頁岩と流紋岩が各1種類となる。ホルンフェルスに関しては、接合資料がないために確定した母岩数とはいえない。

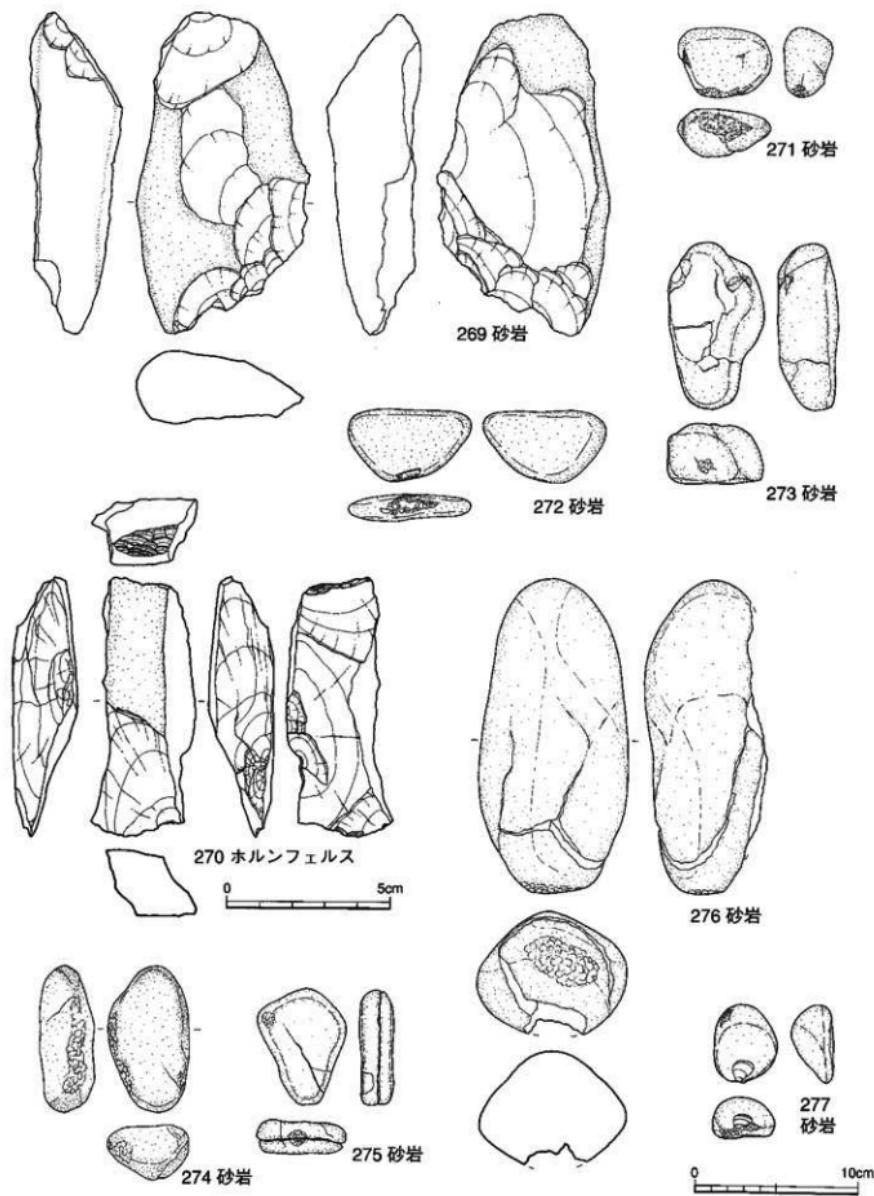
#### 礫（第100図・第101図）

礫は988点出土し、総重量68,552.8gを量る。個体数は砂岩が約70%を占め、次いでホルンフェルス、凝灰岩の順になる。重量別では砂岩とホルンフェルスで約90%に達し、1個体の重量の大きい尾鈴山酸性岩が10%を占める。完形度では第II文化層の礫とほぼ同様の割合を示し、破碎礫が約70%となる。また、赤化度に関しては、赤化していないものが90%に達し、礫群も検出されなかったことから、被熱によるものでなく酸化作用で赤変したと考える。さらに、接合関係は確認できなかった。

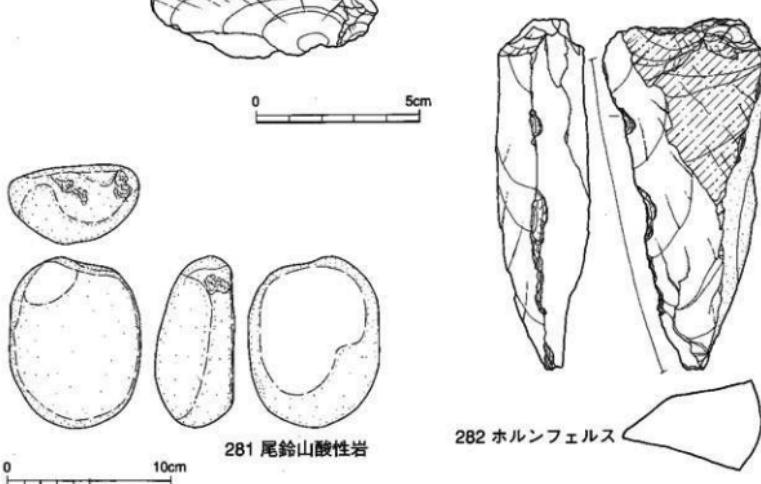
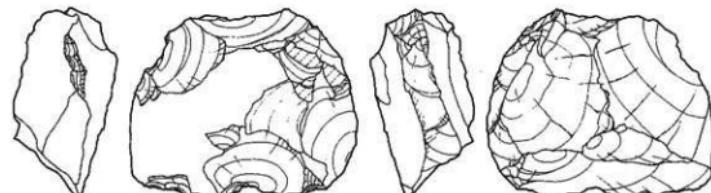
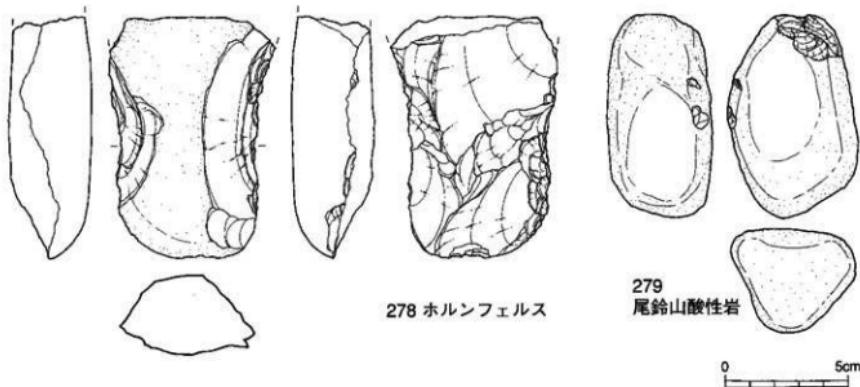
分布状況においては若干のまとまりが確認できるものの、石材並びに接合関係を考慮すると、人為的に持ち込まれたのではなく、傾斜に沿って自然に流入したものと考える。



第96図 第I文化層 出土石器実測図1【剥片、礫器】(S=2/3 \*266はS=1/2)



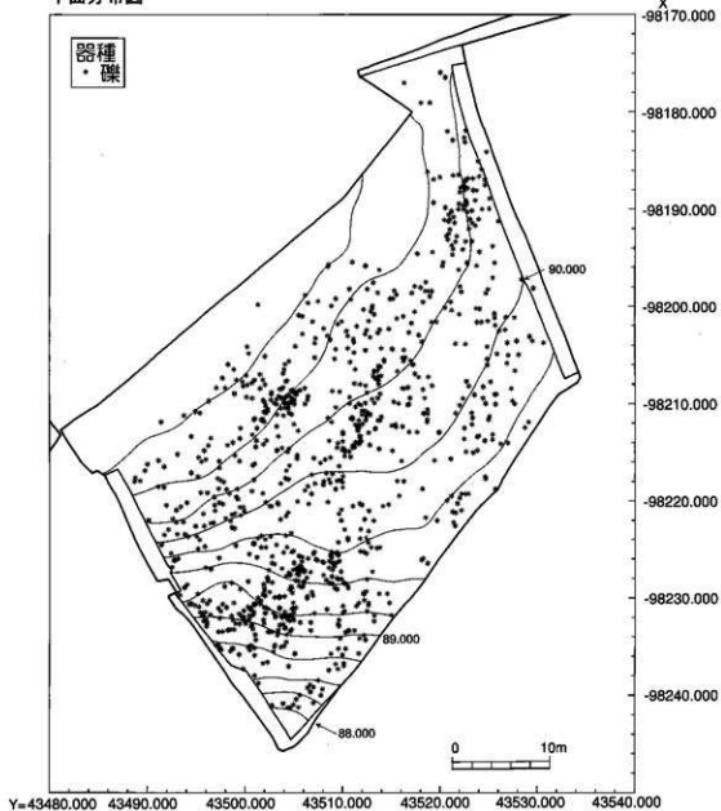
第97図 第I文化層 出土石器実測図2【礫器、敲石】(S=1/3 ※270はS=2/3)



第98図 第I文化層 出土石器実測図3【石斧、台石、石核、磨石、礫器】  
 $(S=2/3)$  ※279、282は  $S=1/2$  281は  $S=1/3$



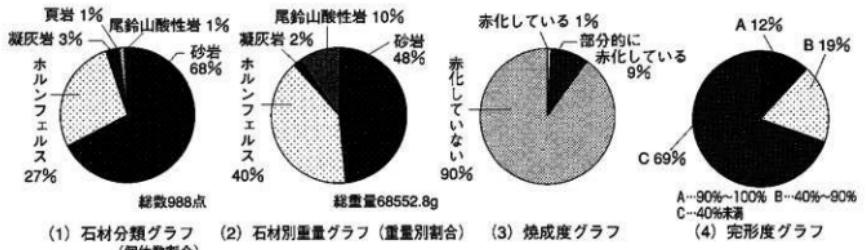
平面分布図



垂直分布図



第100図 第I文化層 出土礫分布図 (S=1/500)



第101図 第I文化層 出土礫分析図

### (3) 小結

この文化層における遺物は礫塊石器と礫器を中心で、剥片や碎片の出土が少ないとから、接合関係を調べ、剥片剥離技術や同一母岩の分布状況を把握するまでは至らなかった。しかし、石器として使用された石材は遺跡周辺で比較的入手しやすいことから、他地域からの搬入は考えにくい。石材収集範囲については、今後、同一時期の調査結果と照らし合わせて検討する必要がある。

この期における植生と環境を植物珪酸体分析から推定する。霧島アワコシ層上位で4点の資料を分析した結果、少量のウシクサ族A、シバ属、イネ科Bタイプ、ミヤコザサ節型などが検出された。また、部分的にキビ族型、ヨシ属、ススキ属、ネザサ節型なども検出された。これらのことから当時は積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した気候で、ススキ属やチガヤ属、シバ属、クマザサ属などが生育する草原的な環境にあり、部分的にはヨシ属やヌマガヤ属などが生育する湿地的なところもあったと推定される。

また、霧島アワコシ層直上で採取した炭化物の放射性炭素分析（加速器質量分析）を行ったところ、約20,000年前との結果を得た。この数値は姶良丹沢火山灰層（約25,000年前）下位であることと矛盾する。その理由として、この炭化物の採取地点は、比較的表土から浅く、姶良丹沢火山灰残存層が削平の影響で薄くなる位置であったことから、第Ⅰ文化層より新しい年代のものが混入したと推測できる。

これらの自然科学分析における詳細については第Ⅳ章に掲載する。

## 5 旧石器時代 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の遺物

### (1) 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の調査概要

第Ⅰ文化層の調査終了後、第X層～第XIII層にかけて5m×5mのトレチを南北方向に4ヶ所設定し、調査を進めた。この層位には、火山灰層の霧島アワコシ層（第X層）と霧島イワコシ層（第XIII層）が含まれ、両層ともスコリアの混入割合や粒の大きさによって2層に分かれる。東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う調査においては、XI層が「ML 4」、XIII層が「ML 5」に相当する。ここでも遺構の検出に至らず、遺物はへら形石器や礫器などの石器が7点出土し、礫の出土は112点を数えた。

### (2) 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の遺物

#### 石器（第104図・第106図）

出土石器は7点で、石材は全て砂岩である。器種と出土層に関しては第16表に示すとおりである。ヘラ形石器以外は自然面を多く残す石器で、敲打痕の明瞭ではない亜敲石である。礫器はこれまで出土した石器の中で最も大きい。また、全て南側の傾斜部分に近い2つのトレチから出土した。

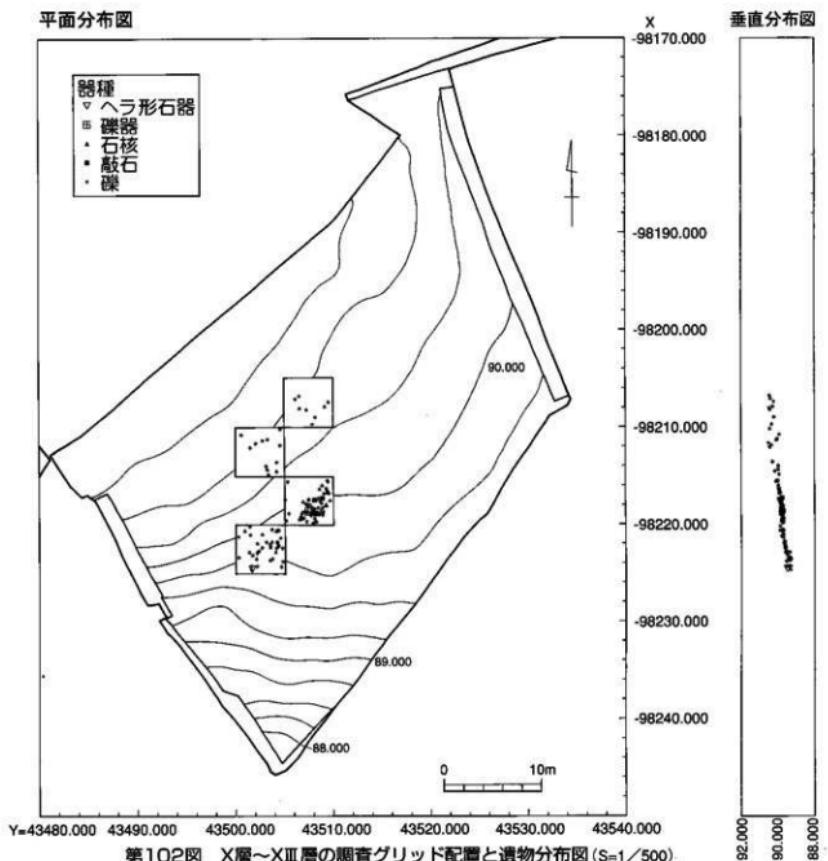
層	器種	石核	へら形石器	亜敲石	礫器	総計
Xa層				2		2
XI層				1	1	2
XII層		1	1	1		3
總計		1	1	4	0	7

第16表 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の石器及び出土層 ※石材は全て砂岩

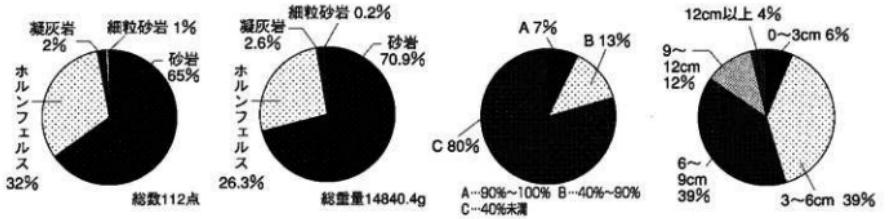
石材	砂岩	ホルンフェルス	凝灰岩	細粒砂岩	総計
X層	7	3			10
Xa層	31	10	1	1	43
XI層	10	9			19
XIIa層	2				2
XIIb層		1			1
XIII層	23	13	1		37
總計	73	36	2	1	112

第17表 第Ⅰ文化層下（第X層～第XIII層）の礫石材及び出土層

平面分布図

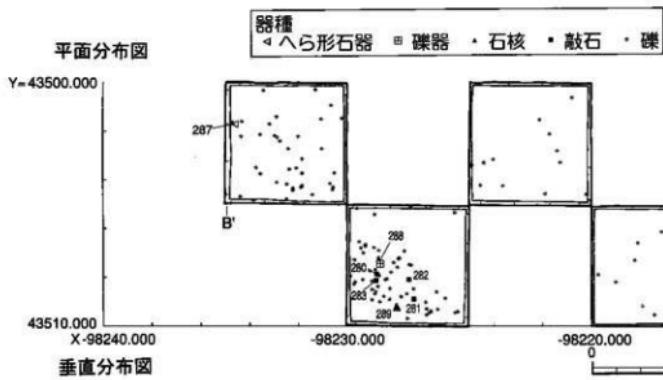


第102図 X層～XIII層の調査グリッド配置と遺物分布図(S=1/500)

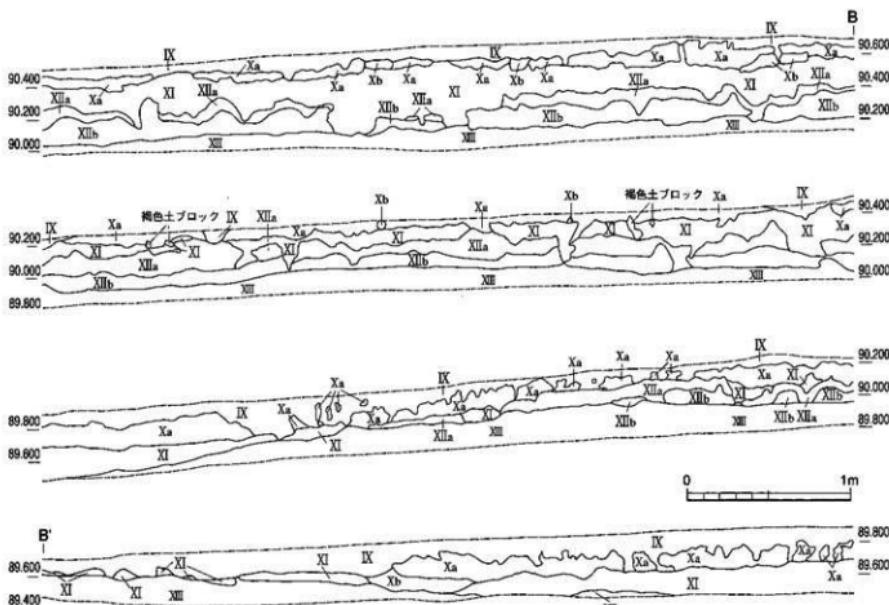


(1) 石材分類グラフ (個体数割合) (2) 石材別重量グラフ (重量別割合) (3) 完形度グラフ (4) 最大長の割合グラフ

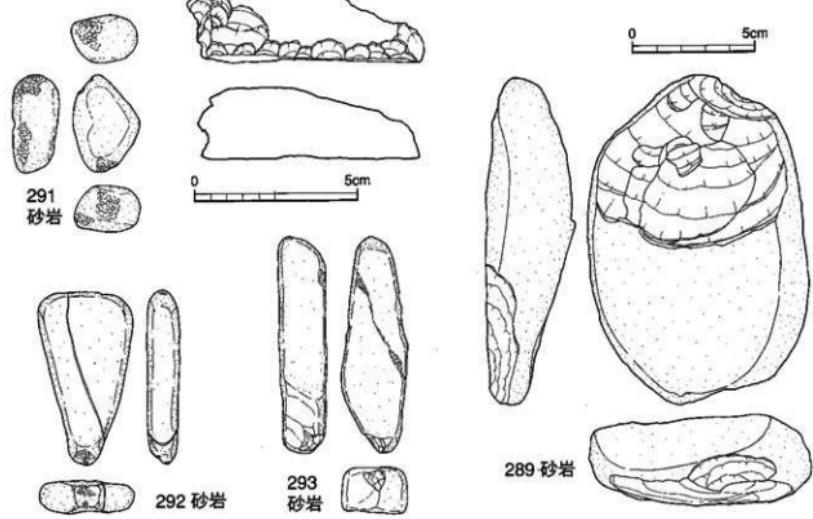
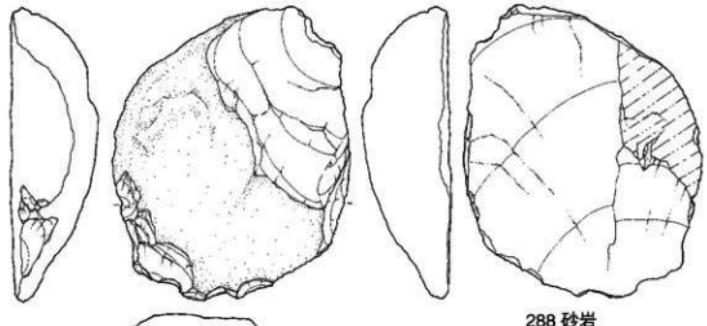
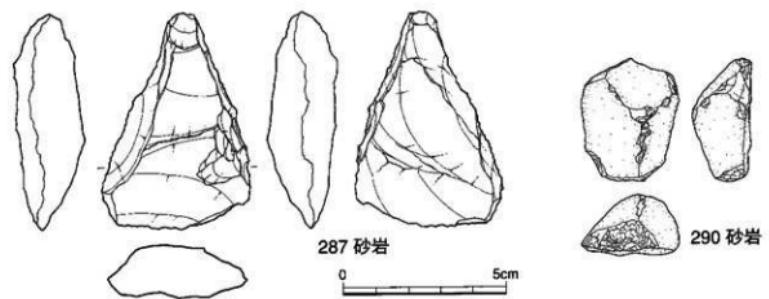
第103図 X層～XIII層の調査グリッド 出土砾 分析図



第104図 X層～XIII層の調査グリッド 遺物出土状況(S=1/200)



第105図 X層～XIII層の調査グリッド 土層断面図(S=1/30)



第106図 第X層～XⅢ層の調査グリッド 出土石器実測図 (287はS=2/3, 288, 289はS=1/2, 291～293はS=1/3)

No.	器種	石材	出土区	層	出土地層 X層	出土地層 XⅢ層	レベル	往路 距離 m	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (cm)	重量 (kg)	備考
287	ヘラ形石器	砂岩	C	X層	-9824.680	43561.700	89.493	2749	6.78	4.58	2.25	27.1	
288	碟	砂岩	C	XⅢ層	-9821.850	43559.260	89.738	2762	10.40	6.00	2.25	412.0	
289	石核	砂岩	C	X層	-9821.850	43559.260	89.767	2758	13.62	8.00	2.75	489.6	
290	砂岩	砂岩	C	X層	-9821.860	43567.860	89.756	2760	7.52	6.00	2.75	154.4	打痕有り
291	砂岩	砂岩	C	X層	-9821.750	43556.890	89.766	2755	7.65	4.97	2.85	79.8	打痕有り
292	砂岩	砂岩	C	XⅢ層	-9821.749	43556.090	89.865	2702	10.65	5.98	2.03	189.7	打痕有り
293	砂岩	砂岩	C	X層	-9821.830	43556.130	89.803	2693	13.43	3.05	2.85	229.0	打痕有り

第18表 X層～XⅢ層の調査グリッド 出土石器 観察表

287はヘラ形石器とした。下部に刃部が作出され、両側面に腹面からの加工が施される。但し、風化が著しく、剥離面の新旧関係も見られることから、石器か否かについては今後も検討が必要である。参考資料として掲載する。288は碟器である。下部に腹面からの加工を施し、比較的角度の大きい刃部を作出する。刃部の特徴からスクレイパーの可能性もある。289は石核である。やや扁平な砂岩精円礫を素材とし、表面は上部から、裏面は上下部両方向からの加擊で剥片を剥出した痕跡を残す。290～293は亜散石である。いずれも砂岩を素材石材としており、風化も著しいことから、敲打痕らしい痕跡は確認するものの確定するまでには至らなかった。今後の参考資料として掲載する。

#### 礫(第103図・第104図)

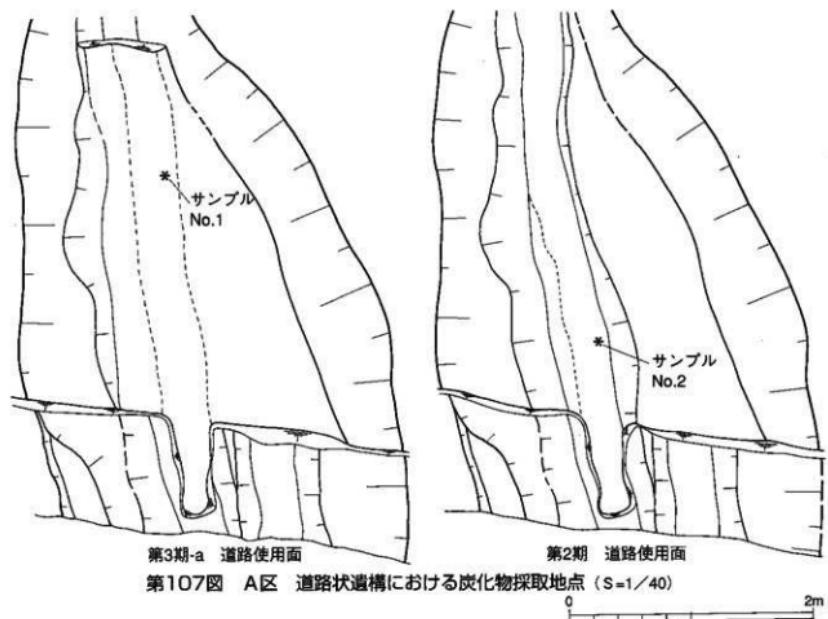
礫は112点出土し、総重量14,840.4gを量る。個体数、重量別割合とともに砂岩が約70%を占め、次いでホルンフェルスとなる。完形度では、破碎礫が80%を占め、始良丹沢火山灰層から下では最も低い値を示す。しかし、礫の大きさを最大長で比較すると平均6.43cmとなり、個々の礫は大きいといえる。また、赤化度に関しては、鉄分等の酸化作用で若干の赤みを帯びる礫はあったが、ほとんど赤化しておらず、したがって被熱している礫も無い。石材と出土層に関しては第17表に示すとおりである。出土状況については、石器と同様で、南側の傾斜部分に近いトレンチほど出土数が多い。特に北から3番目のトレンチにおいては、集中している様相も伺える。

#### (3) 小結

この第X層から第XIII層にかけては調査期間との兼ね合いもあり、面積25m<sup>2</sup>のトレンチ4ヶ所、合計100m<sup>2</sup>を掘り下げて調査を終了した。また、トレンチの壁部分を実測した土層断面図(第105図)では、南部の傾斜部分に近づくにつれ、基本層序とは異なり、一部の層自体が流出している部分も見られる。したがって遺物自体も層の流出とともに動いている可能性もある。さらに、出土した遺物の中で石器とした7点についても、自然礫の可能性もあり、石器としての特徴や用途について検証が必要である。このようなことから文化層の存在について言及することはできない。今後の調査、研究の成果を待ちたい。

この期における植生と環境を植物珪酸体分析から推定する。霧島イワオコシ層上位で3点の資料を分析した結果、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、シバ属なども検出された。また、部分的にエノコログサ属型、キビ族型、ネザサ節型なども検出された。これらのことから当時はススキ属やチガヤ属、シバ属、クマザサ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、気候的には積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した状況にあったと推定される。さらに、霧島イワオコシ直下層で3点の資料を分析した結果、1つの資料からメダケ節型などが検出されたが、いずれも少量であり、他の資料においては植物珪酸体は検出されなかった。これらのことより当時は河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと推定される。(第IV章参照)

## 第Ⅳ章 自然科学分析



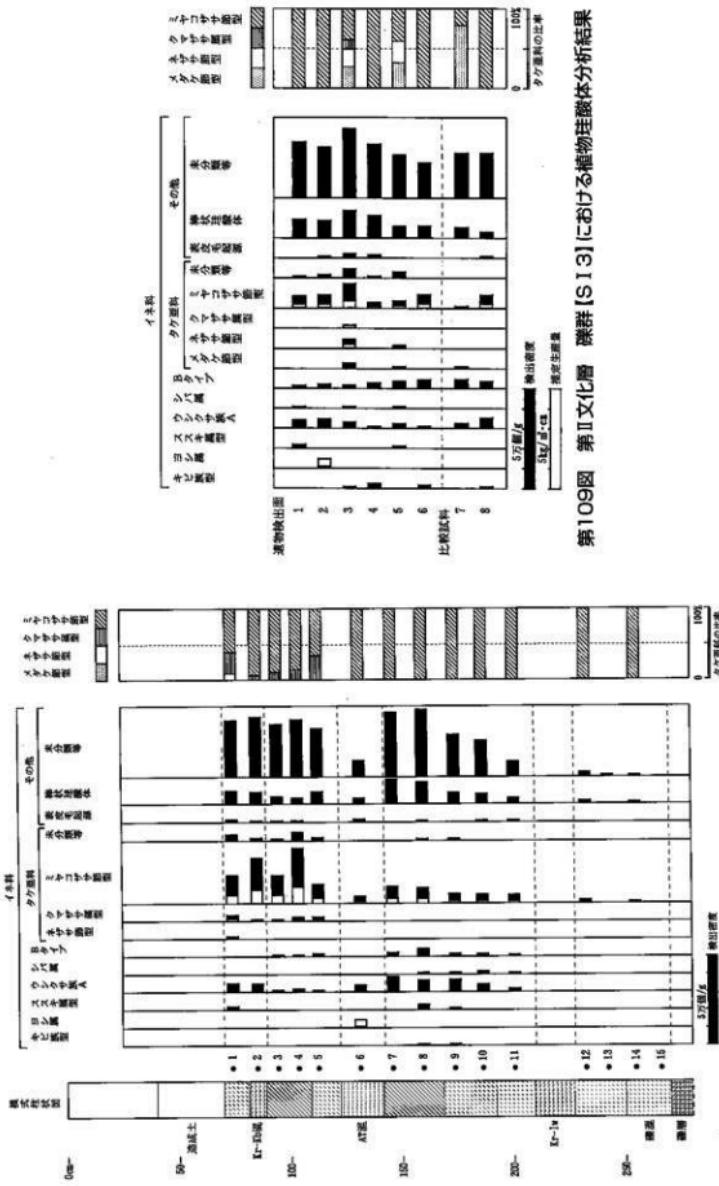
試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	A区 道路状遺構	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 2	A区 道路状遺構	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

### 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	層年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	$290 \pm 50$	-25.6	$280 \pm 50$	交点: cal AD1640 1 $\sigma$ : cal AD1520~1580, 1630~1660 2 $\sigma$ : cal AD1480~1670, 1770~1800 cal AD1940~1950	151366
No. 2	※炭素量不足のため測定不能				151365

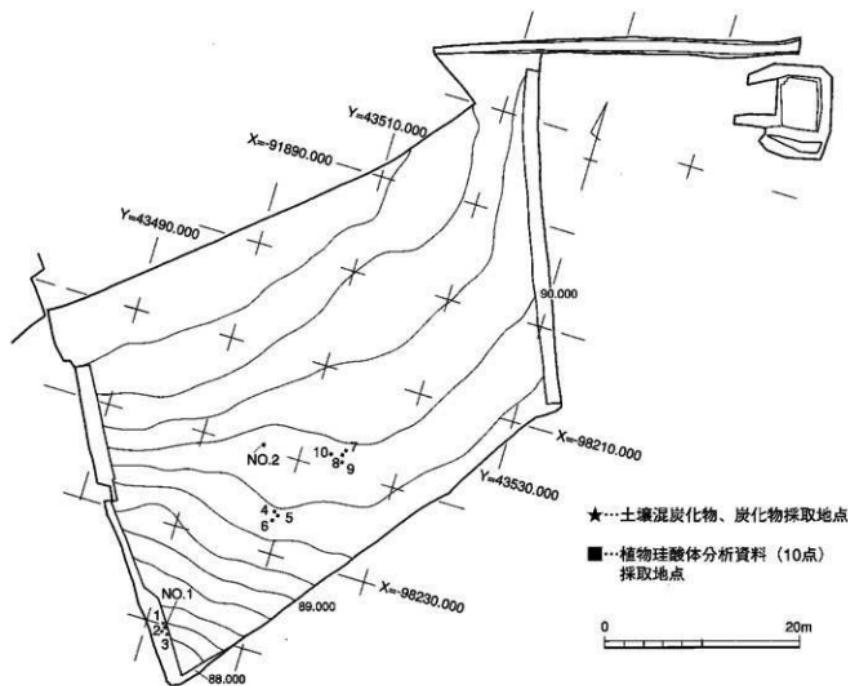
第19表 A区 道路状遺構における放射性炭素年代測定結果





第108図 基本土層（調査区西壁）における植物珪酸体分析結果

第109図 第II文化層 様群[S13]における植物珪酸体分析結果



第110図 自然科学分析(放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析)の資料採取地点(第I文化層) (S=1/500)

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	B区,Kr-Iw直下	土壤混炭化物	酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 2	C区,Kr-AW直上	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

#### 測定結果

試料名	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	層年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	6540±70	-26.8	6510±70	交点: cal BC 5480 1 σ: cal BC 5510~5450, 5410~5390 2 σ: cal BC 5610~5330	153022
No. 2	18860±80	-26.0	18840±80	交点: cal BC 20410 1 σ: cal BC 20860~19980 2 σ: cal BC 20960~19890	153023

第21表 霧島イワオコシ層直下、霧島アワオコシ層直上における放射性炭素年代測定結果

検出率（単位：×100個/ℓ）

分類群	学名	地点・試料			K-Fauna下			K-Fauna上		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科	Gramineae (Grasses)				7		7	7	7	
エノコログサ属型	<i>Setaria</i> type				14		7			6
キビ族型	<i>Panicaceae</i> type									
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)				7	7	7	7	7	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type				54	43	14	7	7	6
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type				20	6				19
ウシクサ族B	<i>Andropogoneae B</i> type									19
シバ属	<i>Zoysia</i>				14	7	6	7	14	13
Bタイプ	B type						14	7		
ダケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							7	7	
メダケ断型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	8			7	6	7			6
ネササ断型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>									6
クマササ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )				61	43	14	14	29	13
ミヤコササ断型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>				14	22	6	35	7	6
未分類等	Others									
その他のイネ科										
表皮毛起源	Husk hair origin				7	7	6			
棒状柱體	Rod-shaped				95	86	48	35	43	39
未分類等	Others					257	294	233	216	222
(海綿骨針)	Sponge					7		191	200	
植物生體体總數	Total	15	0	0	534	531	417	363	330	317

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m<sup>2</sup>·cm）

ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	<i>Miscanthus</i> type	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>
			0.09		0.03	0.03
					0.18	0.13
					0.21	0.04
					0.04	0.09
					0.04	0.09
					0.05	0.05
					0.05	0.05
					0.04	0.04
					0.04	0.04
					0.04	0.04

タケ亜科の比率(%)

メダケ断型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>
	100			
			85	100
			85	100
			85	100
			85	100

第22表 鳴島アワオコシ層直上、鳴島アワオコシ層直下における植物珪酸体分析結果